DESIGN THE GRADUAL CHANGE VOL.10

EL ZINE



POLISH WOMAN PUNK ARTIST
Kaska-DOGSTAILART

チェコスロヴァキア・パンク・ロック/ハードコア
その知られざる歴史　1979-1989

INSANE SOCIETY

INEPSY

SYSTEMATIC DEATH
PIPECUT GIG IN NY

MIDWAY STILL

Cock Sparrer

Tokyo Leather Boys

Contents vol.10



POLISH WOMAN PUNK ARTIST
Kaska-DOGSTAILART



現在はドイツのベルリンに暮らすポーランド出身の女性アーティスト、Kaska-DOGSTAILART。
僕がベルリンでぼけ〜とした日々を過ごしていた時に(Vol.7参照)、スクワットやカフェでビール/食事を何度もご馳走してもらい大変お世話になった人物なのですが、実は彼女、これまでにWOLFBRIGADEやFUCKED UP、SKITKIDS、MÖNSTERなどといったハードコア/パンク・バンドのアートワークを手掛けていたのです。
パンクの世界においても、楽器やマイクではなく、筆を握って自己の表現に情熱を燃やしている素晴らしいアーティストが数多くいます。世界的に見ると、例えばパスヘッドなどはその筆頭でしょうが、Kaskaはまだ(特に日本では)ほぼ無名の存在。アメコミっぽい力強いタッチと、写実的な要素をミックスさせた奇妙にも味わい深いアートワークに魅力を改めて感じて、今回のインタヴューを決行しました!彼女の作品の数々と合わせて楽しんで頂ければ幸いです。

■まずは、子供の頃をどんな風に過ごしていましたか?パンクと初めて出会ったのはどういった形でした?

「ポーランドの小さな町(コンスタンチン＝イェジオルナ)で育って、その後はワルシャワ(ポーランドの首都)で暮らしていたわ。私が育った町は、大都市で働く人たちが寝るために帰ってくるような典型的な郊外。通勤にうんざりするくらい時間がかかるようなところね。愛すべき家族と一緒だったけど、狭い家だったな。小さな部屋が3つあるアパートで、祖父母と両親、それに弟と暮らしていた。誰も音楽になんて興味がなくて、家族は読書をしたり音楽やラジオを聴いたりする代わりに、大きな音でテレビを見ることのほうが好きだった。
いつの頃だったか思い出せないんだけど、私と両親とで親戚の家を訪れたことがあったの。その時、従兄弟の部屋で私がそれまで聴いたことのなかった音楽を一日中聴かせてもらった。この日が私がキチンとパンクと引き合わされた日ね。初めて聴いたバンド、それはBAD RELIGIONだったわ(今でもこのバンドは大好き)。それから私はポーランドのバンド、KULT、ARMIA、SIEKIERA、DEZERTERを見つけ出して、その後はNO MEANSNOやVICTIMS FAMILY等々も聴くようになっていったの」

■絵を描くようになったのはいつのことですか?どんなきっかけで?

「私は子供のときからコミックが大好きで、今でもずっと好きなんだけど、ポーランドではクラシックなコミックであるFunky KovalやベルギーのThorgalをもう延々と描き写していた。実際、現実的な描写って一度も習ったことがないわね。まだ私が両親と一緒に暮らしていたとき、大量のパターンとすごく抽象的で奇妙なものを描いていた。17歳になって両親から離れて自分で生活するようになると、私はバイク便の会社で働き始めた。バイクにたくさん乗って、そしてマリファナを吸ってたわね。アートをやる時間は全然なかったけど、コミックや美術書は買っていた。それから2、3年後に私はベルリンに引っ越して、そこで私はゆっくりとだけど再び描き始めた。パソコンを使ってショーのフライヤーやポスターをいくつか作ったり。でもこの当時は、人が作ったアートワークをよく流用していたのよ」

■過去にバンドをやっていたことは?

「バンドって一度もやったことがないの。残念ながら私には音楽の才能はないみたい。ベースを買ってもらったことがあって弾いてみたんだけど、私ってレイジーで、弾いていても、いつも他のことがしたくなっちゃうのよね」

■ポーランドからベルリンに引っ越したのはどうして?

「ホント、偶然!全然計画なんてしていなかったわ。ベルリンに移る前からそこで暮らしている友達を何人か知っていた。それにショーを見に時折ベルリンには来ていたし、この街とパンク・シーンも大好きだった。確か1999年か2000年だったと思うんだけど、色んなことが生活に起こって、私は学校を辞めて仕事も失って、おまけに友達も引っ越してしまった。それで私は旅に出たの。ある夏、私と友人とでギリシャに行ったんだけど、その後ベルリンも通ったのよね。そしたらベルリンに住んでいる友達が、夏の間、自分の部屋で暮らしてていいよって提案してくれて。ポーランドでの生活に未練もなかったから、それからずっとベルリンで生活するようになったのよ」

■どうやってパンク・シーンと関わるようになったのですか?ベルリンではあなたが描いたポスターを街中でよく見かけました。MASS KOTKIやSKITKIDS、CHAIN BREAKERなどといった、あなたがアートワークを手掛けたレコード/CDも何枚か持っていますが、どれも素晴らしいですね。

「ポーランドのパンク・シーンには既に色々と関わっていたわ。沢山のショーを企画して、国内を旅行してバンドを見ては、色んな人たちと知り合いになっていった。ベルリンに移ったとき、私はベルリン・パンク・シーンに深く関わっていて、レコードを出したりショーをやったりしているパンクスと同居していたの。自分のアートに関して結構自信が持てるようになって、カレンダーをデザインして作ったんだけどこの企画が凄く評判が良かった。パンク・シーンだけで合計90部売って、色んな人たち/バンドからデザインを依頼されるようになったのよ。この企画を通じて、パンク・シーンに関わってて素晴らしいスクリーン・プリントを作っているOlliという男性と出会ったの。彼は沢山のD.I.Yプロジェクトを行っていた。
私たちは一緒に色々なバンドのデザインを制作したわ。INSUICIETY、CHAIN BREAKER、FUCKED UP、SKITKIDS、MÖNSTER、CRUDE、SOLID DECLINE、WOLFBRIGADE、BOREDOM、SAND CREEK MASSACREとかね。それに沢山のコンサートのポスターも彼の作業場で印刷したわ。リストにすると長くなりすぎるくらいに、彼はもっと色んなバンドを手掛けている」

■パンクとは関係ない絵も描いてますか?

「そうね、色々とやっている。私は違ったスタ

イルが好きだし、違った方法で創作するのが好き。パターン、抽象的なもの、現実的な描写、壁画、コラージュ、フォトショップによる特徴的な表現、紙焼きの写真を使ったりとかね」

■絵を描く過程についても聞きたいです。最初に手で描いてから、イラストレーターとフォトショップ(どちらもデザインには欠かせないPCソフト)を使う感じですか?

「それは企画かアイデアによるわね。通常、まずは参考となるような写真を探して、それから自分のやり方で描いている。後からそれをスキャンしてコンピューターに取り込んで、フォトショップとイラストレーターを使うわ」

■では、どうやって絵のインスピレーションを得ていますか?

「それも企画次第になるわね。時々、私が何を描きたいかすぐに分かるときもあるけど、良いアイデアが浮かんでくるまで時間が必要なときもある」

■好きな画家やペインターは?

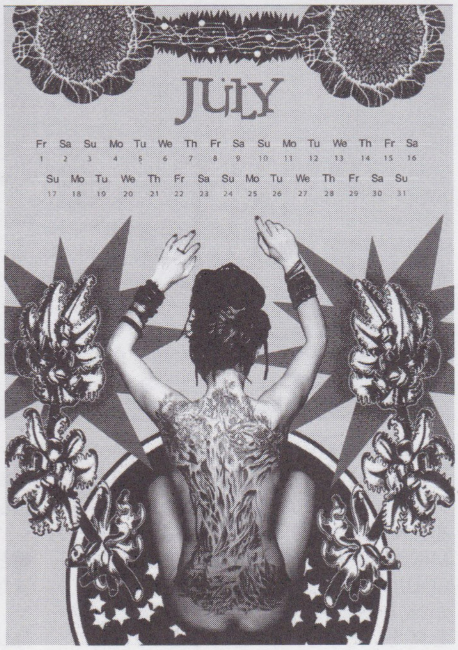
「この10年間ずっとお気に入りの画家で、これからも一生好きでいると思うのは、Joe Coleman。その次にGlenn Fabryかな。Alex Ross、Frank Miller、Eduardo Risso(100 bullets)、Yuta Onoda、Usugrow、Mac、Todd Schorr、Robert Williams、Derek Hess、TomerとAsaf Hanuka、Sugi、LeipzigのRose、Thomas Ott、Charles Burns、Marek Raczkowski、Skinner、Gabriel Rodriguez、Tim Sale、Sean Phillips、Jeremy Fish、Alex Pardee、Jeff Soto、Mike Giant、Frank Kozik、Pusheadなんかも好きね。…キリがないわよ!」

■日本のバンドだとZENI GEVAやCORRUPTEDが好きでしたよね。どんなところが特に気に入っていますか?最近、よく聴いているバンドは?

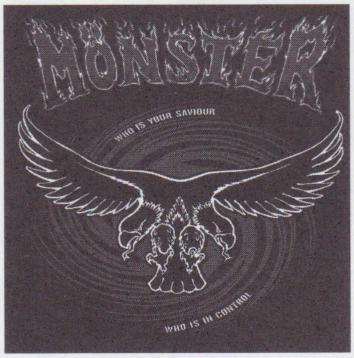
「私が初めてZENI GEVAを聴いたのがいつだったのか覚えていないんだけど、吹っ飛ばされたわね。確か「Desire For Agony」LPだったと思うけど、完全に心を射抜かれた。それから他の音源も探し出して、彼らの作

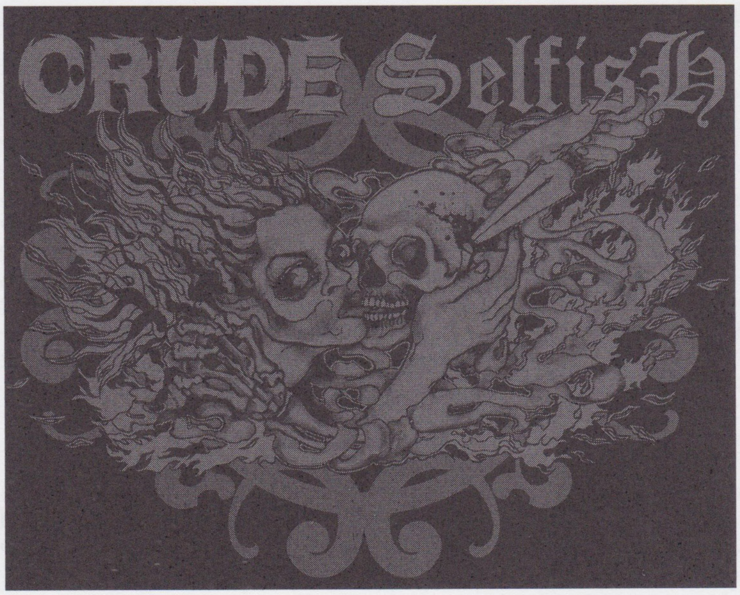


















品は全部好きよ。スロウで滅茶苦茶ヘヴィで、素晴らしいミュージシャンよね。最近はドゥーム・メタルかスロウ/スラッジ・バンドを色々と聴いてて、NEUROSISにWINTER、MINDROT、BOLT THROWER、EYE HATE GODとか。それとHIS HERO IS GONEなんかね。CORRUPTEDはベルリンでのライヴを見たんだけど、彼らを見た後の2日間は全然眠れなくなったわね」

■Morgen Rotで働いてどれくらいになりますか?僕はヴェジタリアンではないですし、日本にはあまりそういったお店もないので、初めてちゃんとしたヴェジタリアン料理をそこで食べたのですが、凄く美味しくて驚きました。

「4年間くらいMorgen Rotで働いているわ。私たちはヴェーガン/ヴェジタリアンのカフェ/バー/レストランで、そして政治的には左派の店よ。いつも週末には大豆を使った色んなメニューのヴェーガン/ヴェジタリアン料理をブランチで出している(それにヴェーガン・カクテルやコーヒー、ケーキとかもね)。ヨーロッパでパンクスであるということは、ヴェーガンであるかもしくは最低限でもヴェジタリアンであることを意味している。動物の権利という考えは私たちにとって、とても大きな問題なの。肉を食べないということは、巨大な食肉企業に対する反対の意志を意味しているし、不必要に動物が殺されないためでもある。ベルリンみたいなところで暮らしていれば、ヴェーガンであるのはとても簡単ね。肉を使わずに、安くて美味しい料理を出すバーやレストランが沢山あるからね」

■ところでMorgen Rotのオーナーもパンクスなんですか?

「Morgen Rotってコレクティヴな場所だからボスっていないのよ!!!私たちは14人のコレクティヴとしてここを所有しているの。左派/アナーキスト/オルタナティヴにとっては基本的にオープンな場所よ。政治的な会合にもね」

■ベルリンのパンク・シーンについて。刺激的なシーンに感じましたが、あなたはどう思っていますか?

「私はここに暮らして10年になるけど、ベルリンのパンク・シーンはなんて素晴らしいんだろうと未だに心を奪われている。クラスト、ハードコア、メタル、パンク、それにハードコア・パンクの大きなシーンがある。それらが分離せずに混ざり合っているのもグレートなところよね。
ここには非営利で運営されているアンダーグラウンドなパンクの会場が沢山あって、そこでショーを見ることが出来る。いつも一週間のうちに最低でも一回は、時には3回くらい素晴らしいショーが開催されていて、あなたは絶えず新しいバンドを見ることが出来る。新しいバンドがショーに出演することによって、多くの人たちがコンサートに来るの。2、3のレコード・レーベルがあり、素晴らしいレコード屋もあり、D.I.Yで驚くほど素敵なアイテムを作るアーティストもここにはいる。そして数多くのバンドが演奏するためにやって来て、旅行者も沢山来てはショーを見ていく。ここのハードコア・パンク・シーンに悪いところなんてないと思う。私はベルリンがとっても大好きだから11年目もここで迎えるでしょうね」

■将来について。今後どうしたいとかありますか?

「未来なんてないわよ!!…でももっと旅行はしたいな。オーストラリアとニュージーランドへね。Ajka 13(Six Fingers Print/彼女のブログはもうすぐ出来るはず)とのコラボレーションを始めたんだけど、私たちはCRUDEの新作LPの特別仕様盤のジャケットをやったわ。あとCRUDEとSELFISHのツアーTシャツも。彼女とは過去にMÖNSTERとINSUICIETYのアートワークも一緒にやったわね。この冬はずっと彼女と一緒に作業するつもり。それでいくつか素晴らしいアートワークを作れたらいいな。あとはインクと書法についてもっと勉強したい!」

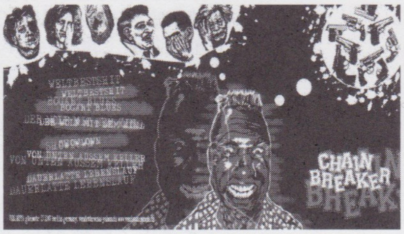
■日本の読者にメッセージを。ありがとう!

「ファック・オフ!…重要なことはパンクであり続けるってこと!…あとは、デザインの依頼を待っているわよ。日本のパンク・バンドのアートワークももっとやりたいのよ!」











KASKA-DOGSTAILART



THE SECRET HISTORY OF PUNK ROCK AND HARDCORE IN CZECHOSLOVAKIA (1979 - 1989)

チェコスロヴァキア・パンク・ロック/ハードコア その知られざる歴史



TEXT:Filip(SEE YOU IN HELL/orba@seznam.cz)

独裁政治下のパンク・ロック

まず最初に歴史のおさらいを簡単に。

チェコスロヴァキアという国は1948年10月28日に誕生し、1992年12月31日に、チェコ共和国とスロヴァキアへと平和的に分離した。誕生から分離までの間、人々は20世紀における最悪の独裁政治2つに苦しめられてきた。ファシズム(1939年から1945年)と共産主義(1948年から1989年)がそれにあたる。

1960年代後半には、"プラハの春"と呼ばれた一時期があり、支配階層が柔和化することにより自由な政治体系が徐々に容認されていった。しかし、この試みは1968年8月21日に起こったソヴィエト連邦軍(及び"ワルシャワ条約機構"加盟国の軍隊)の介入により打ち砕かれることになった。

このことにより、1970年代は"灰色"の時代を迎えることになる。"正常化"と呼称された数年間で、多くの人々はその政治的信念のせいで職を失ったり、西側諸国での生活を求め亡命した。その結果、政府の締めつけはより厳しくなっていった。

したがって、70年代後半にUKでパンク・ロックが爆発し、その後西側諸国全体に飛び火していった時、ここで暮らす僕たちはまだ共産主義(国家資本主義という表現の方が適しているかもしれない)政権が支配する、鉄の掟のもとでの生活を強いられていたし、外国で暮らしている人々には想像し難いことが数多くあった。

分かりやすいように、当時の状況を少しだけ説明しよう。

そこにはたった一つの政党(チェコスロヴァキア共産党)しか存在しなかった。選挙は強制であり、政治的対立も禁止されていた(すれば投獄されるか、西側諸国へ強制追放される)。そしてソヴィエト連邦は僕たちの最良の友人とされていたのだった(そのため学校ではロシア語を学ばせられる)。

カルチャーにおいても酷い検閲があった。政府が公認したアーティストしか公共では活動出来なかったし、それらの芸術は"社会主義の規則"に従わなければならなかった。音楽にしてもそうだ。バンドはその音楽と歌詞が地元の文化委員会の承認を得なければ、ギグが出来なかった。ロックのクラブもなければインディペン

"鎌と槌"。チェコスロヴァキアで多用された共産主義のシンボル。



デント・レコード・レーベルもない(政府によって運営・管理されていたレーベルが3つだけあったが、そこからレコードを出したものは誰もいなかった)。

僕たちは西側諸国から完全に孤立した中で暮らしていた。国境(ドイツ、オーストリア)は閉ざされ厳重に警備されていた。人々はまず西側へ旅行するための許可を申請しなければならなかった。そしてそれを得るためには、長く困難な過程を経なければならない。政府は、一度国外へ出た人々が戻ってこないことを危惧していたのだった(そして大部分の人たちは実際に戻ってこなかった。1948年以降、アメリカ、ドイツ、スイスへと脱出した親戚が僕にはいる)。

ほとんどの場合は、他の社会主義陣営の国々しか訪れることが出来なかった。西側の商品の輸入は厳重な管理下におかれ、買うことが出来るものと言えば、99パーセントは政府が生産した"社会主義経済"における商品。それらは品質も開発も、西側から見れば何年も遅れたようなしろものだった。

西側のラジオ、テレビ番組も特別な電子装置によってブロックされている。言うまでもないだろうが、店でパンクのレコードを買うことなんて不可能だったし、西側のパンク・バンドがここにツアーに来ることもあり得なかった。

システムは法律から逸脱し、規制されることなく人々が行動するのを許さなかった。ヒッピーやパンクス、メタルヘッズといった若者のサブ・カルチャーはこう見られていた。

"イデオロギーを惑わし、清廉潔白な社会主義の若者を腐敗させる目的で、西欧帝国主義の手先が我が国に持ち込んだ退廃的な生活様式"と。

言うまでもなく、このような対立的状況は後に比類なき強固なパンク・ロック・ムーヴメントを、ここにもたらすことになる。

東側諸国のパンク・ロック

チェコスロヴァキア社会主義共和国のパンク・ロックとハードコアの話しをする際には、他の社会主義国についても触れておかなければならない。そこには興味深い差異がある。

一つの側面として、ユーゴスラヴィアやポーランドは確実にここよりも自由があった。一方でルーマニア、ブルガリア、ソヴィエト連邦の状況はかなり悲惨なものだった。

チェコスロヴァキアと東ドイツは、自由化が進む80年代後半においては特に、それらの"中間"に位置しただろう。

それでもまだ、PoltonやYugotonといったレコード・レーベルがパンクのレコードを正式にリリースし、西側諸国のバンド(D.O.A.、UK SUBS、INSTIGATORSがポーランドで。RATTUS、M.D.C.、AMEBIX、INFERNOがユーゴスラヴィアで)がプレイしていた、80年代のユーゴスラヴィアやポーランドほどの自由はない。

その頃、チェコスロヴァキアではたった一枚しか、正式なパンクのレコードはリリースされていなかった(Supraphonレーベルが1988年に出したVISACI ZAMEKの7インチ)。そして、西側諸国のパンク・バンドの正式なギグも一度開催されただけである(ドイツのDIE TOTEN HOSENが1987年にプレイしたが、ギグは大規模な暴動となって終了!)。

それが恐らく、みんながチェコスロヴァキアのバンドよりも、DEZERTER、MOSKWA、SIEKIERA、ARMIA、TZN XENA、REJEST RACJAなどといったポーランドのバンドや、もしくはU.B.R.、TOZIBABE、III KATEGORIJA、PARAF、PEKINSKA PATKAなどといったユーゴスラヴィアのバンドを知っている理由だろう。それにどのバンドも正式なレコードを出している(もしくは最低でもコンピレーションには参加しているはずだ。「Jak Punk To Punk」LPや「Fala」LP、「Ljubljana Hardcore」LPなど)。

チェコスロヴァキアにも80年代にA64、RADEGAST、F.P.B.、ZONA A、H.N.F.といったバンドはいたが、彼らが当時、ヴィニールを自分たちの国でリリースするチャンスは皆無だったのだ。

(80年代半ばから)Maximum RocknRoll誌にシーン・レポートを掲載していたことで知られ、20年以上もリリースを続けている素晴らしいレコード・レーベル、Tian An Men 89(www.tam89records.comをチェックしてくれ)を運営しているLük Haas。

世界中の"異国/未知"パンク・シーンの素晴らしいサポーターである彼の、この時代に関するコメントはかなり正確だと思う。

Lük、フランス出身の彼は、80年代初期にポーランドとチェコスロヴァキアを訪れ、彼の著書"Discography of Eastern European Punk Music 1977-1999"の中で紹介し、こう記述している。

『多くの東ヨーロッパの国々は、"西側の民主主義国家"と同じくらい古いパンクの歴史を有している。それにも関わらず、彼らのシーンの現実と発展は、我々のものとは非常に異なった経路を経験することとなった。

一つの要素としては、孤立が挙げられる。そういった国々のいくつかは事実、世界と切り離されていた。これは特徴的且つ独自のシーンの発展を導くことになる。

別の要因としては、与えられるべき表現の自由というものの欠如にある。その地でパンクであるということは通常、警察組織、そして検閲、権力との日常的な闘争を意味する。また、多くのパンクスは"社会のダニ"、"薬物中毒者"、もしくは"資本主義の文化をもたらす手先"としてのレッテルを貼られ逮捕されるか、または精神病院に収容される(政治犯の多くがそこに送られたように)。そして政府お抱えの医師により、"統合失調症"という診断を下されるのだ』



Lük Haasによって執筆されたチェコスロヴァキアのシーン・レポート。MRR/November 1986に掲載。



こちらはMRR/July 1989に掲載されたもの。



最初期のチェコスロヴァキア・パンク・ロック

先に述べた孤立によって、西側からチェコスロヴァキアへともたらされるあらゆる音楽的な動向は、当然のように厳重な検閲のフィルターにかけられていた。

60年代後半、ヒッピーとロック・ミュージックは"大ごと"の類いとなっていた。政府は短期間のうちに、数多くのミュージシャンを国外退去させるか、その音楽性を強制的に変えるか(通常、完全に去勢された無価値なポップ・ミュージックとなった)のどちらかを強要した。

また、"長髪"は敵となった。パブは彼らの入店を拒否し、学校や職場からは追い出され、警察と彼らに嫌悪感を抱く"平均的な市民"は、彼らをストリートで痛めつけることになる。

60年代後半のロック・バンドで生き残り、政府のルールに従わなかった唯一の存在、それがTHE PLASTIC PEOPLE OF THE UNIVERSEだ。1970年代頭の数年を通して、彼らは政府によって徐々に徐々に隅へと追いやられていく。最終的に、彼らは公には結婚式か誕生日の祝賀として喧伝された、最高機密のギグしか出来なくなったが、それも警察の介入によって多くがキャンセルさせられた。

遂には何人かのメンバーは逮捕されたが、彼らの投獄は"Charta 77"(Charter 77/憲章77)と呼ばれるチェコスロヴァキアにおいて最も重要な抵抗勢力を産み落とすこととなる。

後の80年代初期、村落の一軒家でのプライベートなギグですら、彼らがプレイしようとすると、"魔法のように"嗅ぎつけられ、"違法"だからと政府によって中止させられた。

このバンドはチェコスロヴァキアの若者層のある一部、時に"アンダーグラウンド・サブカルチャー"と呼ばれるバンド(PPUだけではなく、DG 307、PSI VOJACI、UMELA HMOTAなど)と共に、大きな勢力となっていった。後にメンバーは自分たちで"Vokno"(窓)という完全に違法な雑誌を出版し、発行人は数年に渡って刑務所に収容されることになる。

THE PLASTIC PEOPLE OF THE UNIVERSEはチェコスロヴァキアのロックの歴史にとって非常に大切だが、その音楽性は確実にパンク・ロックとは違っていた(バンドはSHAM 69、SEX PISTOLS、CHELSEAといったバンドを好んでいたと言われている。彼らは1976年の時点でレコードを西側から密輸して聴いていたようだ)。



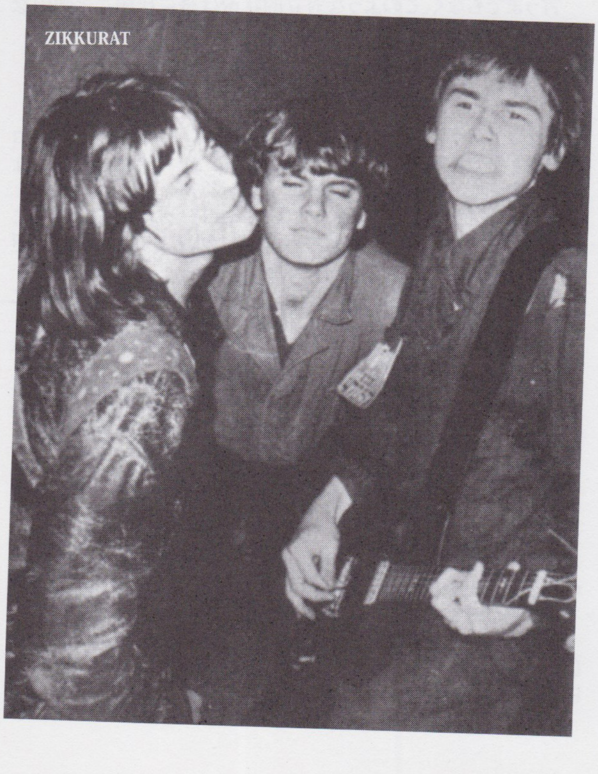
パンク期のEXTEMPOREと、彼らのカセット・テープのジャケット。

彼らの音楽は、もっとTHE DOORSやVELVET UNDERGROUNDといったバンドからの影響を受けていたが、自身のオリジナルなやり方での演奏を彼らは続けていた。

70年代後半、既出のアンダーグラウンドなロック・バンドは政府によって禁止されていたし、その活動も違法だった。

だがそこにはもう一つ、法的にはまだいくらか許容されていたシーンが存在していた。70年代、それらは"オルタナティヴ・ロック・バンド"と呼ばれ、80年代初期には"ニューウェイヴ・バンド"と呼ばれていた。

1982年から1984年までは、それらのバンドもまた公には禁止されることになったため、法律上一切のギグが出来なかった。いく



ZIKKURAT



つかのバンドは存続するために、数度に渡りその音楽スタイルを変えた(主に彼らはジャズ・ロックに影響を受けていた)。

そして彼らのうちの2バンド、EXTEMPOREとZIKKURAT(両バンドともプラハ出身)は、"パンク・ロック"を一時期だがプレイしている。彼らは"Jazz Section"といわれる組織の支持を受け、1979年の"Prague Jazz Days"に招待され、人前で演奏することが出来たのだ("Jazz Section"は1987年に禁止され最も重要なメンバーは刑務所に送られた)。

EXTEMPORE (1974 - 1981)

彼らはチェコスロヴァキアのバンドとして最初期にパンク・ロックのライヴをやった。THE STRANGLERS、WIRE、MAGAZINE、そしてGENERATION Xの曲をカヴァーしたが、歌詞はチェコ語だった。

彼らはUKの"Rock In Opposition Movement"/Recommended Recordsレーベルから主に影響を受けた"オルタナティヴ・ロック"をプレイしており、パンク・ロックは1979年当時の、レパートリーの一部に過ぎなかった。

彼らの唯一のオリジナル・パンク・ロック・ソングは、"Libouchec"というチェコ北部の村に因んで命名された曲である。そこで彼らは一度だけショーをやったのだが、バンドのリーダーであるMikolas Chadimaはショーの冒頭で、"嘘ばっかりだ"と発言したと言われている。また、それにより当局は彼を逮捕しようとしたようだ。

1979年2月に、プラハで彼らがパンク・ロックをカヴァーした、素晴らしいライヴ・テープが存在している。"Libouchec"は彼らのダブルLP「Velkomesto」(Globus Recレーベル/1990年)に収録され、正式にリリースされた。

EXTEMPOREはまた「Czech! Till Now You Were Alone」LPに参加している。そのコンピはChadimaによって編集されたものだった。レコーディングされた音源は違法だったため、秘密裏にイタリアへと運ばれ1984年にOld Europa Caféレーベルよりリリースされた。しかし、このレコードに収録された楽曲はオルタナティヴ・ジャズ・ロックというべきものであった。EXTEMPOREの解散後、ChadimaはMCH BANDをスタートさせ、それは今日も活動中である。

ZIKKURAT (1978 - 1982)

このバンドも元々はジャズ・ロックのミュージシャンで、後にパンク・ロックに影響を受けたためEXTEMPOREと通じるものがある。彼らもその大部分はカヴァー・ソングをプレイしていた(しかしオリジナルの英語の歌詞で!)。

彼らがカヴァーしていたのはSEX PISTOLS、DAMNED、RAMONES、STRANGLERS、DEVOで、荒々しいエナジーに満ちた演奏だった。才能に溢れたミュージシャンではあったのだが、カヴァー以外の、彼らオリジナルのパンク・ロック・ソングは1、2曲のみ。他は長いジャズ・ロックのインプロビゼーションばかりであった。

彼らもまた「Czech! Till Now You Were Alone」LPに参加してキラー・パンク・ロック・アタックとも言うべき、"Zkazenej zub"("A Rotten Tooth")を披露している。この曲はディスコグラフィー・ダブルLP「1979 - 1982」(AG Kultレーベル/1991年)に収録された。パンク・ロックのカヴァーをした演奏が収録されているライヴ・テープも存在しているようだが、僕が知る限りでは正式な形でリリースされたことはない。

ベーシストがPRAZSKY VYBERという、人気のあるジャズ・ロック/ニューウェイヴ・バンドのために脱退すると、その後バンドは解散してしまう。

この2バンドは重要だ。彼らは人前でパンク・ロックを演奏した最初の存在であり、チェコスロヴァキアの多くの人々は、彼らを通してパンクというものを知ることになった。既に書いたように、ここでSEX PISTOLSやDAMNED、RAMONESといったバンドのライヴを見ることは不可能だった。彼らがカヴァーをすることによって、人々はこういったバンドを知ることになったのだ。

しかしながら、これらのバンドのメンバーは、才能あるジャズ・ロックのアーティストでしかなかった。彼らの音楽性の発展途上における、単に興味深い一つの側面でしかパンク・ロックはなかったのだ。

最初の"リアル・パンク・ロック"バンドは、ENERGIE Gである。

ENERGIE G (1979 - 1981)

この10代によるパンク・バンドは、プラハ出身でロウ&シンプル、調子の狂ったパンク・ロックをやっていた。重要なことは、もっぱら彼らは自作の曲を演奏していたということだ(数曲、CHELSEAとSHAM 69のカヴァーをやっていたが)。

初めてのギグは、ショックを受けたプロモーターが会場の電源を落としてしまったため、3曲だけで終わってしまった。1981年には秘密警察が介入してきて、その活動を強制的に止めさせたが、いくつかロウなライヴ・テープは存在している。ただし、正式な形でリリースされたことは一度もない。

同時期に、もう2つほど活動していたバンドがいた。ANTITMA 16とHLAVY 2000だ。しかし両バンドとも非常にオブスキュアであり、僕が知る限り一切音源は残されていない。

80年代前半とは、チェコスロヴァキア・ロック・シーンに対して、システムが弾圧を行う時代だった。文化施設は、違法と認定され演奏を禁じられているバンドのリストを所有し(EXTEMPORE、ZIKKURAT、ENERGIE Gは自分たちで演奏場所を見つけていた)、メディアはロック・ミュージックに対して徹底的な宣伝による攻撃を行った。またストリートに初めて典型的な"パンク・ファッション"に身を固めたパンク・ロッカーが登場すると、警官は彼らに対する嫌がらせを始めるようにもなる。パンク・ロッカーは長髪に続く第二の"敵"だった。

しかし、パンク・ロックのウイルスは、今やF.P.B.、KECUP、A 64、VISACI ZAMEK、ZASTAVKA MILEC、PLEXIS、ZONA Aといったバンドと共に感染の一途を辿っていた。

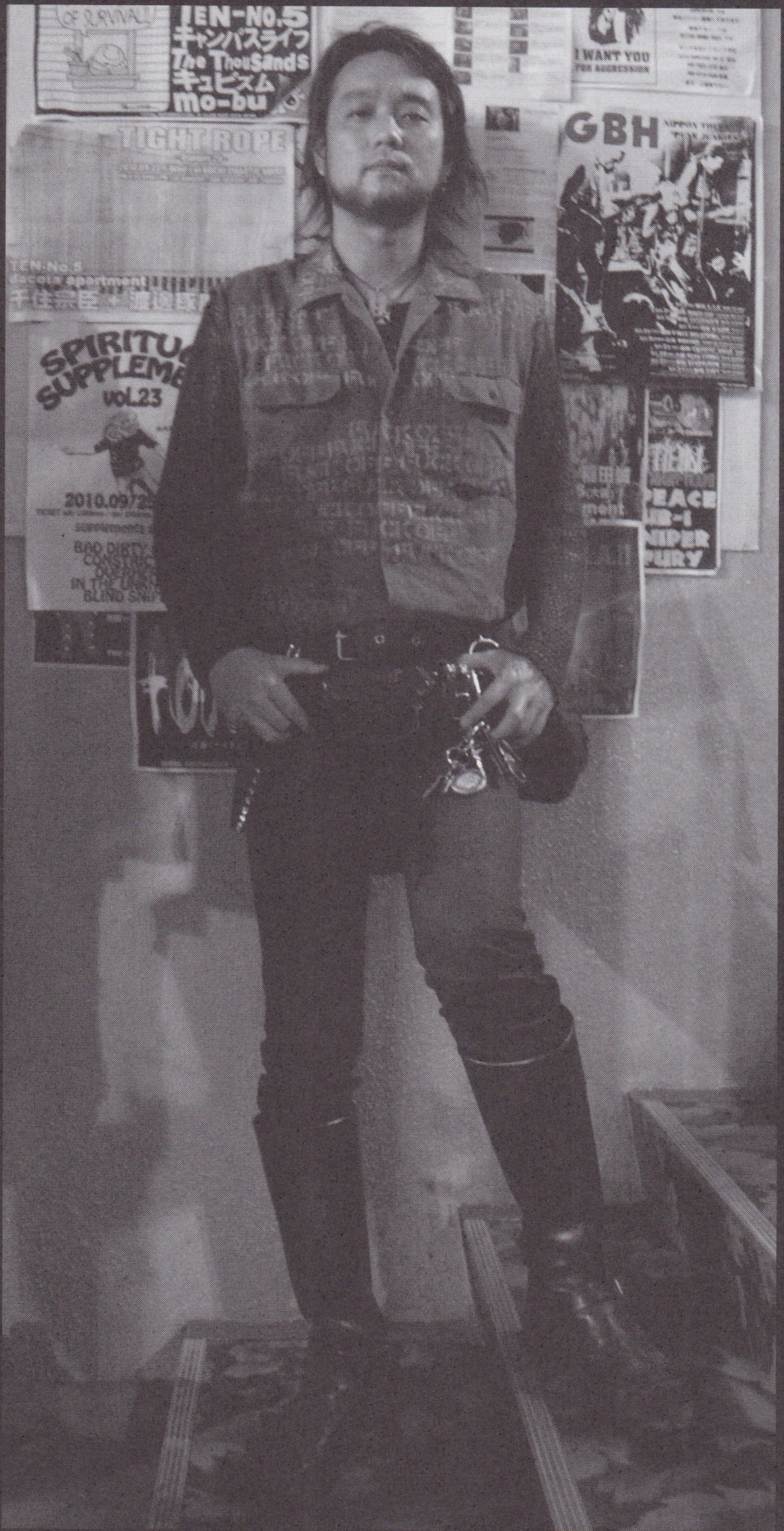
次回に続く!

MRR掲載時のENERGIE G



HIRO THE AGGRESSION

ex-INSANE YOUTH and DISCLOSE interview



INSANE　YOUTHではベーシスト、DISCLOSEではドラマーとしても活躍し、現在AGGRESSIONにて精力的な活動を続ける高知CITY HARDCOREの重鎮であるHIROに過去から現在、未来に対する思いを聞いた。

INTERVIEWED:Souichi(UNDER THE SURFACE/FORWARD/SMASH DETOX)

■地元は？

「高知県の香北町ってとこです」

■香北町ってのは。

「アンパンマンの国です。出身有名人はやなせたかしと福留功とか」

■ああ留さん。

「そうそう(笑)」

■何でまたハードコア・パンクをやろうと？

「何やろね、宝島とDOLLが俺を目覚めさしたのかね」

■宝島とDOLLがあなたをパンクに目覚めさしてしまったと。

「そうそう、あとDISCHARGEとSEX PISTOLSとスターリン」

■最初に遭遇したパンクの人って誰なんですか？

「んー、地元の先輩」






■その当時はねSEXUAL、DISARM以降はシーンなんかもなくなってたもんね。その後はコピー・バンドばっかでね。

「で、自分らの音を作ろうとしたのが最初のバンド。どこにでもある地方のバンドやったね。まあそれもとっかかりやったしね」

■じゃあ生い立ちについて聞くけど、生まれは香北町？

「いや、生まれはねー。どうやったっけ？知らん(笑)」

■知らない？

「そう、知らん(笑)」

■じゃあネリカン(練馬鑑別所)に入っていたのはいつぐらいですかね？

「15歳の時。住所不定とナイフ持ってたから銃刀法違反(笑)職質で(笑)」

■そういうのを経て、本格的にやり始めたバンドは？

「ガッセンブーベ」

■意味は？

「わかりません(笑)」

■その時のメンバーは誰ですか？

「Voがチッカン、Guあなた、Bass俺、Drumsマサ」

■ああそうでしたね。何年くらいやったんだっけ？

「3年くらいやったっけ」

■で、そのバンドを経て、まあまあいろんなことがありINSANE YOUTHをやり始めたと。

「そうそう」

■因みにDISCLOSEを手伝う事になったのはどういうきっかけなの？

「最初は川上はDEHUMANIZATIONってのをやっててその後、福川と川上でDISCLOSE作った時にドラムが不在だったから俺と土居で交互にドラム叩いてたね」

■「TRAGEDY」LPにも入ってたもんね。

「そうそう」

■まだその時はUOちゃんはいなかったっけ？

「いないいない。全然後」

■川上に最初に会ったときの印象は？

「ビーバーに似た人やな思うたね」

■(笑)。なぜ彼はDISCHARGEにこだわってたと思う？

「まあ俺もDISCHARGEがとっかかりって言うのは同じなんだけどね」

■で、やつはそれを突き詰めていったと。

「こんなんありなんやーみたいなね。当時で言うたらDISCARDとかDISがついてロゴもDISCHARGEまるパクリのも見てそういうのにヒントを得てこれでもええんやーって思ったんじゃないかな」

■音はこだわってたね。やつが音作りに困ってた時に俺、藤井君から貰ったグライコのついたDISTORTIONペダルをやつにあげたもん(笑)。

「俺もやつに結構色々あげたで。あのジャックがバイパスになってるやつ。DISTORTIONにジャック差し込むからそっからも二股に分かれてるやつ」

■あのマニアックなセッティングは絶対あなたが教えたと思ってたけど。

「そうそう」

■てことは川上の音に影響を受けている人たちは同時にあなたのセッティングに影響を受けたことにもなるね。

「いやいやいやいや」

■前から教えて教えてって言ってたもんね。

「そう。で、一緒にいろんな事をやったりね」

■音的な部分ではあなたが重要な役割を担っていたと。

「最初はね。そっからやつ自身がいろんな音を更に進化させたということね」

■DISCLOSEではトータルどれくらいプレイした？

「パートタイムが多かったから。川上がメンバーに困ると電話がかかってくる(笑)。最後は1年ちょっとはやったかな？」

■当時(2006年頃)の川上の心境とか、どうだったんだろう？

「ん〜…色々な動きがあって、シーンとか住んでた土地の状況とかまぁプレッシャーはあったかもね」

■久しぶりにwbtdのライヴの時に川上に会ったけど、すごくサタニックな感じ。

「あーいうのが元々好きなんよねー。Contrast Attitudeとかポール・ブース(米国のタトゥー・アーティスト)のLAST RIGHTSのマークをギターのフレットに貼ったりしているね。D-CLONEとかも」



■川上は日野日出志とか大好きだったよね。

「あー凄く好きやったね。蛆が集ってるのとか(笑)」

■2007年にもう一回、最後のドラムやってるよね。川上が去ったときどう思った?

「…う〜ん、実際ピンとこなかったねぇ…」

■うん、そう思ったし大体、皆そんなの聞いてもナイナイとかいって全く信じてなかった。

「でも葬儀当日に各地から皆が集まってきて…実感してきて」

■現実なんだっていう…。

「それまで全然何にも聞いてなくて突然そんな話で、実感していく内に見たくない、見たくないってそんな感じで…」

■メンバーとしてもどうしていいかわからないだろうし、そういうのは皆の本音だと思う。

「近づきたい。けど、見たくもなかった。結局フラフラしてたね、その日は」

■川上がシーンで半ば神格化されているような状況をどう思う?

「それぞれにそれぞれの思いがあると思うし。個々の胸の内に収めておけばいいんじゃないかな。人物像だって人それぞれ付き合い方次第だろうし」

■身近過ぎて神格化はないけど、突き詰めてた事は事実だからね。

「たまたまオレは川上のやってきた事にちょっとだけ参加しただけだし。地元でも、後からの人には聞かれたら『こんな人やったよ〜』とかできる範囲で伝えていけばいい事だと思う」

■話は戻って。INSANE YOUTHの後AGGRESSION結成!

「97年。男道からEPやCD出してもらったりして現在に至る、という」

■現在のメンバーになったのは?

「今のメンバーになった…ってか、NOWというか(笑)」

■なう、NOWね(笑)。

「ユウサク(OVERHERE)がヘルプで活動はしてるけど…。ギター大募集中でっす!!!」

■もう何年?

「ん〜???13年か…すぐ計算出来ん(笑)」

■AGGRESSIONでベースをプレイする時、どんな感じ?気持ち的には?

「十代に『こんな事やりたい!』と思った事を、まぁ思い出しながらやったり。やりつづけたから、今出来る事もあるし」

■ベース暦は何年くらい?

「18?いや16からかな?未だに何のこっちゃわからんけどね(笑)」

■一番好きな、もしくは影響を受けたバンドやミュージシャンは何?

「シド・ヴィシャスやね!(即答)」

■(笑)まぁ、そうやね!

「DISCHARGEとか、まぁ…やっぱシドでしょう!今でもTシャツ着るし!」

■皆思っててもすぐにシド!とは言わない(笑)。

「シドで決まりでしょう!!!」

■AGGRESSIONの今後の予定は?

「とにかくギターを大募集中!この本が出る頃には終わってるかもだけど10月21日にGBH、11月6日に三重のEND OF SEEDS、12日にFUKとORDERと共演予定です」

■これからの十代・二十代のPUNKSに一言。

「とことん好きなようにやってみたら?命を落とさない程度に。色んなジャンルを飛び越えて一緒に遊ぼうぜ」

■未来は、どう?

「無いやろ?」

※AGGRESSION HP
http://ms-s.net/00/53/ftwmax/u1/?ritch_type=1(携帯サイト)

THANKS
ユウサク、タカオスナイパー、B-CHANG







INEPSY

カナダ・モントリオール産ロックンロール・クラスト・ハードコア・パンク・バンド、INEPSY!!
最早細かい説明は不要でしょう。MOTORHEAD+DISCHARGE影響下のバンドは今や世界中に数えきれないほど存在していますが、アンダーグラウンド・ハードコア・シーンにおいては、INEPSYこそが真っ先にその先陣を切ったバンドだと思われます。今回、ドラマーのSamにメールでのインタヴューを行いましたが、彼を含めメンバーはかなり幅広い音楽的嗜好を有していることが分かりました(ベーシストのJ.P. Hearseはカントリー・バンドまでやっています)。
音源からだけでは見えてこない、彼らのバックボーンや柔軟な姿勢も本インタヴューから伝われば幸いです。

■まずはINEPSY以前のバンドなど、メンバーそれぞれの音楽的な経歴を聞かせて下さい。

「うん、俺たち全員INEPSY以前にもバンドをやっていたよ。90年代のモントリオールのパンク・シーンは、その時すごくポリティカル・クラスト・コア(尖ったギターに滅茶苦茶ファストなドラム・ビート、唸り声をあげるヴォーカル)に傾倒していた。だけど俺たちは身内しか知らないような大したことのないバンドだったから、あんまりこのことについては話したくないな。
INEPSYは俺たちのメインとなるバンドだけど、他のプロジェクトにも関わっている。俺(Sam)とChanyは今、UNRULEDっていう古いハードコア・パンク・バンドのメンバーでもあるんだ。1982年に結成して、2009年に復活したんだけど、「BUTCHERS OF WARFARE」というアルバムをShizophrenic Recordsからリリースしたところだよ。1982年の古い曲に新曲も交えて収録したんだ。
それと俺は以下の2バンドでもドラムを叩いていた。日本のWAVESとスプリットを出したHELLBOUNDに、C.C.S.S.のファースト7インチ。ChanyはGERM ATTAKのJoeとMENTAL RESCUE(LARM、SIEGE、RIPCORD好きにオススメ)という名のレコーディング・プロジェクトをやっていたね。確かデモと「A New Age of Terror」という7インチをToxic State Recordsから出しているよ。Chanyは他にもSKULL N BONES(77パンク・ロック)ってバンドもやってて、恐らくそれのデビュー・リリースでは俺がドラムを叩くことになるだろうな。J.P. Hearseはあらゆるタイプのバンドのライヴやレコーディング・スタジオなんかで活動しているセッション・ミュージシャンなんだ。HEARSE AND THE DEADWOOD DRIFTERSってカントリーのバンドもやっている(※Myspaceで試聴できますが、本格的なカントリーでビビります)」

■UNRULEDはどうして再結成したのですか?あなたがキッズだった時、UNRULEDはあなたの大好きなバンドだったから、それで参加したのですか?

「UNRULEDはその当時、いち早くDISCHARGEやDEAD KENNEDYS、G.B.H、CORROSION OF CONFORMITYの影響を打ち出したバンドだったし、1983年には国営放送によるパンク・ドキュメンタリー番組にも登場していたんだ。あいにく俺たちがパンクを聴き始めた当時、既にUNRULEDは解散して忘れ去られていた。俺たちが知っていたのは昔、モントリオールでDISCHARGEがやった時のショーのフライヤーに書かれていた彼らの名前だけだったな。Chanyが持っていたんだよ。



1999年頃になると、俺たちは色んな国のオブスキュアなパンク・バンドにのめり込んでいた。で、友人の一人がUNRULEDのセルフ・タイトルの7インチを持ってきたんだよ。そして2004年頃だったかな、INEPSYのギグでWax(S.C.U.M.のメンバーでUNRULEDのギタリスト)と出会った。彼は既にUNRULEDの再結成のショーについて考えてはいたんだけど、バンドのメンバーたちとなかなか連絡が取れなかったみたいでね。それで2008年にWaxは俺とChany、それにPat God(UNRULEDのオリジナル・ベーシスト)に頼んできたんだ。ギグをやって、昔のUNRULEDの曲をプレイしようってね。本当にUNRULEDを再開させたいって気持ちが伝わってきたよ」

■それと、あなたがHELLBOUNDとC.C.S.S.のメンバーだったとは知らなかったです。HELLBOUNDはクラスト・コアで、C.C.S.S.はパンク・ロックですよね。INEPSYとは全然違う音楽スタイルですが、あなた自身かなり幅広くパンク/ハードコアを聴いているのですか?

「実際のところ、それらのバンドのメンバーではなかったんだけどね…。HELLBOUNDとC.C.S.S.の奴らは俺の親しい友人でね、俺は彼らの手伝いをしたかっただけなんだ。HELLBOUNDがヨーロッパ・ツアーに行った時、彼らのドラマーのMathieuはヨーロッパに定住することを決めちゃってね。彼らはカナダに戻ってきてから、Mathieuの代わりになるドラマーのオーディションを何人か試したんだけど、適任者を見つけることが出来なかった。それでレコーディングの2週間前にドラムを叩くのを頼まれて、俺は承諾したってわけさ。
C.C.S.S.もドラマーのオーディションをやっ

たけどうまくいかなくて、正式なドラマーが見つかるまで俺が叩くことになったんだ。あいつらはかなり活動的だったから、結局俺は一年以上ドラムをやることになったんだけどね。INEPSYとは全くかけ離れたバンドでプレイするのは、とてもやりがいのあることだったよ。
そう、それに俺は幅広く音楽を聴いている。NERVES、REZILLOS、RADIO BIRDMAN、THE SAINTSといった70'sパワー・ポップ/プリ・パンク・バンドから、AIRBOURNE、TOXIC HOLOCAUST、EVIL ARMYといったロックやメタル・バンド、それにDARKTHRONEの最近の3枚のレコードに夢中だね」

■では、どのようにしてINEPSY結成に至ったのでしょうか?

「Chanyはクラスト・コアとプログレッシヴ・ハードコアにのめり込んでいて、それでルーツに立ち返りたかったんだろうな。古いイギリスのパンク・バンド、G.B.HやDISCHARGE、VARUKERS、CHAOS U.K.に、VENOMやCELTIC FROSTといったイーヴィルなサウンドのバンド、それにMOTORHEADのFast Eddie Clarkeみたいなダーティなロック・サウンドの要素を合わせたバンドをやろうって始めたんだ」

■それって何歳くらいの時でしたか?

「俺たちはそれぞれ別のバンドをやっていたが、ケベックで出会っていて同じような音楽に対する関心を共有していたんだ。INEPSYとして初めてジャムったのは、確か俺が21歳の時だったと思う」

■「No Speed Limit For Destruction」は他の作品に比べてずっとハード・ロックでしたよね。制作時、心境の変化があったのですか?

「この質問への答えは簡単だよ。どんなバンドにしても、活動していく中で自分らのオリジナルなやり方に対するインスピレーションを得られない時というのがあるんだ。決まったやり方を繰り返し、同じパターン、同じリフをプレイしてレコードを出すこともあるし、逆に時間をじっくりかけて曲を書き、コンセプト・アルバムを作り出すこともある。実は「No Speed Limit For Destruction」はコンセプト・アルバムだった。凄くオールドスクールなサウンドのアルバムを作りたかったんだよ。このレコードはTANKから主に影響を受けていた。俺たちのロックがNew Wave of British Heavy Metalから影響されていることを体現するのも重要だったんだよね」

■アートワークや、それにタイトルのつけ方も常に格好良いですね。誰がタイトルをつけているのですか?

「Chanyは素晴らしいアーティストだし、レコードのタイトル・トラックはいつも彼がインスピレーションを得てつけているんだよ」

■ヨーロッパ・ツアーにも行ったことがあると思いますが、何か驚きはありましたか?

「そうだね、ヨーロッパのシーンは、一般的なパンク・ムーヴメントにおいても、ポリティカルな側面が色濃かったよ。それにパンクスは物事に対してアクティヴ且つ能動的だね。こっちのパンク・シーンは酒を呑んでばっかでグウタラさ。いつも同じ奴らがコンサートやD.I.Yなイヴェントを企画している



しね」

■CHILDREN OF TECHNOLOGYやBLUDWULF、TOXIC HOLOCAUSTなどには共感できますか?それとDISFEAR、ZEKEはどうでしょう?

「TOXIC HOLOCAUSTはもちろんさ。彼のスタイル(オールドスクール・スピード・メタル)を俺たちは本当に楽しんでいるし、ヘヴィ・メタルとパンクを一緒に混ぜ合わせた彼の才能もね。Joelとは数年来の友人だよ。
CHILDREN OF TECHNOLOGYにも凄く共感は感じている。Chanyは彼らのレコード2枚のアートワークも担当したしね(「Chaos Mutant Hordes」EPと「Time To Face The Doomsday」LP)。それにベーシストのSimoneは俺たちの2009年のヨーロッパ・ツアーでJ.P. Hearseの代わりに弾いてくれたしね。J.P. Hearseはツアーの2週目頃に深刻な肺の感染症にかかっちまったんだ。SimoneはINEPSYのファンだったし、実際に全ての楽曲を理解していたからね。あいつはとても才能に溢れていたから、一回練習しただけでツアーを再開することができたんだ。
BLUDWULFについてだけど、彼らのアートワークや創造性は凄く好きだよ。それに俺たちとほぼ同じ音楽的背景を持っているよね。俺はドラマーのDonnieと一度会ったことがあるけど、彼はいい奴だね。シンガーのSinnは俺たちが前にニューヨークでやったショーに来てくれたんだ。遂に彼と会うことができて良かったな。
DISFEARは個人的には知らないけど、D-Beatスタイルをマスターしたスウェディッシュ・デスメタルの象徴として見ているよ。
ZEKEは俺たち全然聴いたことはないんだ。でもドラマーのDonnyは実に素晴らしい仕事をTOXIC HOLOCAUSTのドラムで披露していたね。「Overdose of Death」アルバムでさ」

■TOXIC HOLOCAUSTとのスプリットではお互いの曲をカヴァーし合っていましたが、このアイデアは誰が提案したのですか?Joel?

「えーとね、Joelは長いことINEPSYのファンで、彼はずっと俺たちとのスプリットを出したかったみたいなんだ。2008年にTOXIC HOLOCAUSTとINEPSYはVancouver Distort Festで共演して、その後にはエドモントンで開かれたUNREST Festivalでも、G.B.HやThe ACCUSEDといった素晴らしいバンドに混じって一緒にやった。でろんでろんに酔ったJoelがINEPSYの曲をプレイしたいってステージにあがってきてさ、あいつは"Conspiracy WW3"をチョイスしてギターを弾いたんだ。その時Chanyはマイクだけ持って客席に飛び込んでおかしくなっていたな。あの日の客の反応は凄かったぜ。それでスプリットでお互いの曲をカヴァーしようって俺は思いついたんだ。7インチで出そうと思っていたんだけど、Tankcrimes RecordsのScottyがこの企画に興奮しちまって、音質も良くなるようにと、彼が45回転のLPで出すことに決めたんだよ」

■ちなみにMOTORHEADの一番好きなアルバムは何になりますか?

「1977年から1987年のレコードは全部良いよね。俺のお気に入りは「Ace of Spades」と「Orgasmatron」だよ。Chanyは「Bomber」と「Another Perfect Day」にヤラれているぜ」

■あと、好きなドラマーはいますか?

「ああ、尊敬しているドラマーは沢山いるよ。ロックンロールならPhilty Animal Tayler(初期MOTORHEAD)とDenise Duford(GIRLSCHOOL)が好きだな。パンクならPinch(ENGLISH DOGS、現在はTHE DAMNED)、エクストリーム・ミュージックならCANNABIS CORPSEのJosh Hallが大好きだ。彼はとてもクリエイティヴだし、俺は彼のオールドスクール・デスメタル・スタイルに育ったけなんだよ」

■モントリオールの最近のシーン事情についても聞かせて下さい。

「モントリオールはパンクスと格好良いバンドが沢山いるのは良いんだけど、ドラッグとアルコールの乱用が酷いんだよな」

■あなたはドラッグは嫌いなんですか?パンク・シーンにおける薬物問題についてはどう考えていますか?

「時々の楽しみであるなら、俺はドラッグに反対というわけじゃないんだ。ただ、パンクスが中毒になって、ドラッグを得るための金を追い求めることに、その一生涯を費やすようになったら問題だろ」

■ではシーンは細分化していますか?クラスト/アナーコとSxEと77スタイル・パンク・ロックとメロディックとか。

「以前はそういったシーンは全て分かれていたんだけど、今じゃ一緒にやるようになってきているよ。毎年、Jannick(ex HELLBOUND/AFTER THE BOMBS)によってVarningっていうパンク・フェスティヴァルがモントリオールで開催されているんだ。このフェスティヴァルは色んなシーンからのお気に入りのバンドを混ぜ合わせていて、みんなを凄くオープン・マインドにする一助になっていると俺は思っている。最高に驚いたのはTHE KIDS(ベルギーの77パンク・ロック・バンド)がモントリオールでプレイしたことだな。ショーではガレージ・ロック・シーンの奴らやアナーコ・パンク/クラスト・シーンの奴らも一緒になってね、素晴らしいショーだったよ」

■INEPSYの信条とは?

「創造的であり、消費することなく、社会の約束事に追随せず、政府を決して信じないということかな」

■ところであなたの日常も知りたいのですが。働いていますか?どんな仕事をしています?

「INEPSYじゃ一銭も稼げないからな、ハハハ!だから働かないと。夏は造園業で働いて、冬は社会保障で食いつないでいる。Chanyは職人(鋼鉄と溶接の仕事)で、J.P. Hearseはコンサートのプロダクションに DJ、あとモントリオールのいくつかのバーでドアマンをやっているよ」

■今後についても聞かせて下さい。

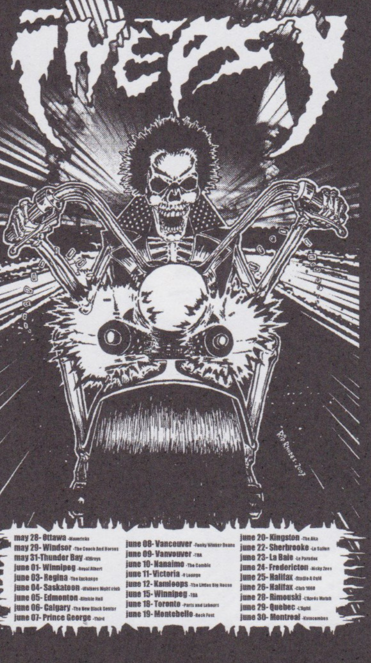
「もうすぐChanyの渡米に関する法律的な問題が解決するだろうから、そうしたらTOXIC HOLOCAUSTとのアメリカ・ウエスト・コースト・ツアーに取りかかるよ。日本でプレイするのもいつの日か実現させたいね」

■日本のバンドにはどういう印象を抱いていますか?

「いくつか好きなバンドもいるけど、俺にはちょっとノイジー過ぎるんだよな。けど日本のバンドがステージで放つエナジーは大好きだよ。それにいつも日本のパンク・バンドのアートワークも凄いと思っている」

■日本の読者にメッセージを。

「PUNK SYSTEM DESTROY!!!!(DEFECTORの7インチのタイトルより。日本人による最高の一文だ!)



Tokyo Leather Boys

BOYオリジナル・レザー・ジャケット発売への道のり

TEXT:大倉 了(RECORD BOY)

日本のパンクスにはあまり馴染みのない、しかし世界中のメタル・シーンで永年使われてきた言葉に、"ポーザー"というものがあります。80年代には主に、アンダーグラウンドの激しいメタルを支持するファンやバンドが、グラム系ヘアーメタルに代表されるヴィジュアルを重視したメインストリームのバンドに対して、皮肉や軽蔑の意味を込めて使っていた表現でしたが、シーンの移り変わりとともにそのニュアンスは微妙に変化して、現在ではザックリ言って"偽者"に近い意味で使われる事が多いように思います。ヴィジュアルを重視する事をポーズとするのではなく、過激で激しいサウンドとは一見相容れない、こざっぱりしたファッションで世間一般に迎合しているようにも見えてしまう質素なルックスのバンドに敵意を剥き出しにしていたノルウェー・ブラックメタルMAYHEM。彼らは浮世離れとも言える80年代のスタイルを尊重し、そして飾らない爽やかなイメージを取り入れるメタル・バンドを偽者と罵った、現在のポーザーの定義を確立したバンドの代表格と言ってもいいでしょう。

ここでポーザーの定義を論じても仕方ないので、もうやめます。強引に今回の主題に話をくっつけますと、レコード屋であるBOYが作ってしまった革ジャンは、80年代の定義でのポーザー、つまり自らの愛する音楽に見合ったファッションを追求していた80年代のパンクス/メタルヘッズに憧れて、それらのレコードや写真を眺めたりすることが大好きなような方なら、必ずや楽しんでいただける一着であると確信致します。私が20年ほど前から気になっていた、Dカンが胸に付いているライダース・ジャケットを、このたびFUUDOBRAINさんの全面バックアップにより復刻させてもらいました。制作の過程で本誌編集長の山路氏にもご協力いただいたのですが、その際に「革ジャンが無事に出来たら、記事にしてみませんか?」と提案をいただきましたので、私のこの革ジャンに対する想いも交えながら、今回のBOYオリジナル革ジャン制作に至るまでの経緯を振り返ってみました。DESTRUCTIONマニアを自負する某ジャーマン・スラッシュメタル・バンドのメンバーに「やっぱりあのDESTRUCTIONタイプの革ジャンは持ってるんですか?DESTRUCTIONはみんな着てますもんね。渋いですよねー」とノリノリで尋ねても、「あ、ホントだ、Dカン付いてるね。気付かなかったよ」などと返答されてしまい、私のようなヤツがポーザーと言われるのかな…、と軽く自己嫌悪に陥りそうになりましたが、勇気を出して他の人にも聞いてみると、このタイプの革ジャンに気付いていた人は国内外にやっぱりいました。て言うか、絶対気付くだろ、DESTRUCTIONマニアだったら!北欧ハードコア・パンク好きでも、気になっていた人は当然数人いらっしゃいました。今回の革ジャン復刻プロジェクトは、洞察力の鋭い、愛すべき80年代タイプのポーザーに敬意を表した企画であると、敢えて言わせていただきます。





DESTRUCTIONの革ジャンにDカンが付いている事に気付いたのは高校生の頃でも、それがカッコいいとか思い始めたのはもう少し後だったような気がします。ただ、スタッズとガンベルトで武装した黒いファッションはカッコいいなー、と思っていたので、DESTRUCTIONのあの気持ち悪い変態スラッシュメタル・サウンドも好きになるよう、一生懸命聴いていたのも覚えています。その後、当時の日本では全く人気のなかったスウェーデンのハードコア・パンクBLACK UNIFORMSに出会い、「あ、海外でもこういうメタルっぽい(ルックスとサウンドの)ハードコア・バンドはいるんだ!」と、一瞬で虜になると同時に、革ジャンにDカンを発見。ここで記憶の片隅に追いやっていたDESTRUCTIONの革ジャンのDカンが蘇ります。DESTRUCTIONのレコードを引っ張り出し、穴が開くほどに見つめました。他にもいろいろ探してみれば、北欧のハードコア・パンク、デスメタル・バンドの多くが、左胸にDカン、UKの小の字型タイプに近いボディの3本のジップ、左腕肘下から手首にかけて直下するジップという、ロンドン・タイプやSchottとは明らかに違ったディティールのカッコいいライダース・ジャケットを着ているではないですか。日本でもスラッシュメタル・バンドのOUTRAGEの人達が着ています。これはぜひ私も1着くらいは欲しいとちょっと考えたものの、周囲のみんなが熱狂しているbelstaffのジャスト・サイズを旅行先などで見つけると、やっぱり気持ちはそっちに傾きます。そんなこんなで、何十着と革ジャンを所有するようなセレブなマニアでもない私は、またDカン革ジャンのことなどキレイサッパリ忘れて、周囲のイケてるパンクスと



の会話に付いていけるよう、BURSTなどを見て勉強する日々を過ごしました。

しかしいくつかの偶然が重なって、と言うか、ただボケーッといろんなレコードを眺めていた時に、Dカン革ジャン熱はまたもや盛り返してきます。"SODOMのDカンは右胸に付いているのか"とか"なんでみんな袖をまくっているんだろう?"など、少しずつ色んな発見や疑問も生まれてきて、Dカン革ジャン探求の旅@マイルームも俄然楽しくなってきました。以前、CROWのCrow氏が、「DISCHARGEのTシャツを着ているバンドのレコードは、なんだかよくわかんなくても片っ端から買いまくった」という素晴らしい逸話を聞いたことがありますが、そういうのって当人にとっては本当に楽しいものです。そんな頃、店に遊びに来たG.A.T.E.Sの根岸氏と話していると、「あー、俺が昔買ったのもDカン付いてたよ。袖がジップで取り外しできるヤツ」と、聞き捨てならないワクワクさせるような発言が飛び出しました。何?袖が取り外せるだって??そんなモノがあったのか!?それを着れば誰もがマッドマックスの世界に降り立ったようなルックスの男になれるんだろうなーと、私の中では2 wayタイプのDカン革ジャンに対して、もはや都市伝説的に妄想が膨らみ始めていましたが、いろいろ調べてみると、横浜銀蝿系の人々にアピールする革ジャンとして、昭和の日本にわりと普及していたようです。しかし根岸氏曰く「いや〜、これがまたカッコ悪くてさー」とのこと。今回BOY革ジャンの制作にあたってくれたFUUDOBRAINのタケシ・スウェーデン氏も過去にDカン革ジャンを着用してる姿が確認されていますが、彼もまた、「なんで俺の革ジャンはこんなにカッコ悪いんだ?」と当時悩み、Dカン革ジャンにはいい思い出がないとまでキッパリ言い切っていました。さらに調べていきますと、カドヤのような日本の老舗革ジャン・メーカーでも、Dカン付き革ジャンは生産されていたらしいということが判明。国産モノを信頼する私は、80年代日本製のものなら間違いないであろうと、ヤフオク、古着屋さん、そしてリサイクル・ショップをパトロール。すると案外早くヤフオクで発見!"サイズ表記はMとなっていますが、今で言うところのSくらいです"、などという曖昧な解説から、これは私のような細身の体形にも合った国産モノに違いないと推測し、いともアッサリと落札。そして届いたモノは、ほれぼれするくらい素晴らしいディティール!!袖口のジップの下(ガゼットって言うのでしょうか?)が赤い革です。素晴らしい。これは幸先良い1着目だとドキドキで羽織ってみると…?!?これがとても外出なんかできない、予想をはるかに超えたダサダサなシェイプでビックリです。私の貧弱な体型に合ったものが見つかりにくいのは今に始まったことではなかったので、ある程度は覚悟していましたが、これは酷い。しかしサイズを修正してみると…やっぱりカッコいいじゃない、激渋だ!!勢いに乗って、リサイクル・ショップで国産2着目を発見。しかも袖がジップで取り外しできる〜!これだ、根岸氏が言っていたヤツは!!店員はちょっと綺麗なお姉さんですが、躊躇などせずにすぐさま試着させてもらいました。鏡の前で羽織ってみると、ダ、ダ、ダ、…ダッセー!!ダサすぎる!!!今回もまた、予想をはるかに超えたカッコ悪さです。しかしこのマイセカンドDカン革ジャンは襟の裏面が(つまり背中から見ると)革が赤くて、腰のベルトの裏も赤、エポレット(肩章)の裏の革も赤という、スリラー・テイストを導入してしまったような素晴らしいストレンジ・レザー・ジャケットなので、ちょっとだけ迷ったけど購入。"フン、これだってサイズお直しして、カッコよく着てやるさ。激渋な革ジャンに生まれ変わったら、これ着てまた来店してやる。今に見てろ!"などと、私の存在すら感じていないであろう綺麗なお姉さん店員に自意識過剰な誓いを心の中で叫んで、お店を後にしました。

ここで国産革ジャンと私の体型との相性の悪さを素直に受け入れて、また海外のバンドの写真をレコードやインターネットでひたすらチェックし、イチから研究し直します。私が購入した国産品2着は、どっちも肩のラインが肩幅の狭い私にもぴったりジャスト。普通この時点で問題なしなんですが、Dカン革ジャンの場合、身幅が異常に余裕があり過ぎます。そしてアームホールもガバガバ。タイトなカッコいい革ジャン特有の肩の疲れなど全くなく大変楽なので、一日中でも着ていられそうですが、鏡を見た途端にすぐにでも脱ぎ棄ててその場を走り去りたくなるような、恥ずかしすぎる寸胴シェイプです。DESTRUCTIONの写真を見ると、確かにギターのMike氏は小柄だからか、革ジャンがちょっとデカイようです。デスメタル・バンドのほとんども、肩のラインが落ちるくらいにデカイ革ジャンを着ています。しかし凄いのは、Mike氏もデスメタル連中も完璧にそれがきまっていてカッコいいということ。あと、SODOMの右胸Dカンは気づきましたが、北欧にも右胸Dカンがかなり多いということも判明。これらはジップがUSタイプに近い配置になっていますが、これもまた凄く


これがBOYオリジナル革ジャン!!

カッコいいです。SODOMが着ているのはどうやらHein Gerickeというドイツの老舗モーターサイクル・ギア・メイカーのもので、左上腕部にHein Gerickeロゴのタグが付いています。そして北欧の右胸Dカン・タイプはJofamaというカジュアル・ブランドのもののようです。MAYHEMのEuronymousの革ジャン姿も凄くカッコいいですが、彼が着用していたのはこのJofamaのように見えます。そして憧れのDESTRUCTIONタイプですが、これまたドイツではなく北欧原産らしいという結論にたどり着きました。スウェーデンのPetroffというブランドのものが最もポピュラーだったみたいです。さぁ、ここまで来たらもうゴタクは要りません。結局のところ、それらは今も容易に手に入るのかということです。残念ながら、やはりこれらの代表的ブランド、Petroff、Jofama、Hein Gerickeはどこも現在はこのタイプのものは生産していませんでした。アメ横でUSタイプの革ジャンがズラーッと並んでいるように、ドイツやスウェーデンで革ジャンを買うとなると強制的にこのタイプとなってしまうような状況を妄想していましたが、そんなに甘いものではありませんでした。ここで現地の知人に相談。スウェーデンとドイツのバンド・マン＆レーベル関係者、そしてついでに革ジャン・マニアのUKブリストルのメタルパンクスにも尋ねてみました。ブリストルの大将は、イギリスではやっぱりこのタイプは1度も見たことないとのこと。ドイツの連中も、「無理だ」、「見つからない」、おまけに「そんなの知らない」などと、とてもDESTRUCTIONの母国で暮らすドイッチェランドの誇りを感じさせない、ガッカリさせる回答も。しかしスウェーデンのあるメタルパンクスが「いいぜ、探してやるよ！歩いて自分の足で見つけるのは今は厳しいから、スウェーデンのオークションでハンティングしてみるよ。でもPetroffのヴィンテージ・ジャケットはこっちでもちょっとしたトレンドだから、けっこう高いぜ。自分でもオークションをチェックしてみてみなよ。俺はSACRIFICEのCrest of Black LPが欲しいから宜しく！」と協力的な回答。もちろん、レコードと革ジャンのトレードではなく、落札価格＋送料の実費以外に手間賃として日本のパンクとメタルのクラシック・レア盤を要求されてしまいました。こういう場合に賄賂は必要ですから仕方ありません。SACRIFICEは要求高すぎなので、後日交渉するとして、最初はご機嫌をとりました。さっそく教えてもらったスウェーデンのオークション・サイトを見てみると、確かに現地の方々にもPetroffのオールドタイプは大人気なのがすぐわかりました。しかもみなさん、結構な値段で落札しています。まぁ、オリジナルのものなら仕方がないと思い、自分に合ったサイズのPetroffジャケットを落札。遂に本場のオリジナル・ジャケットが手に入りました。想定外ではあったけど、国産品も含めて3着も入手してしまったし、これで念願の"独りDESTRUCTIONごっこ"もできます。そしてようやく到着したオリジナルPetroff!!だがしかし!!国産となんら変わらない寸胴シェイプに愕然…。もうこうなったらやけくそで、Petroffとは別ブランドながら素晴らしいディティールのジャスト・サイズがまた出品されていたので、当初の入札予算をオーバーしながらも終了3分前にヒートアップして落札!!あ〜ぁ、日本国内でUKのヴィンテージ・ジャケットが十分に買えるような値段で終了してしまいました。クリックする瞬間は、おそらく私の人生の中で最も男らしい一瞬だったと思います。さぁ、ここまで読んでいただいた方なら大体察しはつくでしょう。そうです、届いた北欧オリジナル・ジャケット2着目も、見事なまでの寸胴体型でした…。

Underground Metal Punk RECORD BOY

Petroffのタグをモチーフにした
BOY革ジャンのタグ

ということで、北欧産オリジナルも80年代国産モノも、日本人には着こなしが非常に難しい寸胴体型だったという結論に達し、今回BOYはPetroffディティールのライダース・ジャケットを、日本人に合ったタイトな体型で復刻してみました。特徴をご説明しますと、

●まずはなんと言っても左胸のDカン。この部分の切り返しがポケットになっていますので、つまりこのDカンはポケットの取っ手みたいな役割を果たしています。

●最近パンクスに人気の"小の字ジップ"に近いけど絶妙なアンバランス具合のフロント3本ジップ。左腕肘下から直下するジップもこのタイプならではの特徴です。

●USタイプのベルトは、個人的にはDESTRUCTIONみたいに膝辺りまで垂れてる必要以上に長いヤツにしたかったのですが、それはやりすぎだと注意されましたので通常の長さです。

●エポレット(肩章)はオッサンのトレンチコートとかでよく見る、折り返して畳んでるヤツ。これもこのタイプには欠かせないポイントです。

●袖口のジップは、UKやUSのものより若干長いので、ぜひ袖まくりして着て下さい。

●背面も実に特徴的で、腰の部分は折り返してボタンでとめることができます。

●肩から脇にかけては生地をヒダ状に畳み込んだプリーツ加工が施されて、動きやすさに対応してあります。

●革はシープスキン(羊革)、インナーはもちろんオリジナル同様に赤です。

受注生産限定での販売で、ご予約は11月10日(水)締切。興味がございましたら当店ホームページhttp://www.record-boy.com/にて、サイズ展開などをご確認ください。

ここまでたどり着くには、たくさんの人のご協力があったことを、今回振り返って思い起こしました。山路氏にはBOYロゴのタグをデザインしていただきましたし、UK EXTRAのヒロタ氏/ジュン氏のお二人には昨今の革ジャン事情を興味深くお話していただきました。そしてこのスウェーデン発祥のライダース・ジャケットを、大先輩であるタケシ・スウェーデン氏とともに復刻できたことは、"スウェーデン"というキーワードで結ばれた運命だったのであろうと感慨にふけりながら、FUUDOBRAINスタッフのみなさんに心から感謝致します。

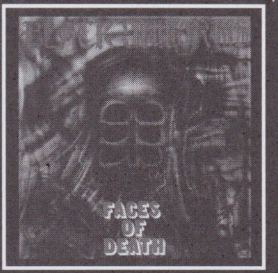


Tokyo Leather Boys Disc Review

仕事柄、作品の紹介は慣れているつもりですが、今回はバンドのサウンドについては極力触れず、その作品のジャケやインナー写真で確認できる革ジャンについて解説したレヴューをさせてもらいました。Petroff社製とも推測できる革ジャンでも確証はできていませんので、ここでは全て"Petroffタイプ"と表記させてもらってます。でもPetroff社製だろうが他社製だろうが、間違いなく全員カッコいいことには変わりありません。

TEXT:大倉 了(RECORD BOY)

BLACK UNIFORMS/Faces of Death



Cliff氏がPetroffタイプを常に着用していたのは、次に紹介するコレクション・アルバムなどから容易に確認できますが、他のフロント・メンバー2人も同じタイプを着ているのが、裏ジャケから確認できます。残る1人のドラマーが着ているのはJofamaでしょうか。ルックス、サウンド、ともに永久に激渋な89年発表クラシック・メタルコア・アルバム。

(Hardcore HorrorHHRLP6)LP

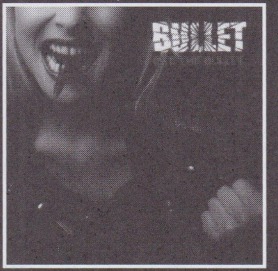
BLACK UNIFORMS/Splatter Punx on Acid



解散後にUSのレーベルからリリースされた、このコレクション・アルバムで、Cliff氏がPetroffタイプを着用してるのが、ハッキリと確認できます。しかしまぁ、極悪に激渋すぎるビッグヘアー・メタルパンクス・フォト満載のインナーに釘付け必至で、Dカンを探すどころではない興奮状態に陥ります。BATHORYやMEFISTO(伝説のカルト・オブスキュア・スウェディッシュ・ブラック・デスメタル)のTシャツを着てるCliff氏の写真も掲載されていて、Cliff氏が故クォーソンと接触してBATHORYとしてセッションしたことがあるという伝説の信憑性を高めさせてくれます。

(Hardcore Holocaust/HH001)LP/CD

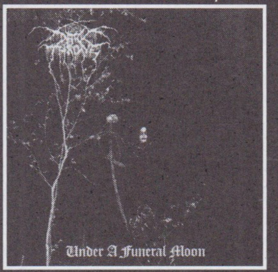
BULLET/Bite the Bullet



私を今回の革ジャン制作に最終的に踏み切らせてくれたのは、実はDESTRUCTIONでもBLACK UNIFORMSでもなく、このバンドでした。現ベーシストのAdam氏の着こなしを見れば、70'sキラーパンク系のファンなども、渋いと感じるに違いありません。ジャケの女性が来ている革ジャンもPetroffタイプです。死ぬまでに1度はDESTRUCTIONみたいな格好して近所を徘徊したいけど、家族に迷惑はかけたくない…。私も含め、そんな方は、このBULLETのAdam氏の着こなしを参考にしましょう。

(Black Lodge/BLOD 046)LP/CD

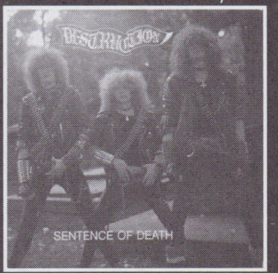
DARKTHRONE/Under a Funeral Moon



ここ数年はキッズに返ったかのような無邪気な原点回帰ぶりで波瀾を巻き起こしているDARKTHRONEのFenriz氏。彼の革ジャンのDカンは、Dと言うよりロと言ってもいいくらい四角いのが特徴です。しかも丈がこのテにしては若干長めで、非常に渋いです。しかしこの93年アルバムの裏ジャケ写真ではFenriz氏は上半身裸ですので、残念ながら彼のレザージャケットは確認できません。リードギターのZephyrous氏がPetroffタイプの革ジャンを着てるのが確認できます。

(Peaceville/VILE35)LP/CD

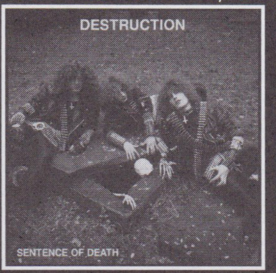
DESTRUCTION/Sentence of Death



当たり前ですが、このバンドに触れずしてデストラクジャン(DESTRUCTION革ジャン)は語れるわけがありません。革ジャン/スパッツ/ガンベルト/パーマ・ヘアーのいでたちで統一したファッションは、当時(そして今も十分)かなりのインパクトを放っていました。SchmierとMikeの両氏はPetroffタイプを素晴らしい着こなしでキメています。本国ドイツ盤とUSライセンス盤はジャケ写真が違うので、両仕様とも確実にマスト・アイテムです。84年デビュー作。

(Steamhammer/SH0020)LP GERMAN PRESSING

DESTRUCTION/Sentence of Death



US盤ジャケ違いヴァージョン。こちらも言うまでもなく激渋なショットですが、革ジャンのディティールをチェックするにはあまり向いてません。ただ、このジャケ写真から推測できるのは、Schmier氏のレザージャケットの革はけっこう薄っぺらいと思われる点です。袖まくりしてる時点でどれもソフトな革だということに違いはありませんが、Hein Gerickeを着てるSODOMの袖のまくり具合いとはやはり全然違います。

(Metal Blade/MBR1039)LP US PRESSING

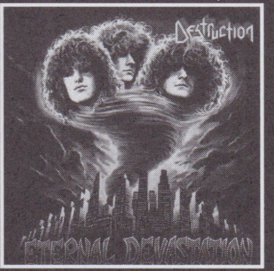
DESTRUCTION/Infernal Overkill



85年1stフルアルバム。モノクロだけど、インナーのフォトセッションが素晴らしい。前作デビューMLPではただ一人違うディティールのレザージャケットだったTommy氏がPetroffタイプをゲット。ガンベルトたすきがけ&ベルトとリストバンドはスタッズ全開で、これ以上何もいう事はないほどに素晴らしいカッコよさです。

(Steamhammer/SH0029)LP

DESTRUCTION/Eternal Devastation



ガンベルトたすきがけはやめたけど、もちろん全員Petroffタイプを着用。ここで判明するのはMike氏の革ジャンが明らかに体にあってないデカさだったということ。メンバーの中でもっとも小柄なMike氏の写真は、私たち日本人の体型に見立てて推測ができる好材料です。肩のラインは落ちてないのに、身幅とアームホールはガバガバ。膝辺りまで垂れてくるUSタイプのベルトという特異なポイントも、Mike氏だからこそ生み出した特徴だったのです。

(Steamhammer/SH0046)LP

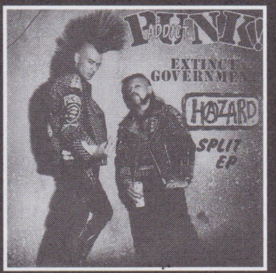
DISMEMBER/Skin Her Alive



革ジャンがデカいのが、またなんとも独特のかっこよさでもあるデスメタル・バンドの着こなしですが、そんな中で珍しくメインのジップの合わせが逆のレディースを着用したメンバーがいるDISMEMBERの91年ピクチャー盤シングル。Petroffディティールのレディースですから、Dカンが右胸に位置しています。Hein Gerickeの右胸Dカンとは全然違った印象を与えてくれて、非常に面白いです。ちなみにHein Gerickeの場合、メインジップの合わせが変わるレディースが、左胸Dカンになってます。

(Nuclear Blast/NB 047 PDS)PICTURE 7"

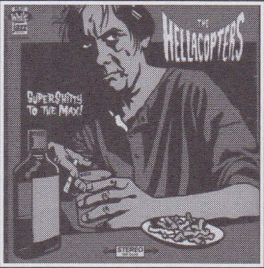
EXTINCT GOVERNMENT/HAZARD-Punk Addict!



The STAR CLUBの初期の写真でも確認できるように、日本のパンクスにとってもDカン付き革ジャンは、以前は馴染み深いものだったようです。ビシッとカスタムしたHAZARDゴチョウ氏の革ジャンは、Petroffタイプを再現した最高の80年代国産革ジャンの逸品。あのHarley Flanagan氏をはじめ、海外ハードコア・パンクスにもファンの多いゴチョウ氏の生きざまがヒシヒシと伝わってくる、オリジナル・ジャパニーズ・レザージャケットです。

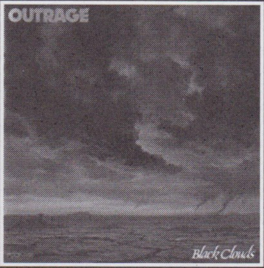
(Overthrow/011)SPLIT 7"EP

the HELLACOPTERS/Supershitty to the Max



スウェディッシュ・デスメタル・シーンにロックンロール旋風を吹き込んでしまったNicke氏は、ENTOMBED時代からPetroffタイプをスマートに着てみせてました。HELLACOPTERS始動後もライヴでPetroffタイプを着用しながら演奏していたのが、この1st LPのインナースリーブで確認できます。ちなみに本作のCDヴァージョンでは、DISCLOSEのスウェーデン盤などもリリースしていたYour Own Jailer RecordsオーナーがライナーノートをIきていました。
(White Jazz/JAZZ001)LP

OUTRAGE/Black Clouds



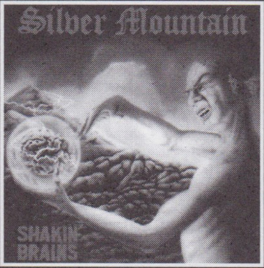
ANTHEMなど日本のメタル・バンドのレコードでも、探せばDカン付きの革ジャンはけっこう見つかると思いますが、このOUTRAGEメジャー第一弾作品の裏ジャケは最も鮮明にそれが確認できます。ギターの阿部洋介氏がカッコよく着ていますが、実はVo.の橋本直樹氏も、初期は白襟のPetroffタイプらしいアンビリーバブルでファンタスティックな革ジャンを着てる姿が、どっかの雑誌で確認されています。あれはぜひともマジマジと眺めてみたいです。
(Polydor/28MM 0631)LP

HELLHAMMER/Demon Entrails



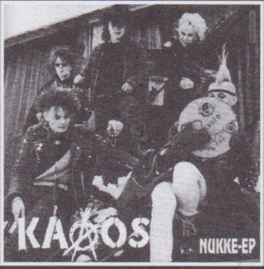
ブックレット掲載の写真の数々がどれも素晴らしく激渋で、Petroffタイプの革ジャンを着た初代ベースVo.のSteve Warrior氏の姿が確認できます。Steve Warrior氏の後任のMartin Ain氏は、フリンジ付きのJofamaタイプを着ていますが、革の質感はHein Gerickeっぽくも見えます。しかしHein Gerickeがフリンジ付きなんてモノを発売してたのでしょうか?今年発売されたTom G. Warrior自伝本「Only Death Is Real」でもさらに大量の激渋フォトが公開されましたので、そちらも併せて必見です。
(Century Media/9977391)LP/CD

SILVER MOUNTAIN/Shakin' Brains



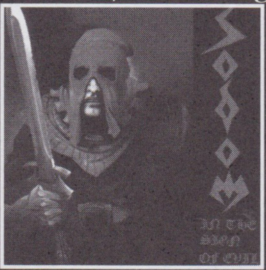
哀愁の旋律と荒削りテクニカルなギター・プレイで日本で人気の高いスウェディッシュ・ヘヴィメタル・バンド。昭和鋼鉄信者の涙を誘うメロディーからはちょっと離れたイメージの、裏ジャケのメンバー写真が最高に渋いです。メンバー4人が黒を基調とした革ジャン姿で、うち3人はライダース・ジャケット。もちろんPetroffタイプ着用メンバーもいます。この1stアルバムと並んでファンには人気の高いデモ音源ブートCDが存在するのですが、そのジャケ写真の革ジャン姿もまた激渋。
(Roadrunner/RR 9884)LP

KAAOS/Nukke



フィンランド・ハードコア・パンクの中でPetroffタイプの革ジャンを最も強く印象付けているのはKAAOSでしょう。なんと言ってもこのジャケ写真が最高にカッコいいです。フィンランド盤は数種ヴァージョンがありますが、ポスタースリーブのものがやっぱり嬉しいです。1stアルバム「Ristiinnaulittu Kaaos」LPもポスタースリーブで、Petroffタイプを愛用している姿が確認できます。
(Fight/003 1/2)7"EP

SODOM/In The Sign of Evil



ジャーマン・スラッシュメタル史におけるDカン革ジャンというとDESTRUCTIONのイメージが強すぎですが、SODOMの革ジャンにもしっかりDカンは付いています。Angelripper氏とWitchhunter氏が着てるタイプは右胸にDカンがあり、左上腕部のタグから察して、Hein Gericke製のものに間違いないでしょう。スカンジナビアのハードコアなメタル好きならPetroffに次ぐ2着目はJofama、ジャーマン・スラッシュメタル好きならPetroffとこのHein Gerickeを押さえたいところです。
(Devils Game/DG001)MLP

KAZJUROL/Messengers of Death



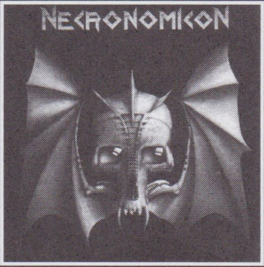
スラッシュメタル・マニアにとってはさえないクロスオーバー・スラッシュというイメージの強いスウェーデンのバンドだけど、87年にUproar Recordsから発表したこの1st EPでは素晴らしいメタルコア・サウンドを聴かせてくれます。しかしここではそんなことはどうでもよく、メンバーのファッションについてですが、ツイン・ギターのトロージャンの方が、Jofamaと思われる右胸Dカンの革ジャンを、EXPLOITED風に袖をペイントしています。Vo.の袖切り革ジャンも、ジップの斜め具合がJofamaっぽい気がします。
(Uproar/004)7"EP

TORMENTED/Rotten Death



現行のスカンジナビアン・デスメタル・バンドで、ここまで革ジャン姿がカッコいいのは他にはそういないのではないでしょうか?MARDUKなどのスウェディッシュ・デス重鎮らによるバンドならではの、圧倒的な威圧感のメンバー写真が最高にカッコいいです。4人中、2人がJofamaタイプの革ジャンを着用。これが最高に渋い。これ見て、Jofamaタイプの渋さを再確認させられました。Petroffタイプの革ジャン着てるメンバーもいます。
(Nuclear Winter/NWR 036)LP

NECRONOMICON/Same



ドイツのDESTRUCTIONフォロワーの86年名作1stアルバム。もともとハードコア・パンクスだった事もあって、ファッションのポイントが非常に抜け目ないです。Petroffタイプの袖をまくって肘までの鋲リストバンドを着用。本家DESTRUCTIONがサウンドと並んでルックスも変態だったのに対し、NECRONOMICONは取り入れやすいスタイルで実践してて、ファンには大変参考になります。近々アナログ盤がオフィシャル再発されるので、楽しみに待ちましょう。
(Gama/Wave 941 452)LP

WITCHES HAMMER/Stretching into Infinity



ここまでレヴューしてきて気づくのは、やはりイギリスとアメリカ大陸のバンドが一つもないということ。しかし見つけました。BLASPHEMYメンバーが在籍したカナダのオブスキュア・スラッシュメタル・バンドで、Fenrizのジャケットにも似た、右胸に四角いDカンが付いている革ジャンを着てるメンバーがいます。このバンドはサウンド、ガイコツ・ロゴ、そして今回のDカン革ジャンと、とにかく全てがカッコいいので、CD化でもLP再発でもしてほしいものです。
(Nuclear War Now/ANTI-GOTH 033)LP

Tokyo Leather Boys Disc Review

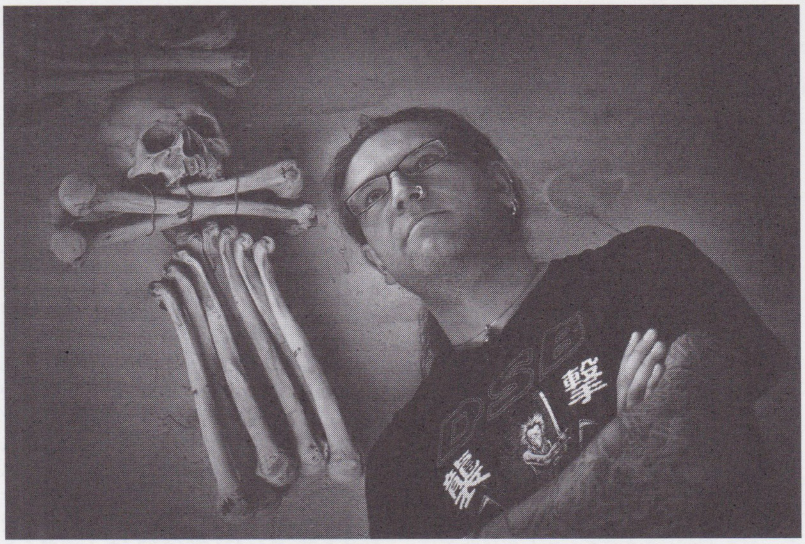
この夏、SEE YOU IN HELLと共に2度目の来日を果たした、チェコのハードコア・パンク・レーベルINSANE SOCIETYの主宰者、Barvak。彼とはチェコ・フラデツクラーロベーで一度会っていたのですが、日本・高円寺で再会した時に思いっきり「やぁ、はじめまして」と言われ、己の存在感の希薄さを嘆いたのはここだけの秘密です(泣)。
Vol.4にて掲載したPAPAGÁJŮV HLASATELが幅広いオールマイティなレーベルならば、INSANE SOCIETYはハードコア・パンク・オンリーに特化した存在と言えるでしょう。設立から15周年を迎えた現状、そして過去、日本についてなど色々と訊いてみました!

■君のウェブサイトを調べてみたら、最初のリリースはOSTROV Pの「Neverte」EPみたいですね。どうして彼らをリリースしたのですか?レーベルを始めたのは1995年?

「まず最初に、興味を持ってくれてありがとう!世界中でもヨーロッパの東側のシーンに関心を抱いている人はそう多くないけど、君は沢山サポートしているね!
そう、正式には1995年に僕はレーベルを始めたんだけど、Insane Society 1 – 3という3本のコンピレーション・テープを、最初の7インチをリリースする前に出していたんだ。それにその時、僕は友人とデモ・テープのちょっとしたディストロ・リストも持っていたんだ。だからINSANE SOCIETYが本当に始まったのは1993年くらいにまでさかのぼるね。今になって当時のことを振り返ってみると、物凄く熱中はしていたけど、プロフェッショナルではなかった。自宅のステレオを使ってテープをダビングして、古いAtariのコンピューターでフライヤーを作って(全部DOSシステムだったよ)、ゼロックス・コピーしたりでさ。
チェコ/スロヴァキア・ハードコア・パンク・シーンは未成熟で、あの頃は大きなレーベルなんて存在していなかった。OSTROV Pはスロヴァキアのバンドで、その7インチは僕がチェコで流通させていた彼らのデモ・テープを収録したものだったんだ(1曲だけ未収録)。それである日、そろそろヴィニールを出す時が来たんじゃないかと思い立った。OSTROV Pは僕のお気に入りの一つだったしね。僕はシンガーのBozenaに手紙を出したんだけど、そしたら彼が電話をくれて、僕がやっていることや音源の詳細について話し合ったんだ。話しは簡単に進んで、彼はこんなようなことを僕に言った。"出そうぜ!君が何を必要としているか、俺たちに知らせて欲しい"ってね。その後、彼らは解散してしまったがBozenaはDO NOT X RAYというバンドで活動し、それが後にILLEGALITYへと発展して行ったんだ。ILLEGALITYはスロヴァキアでSYSTEMATIC DEATHと対バンしたよ。僕はBozenaと再び会うことができて凄く嬉しかったな。あと僕がレーベルを始めた時、これが15年も続くなんて考えたこともなかったってことを言っておかないと。時々、プレス工場へ行って最初のヴィニール作品を発注したことが、昨日のことのように思われるよ」



Barvak/Photo by Leggo - DEVIATED INSTINCT



■始めた時に意識していたレーベルはありましたか?

「確実にMalarie、Day After、View Beyond recsといったチェコのレーベルだね。僕がハードコア・パンク・シーンに関わり始めた時、それらは主要なDIYレーベルだった。あらゆるチェコのアンダーグラウンド・レーベルは、共産主義が崩壊した1989年か1990年に始まった。僕らは情熱に溢れていたし、数ヶ月後には世界を地上の楽園に変えられるんじゃないかって考えてもいたよ。外国のバンドがチェコでプレイするようになり、それは彼らにとっても素晴らしい瞬間だったように思う。毎回、何百人もの人々がショーに押し掛けてきた。僕らは本当に、新しい音楽に飢えていたんだ。旧体制の"陰鬱"は消え去り、チェコのバンドが数多く活動を始めた。彼らは決して良いミュージシャンではなかったけど、エナジーに満ちていて、とても政治的だったよ。当時の格好良いバンドを聴きたかったらNONCONFORMISTやHEARTLINE、MRTVA BUDOUCNOSTを探してみるといいよ。以降のバンドはもっとプロフェッショナルになっているけど、こういったバンドは僕にとって重要な存在なんだ。数えきれないくらい彼らのライヴも見た。ディストロのアイテムをカバン一杯に詰め込んで、いつも電車で行っていたな。地元の駅に接続する電車をひたすら待って、幾晩も駅で過ごしたりね。古き良き時代だよ。今じゃ僕はレイジーになっちゃって電車ではなく車での移動を好んでしまっている。それに僕のディストロを持ち運べるほど、僕のハンドバッグは大きくないしね」

■リリースするバンドはどのようにして選んでいるのですか?

「うーん、これはちょっと難しいね。もちろん音楽は最も重要なことではある。バンドを聴いて、彼らが僕に衝撃を与えてくれたのなら、自分のレーベルから彼らの作品をリリース出来ないか、それを頼むかどうかを考え始める。けどバンドと僕とがどこかで繋がっているという感覚も必要なんだよね。リリースした大部分のバンドは長いこと僕の友達だったり、彼らの以前のバンドを出したことがあったりする。その他には、ツアー先で出会ったりショーを見て感激したりとかだね。歌詞も大切だよ。RUPTUREみたいに挑発的だったりニヒリスティックな歌詞は僕にとってはイマイチなんだ。リリースにおいて一番大切なことって、バンドが全ての作業を終えて、新しいレコードを手にした時に、僕とバンドが"新しい子供が生まれたね"って言えることかな。
売れるか否かはそんなに重要ではないよ。プレス工場からレコードが届く瞬間が大好きでね。一番最初に僕がレコードを目にすることが出来るからさ。DIYハードコア・パンク・レーベルを運営することは情熱だよ。金儲けじゃない」

■一人でレーベルを運営しているのですか?

「うん、僕一人だけでレーベルを運営しているよ。INSANE SOCIETYは僕そのものだ。時々ガールフレンドや友達が大きなフェスでの物販を手伝ってはくれるけど、大部分の時間は"ワンマン・ショー"だね。だから僕がジャケットのグラフィックにフライヤー、ウェブ・ショップのアップデート、荷物の梱包をやり、レコードを完成させ、ショーで販売しているよ。昨年からスクリーン・プリントも始めたんだ。だから今はパッチやTシャツ、パーカーや限定盤のジャケットも自分で印刷している。もし君がSYSTEMATIC DEATH/SEE YOU IN HELLのスプリット7インチの限定盤を持っているなら、僕のやっていることを確認出来るよ。ポスターと通常盤以外は全部僕が自分の手で刷ったんだ。スクリーン・プリントが好きなんだよね。コンピューターの前に座っているのは退屈だけど、これはリアルな作業だから。プリントしているTシャツなどは全部オフィシャルだし、バンドと連絡をとるのも楽しいね。長いこと自分が聴き続けているバンドだからさ」

■INSANE SOCIETYが君の仕事?

「工場で働いていたけど8年前に辞めたんだ。毎日、工場から帰宅してからレーベル業をやるのがとてもしんどくてね。最終的に、本当に疲れきっていた僕は次に何をすべきか決めなければならなかった。そこには2つの道しかなかったんだ。仕事を辞めるか、レーベルを辞めるか。それで僕はレーベルを仕事とすることを決意した。金の問題じゃない。自由でありたかったんだよ。決して金持ちにはなれないだろうけど、自分が好きなことをするってことが大事なんだ。レーベルを仕事として成り立たせられるとは思ってもみなかった。夢が叶ったよ。もちろん、大変な仕事だし自由な時間も全然ない。けど今でも好きだし、良い選択だったと思っている。多分、いつの日か僕は工場の仕事に戻ることになるだろう。それは分かっている。でも、この瞬間、僕はレーベルをやって自分のベストを尽くしたいんだ」

■初めてハードコア/パンクと出会ったのは何歳の時?

「そいつはかなり昔になるね。年上の友達がいて、彼らは自分らが聴いている音源を僕にダビングしてくれたんだ。思い出してみると、11〜12歳くらいの時だったかな、古いMETALLICAにIRON MEIDENなどをもらったんだ。それから昔のチェコのパンク・バンドを手に入れた。P.S.、H.N.F.、N.V.Ú.とかね。それから僕のハードコア・パンクへの情熱が始まったんだ。当時はオフィシャル音源を買うのは不可能だった。ハードコア・パンクとメタルはチェコスロヴァキアじゃ半分違法な存在だったし、東側諸国じゃどんなレコードも本当に高くて手に入れるのが大変だったんだよ。だからみんなレコードをテープにダビングして、それをまた友達がテープに録って、なんてしていた。14歳の頃には友達にダビングしてもらった良いテープを沢山持っていたよ。SEPTIC DEATH、ACCUSED、D.R.I.、S.O.D.、FINAL CONFLICT、BATHORY、EXTREME NOISE TERROR、INTENSE DEGREE、EXPLOITED、NAPALM DEATH、CORROSION OF CONFORMITY、LETHAL AGGRESSION、WEHRMACHTといったバンドのね。それにS.O.B.とROSEROSE!!!だから僕は20年前から日本のバンドを聴いているってわけ、ハハハ。何回も繰り返しダビングされているから、時に音質は最悪だったりするんだけど、新しい音源が聴けるだけで凄く嬉しかったな。君も知っているように、僕はハードコア・パンクとメタルをいつも一緒くたにしていたよ」

■パンク/ハードコア以外で好きな音楽は?趣味は何ですか?

「音楽は色々と聴いているけど、メインはメタル(ENTOMBED、BOLT THROWER、OBITUARY、ASPHYX、CARCASS、MIASMAL、GALLHAMMER、PESTILENCE、NAPALM DEATH)とクラスト(AMEBIX、AXEGRINDER、DEVIATED INSTINCT、SACRILEGE、EXTREME NOISE TERROR、ACROSTIX、DISRUPT、CONSUME、FRAMTID、STATE OF FEAR)、それにハードコア・パンク(FRO

M ASHES RISE、TRAGEDY、ICONS OF FILTH、DEATH SIDE、FORWARD、JUDGEMENT、PAINTBOX、BOMBENALARM、MASS HYSTERI、VICIOUS)。他にも大量に聴いてはいるよ。
けど時々、特に車を運転している時なんかは違う音楽を聴くのが好きだね。HAGALAZ RUNEDANCE(パガン・フォーク)に、MASSIVE ATTACK(トリップ・ホップ)、SISTERS OF MERCY(ゴシック)とかね。あとは昔のマドンナみたいなポップなのも。趣味に費やす時間が全然ないんだけど、時間がある時は読書をしているよ。基本的にSFが好きなんだ。コミックもよく読んでいる。Sin City、Hellboy、Sandman、Conan、Watchmen、300、Usagi Yojimbo、Hitman、Preacher、Wolverineが好きだね(※そういえば、アニメのカバンを彼は持っていました…)。映画も見るよ。お気に入りはBlade Runner、Mad Max 2、Lord of the Rings、X-Men、Watchmen、初期のConan、Godfather。それにMonty Python's Flying CircusやEraserhead、Tetsuoみたいなイカれたのも好きだな。北野武の映画も素晴らしいよ。BrotherやZatoichiとかね。アニメを見るのも好き。Ghost in the shell、Hellsing、Cowboy Bebopに宮崎駿の映画。
僕はずっとヴェーガンだから料理もするんだ。ガーデニングも好きでね、唐辛子やトマト、キュウリといった野菜を育てている。夏になると沢山の赤唐辛子もね。それとWarhammerというゲームのフィギュアや映画のフィギュアも集めている。ハードコア/パンクのアーティストも好きでさ、TomにSugi、あとPusheadも。彼らが手掛けたジャケットも集めようとしているんだ。旅行も凄く好き。僕が多趣味だってことが分かっただろ。でも一日は24時間しかないんだよな」

■この夏のツアーはどうでしたか?日本に来るのは初めてでしたっけ?

「2回目だったんだ。最初は4年前に、SEE YOU IN HELLと一緒に来た。僕とJozka(SYIHのヴォーカル)、Filip(同ギター)はずっと日本のハードコア・バンドを聴いてきているし、日本人のペンパルも何人もいるからね。NATやDIY、BLURRED、それに他のレーベルともレコードのトレードをしているし、FINAL EXITやARGUE DAMNATION、UNHOLY GRAVE、DISCLOSE(ノイズ・マスター川上、安らかに)とも連絡をとっていた。だからSEE YOU IN HELLが日本に行くことになって、それに僕も同行出来たから最高だったよ!長いこと手紙やメールでは繋がっていても、直接顔を合わして会えるのはとても素晴らしいことだよね。
衝撃を受けたのは、ツアー・スケジュールをもらって、共演する素晴らしいバンドたちの名前を見た時だね。彼らのライヴを見られるんだって感激したよ!全然知られていないヨーロッパの東側のバンドのツアーを企画し、日本へと招聘してくれたShingo Maedaにはとても感謝している。日本を去る時に、いつか戻って来れたらと思っていたんだけど、この夏にはCROWのTomioが2度目となるSEE YOU IN HELLのツアーを企画してくれた。ちょっと複雑だったのは、僕がSEE YOU IN HELLと一緒にチェコを出発出来なくて、何日か遅れて松阪で合流したんだ。VIVISICKのYuki、D.S.B.のHeat、CROWのTomio、CONTRAST ATTITUDEのGori、ツアー中に助けてくれたみんな、どうもありがとう。2度目のツアーは夢みたいだったよ!古くからの友人、新たな友人にも会うことが出来た。素晴らしいバンドを沢山見て、面白い場所も訪れることが出来た。ショーを企画してくれた人たちはみんな本当に協力的で親切だったし。いつかまた戻ってくるからね」

■色々なバンドのライヴを見ましたよね。気に入ったバンドはいましたか?

「ハハハ、良い質問だ。けど少しだけ名前を挙げるのは難しいな。演奏を開始すると、全てのエナジーをステージへと向けることが日本のバンドの特性だよ。今回のツアーで気に入ったのはEND OF SEEDS、CONTRAST ATTITUDE、PADLOCK、AGE、SHORT FUSE、HAZARD、VIVISICK、KRIEGSHOG、STAGNATION、C、UNARM、SYSTEMATIC DEATHだけど、他のバンドもグレートだった。僕は遅れて到着したから、REALITY CRISISとAXEWIELDを見逃したのが残念だった。けど一番残念だったのは、DEATH SIDEのショーの日まで日本に滞在出来なかったことだな。ところで、最初のツアーで見たAGEのショーは僕のこれまでのハードコア・パンク・ライフの中でも最高の一つだったと



RISPOSTA



SPLITTER



MALIGNANT TUMOUR



LYCANTHROPHY

EVIDENCE SMRTI



SEE YOU IN HELL



FESTA DESPERATO



GRIDE



言っておかないとな。AGEはもうすぐブルノでプレイするよ。また彼らを見るのが待ちきれないな。色んなバンドがチェコで演奏してきた。SYSTEMATIC DEATH、FRAMTID、DUDMAN、NK6、NIGHTMARE、BATTLE OF DISARM、UNHOLY GRAVE、そして今度はAGEとCRUDE。もっと沢山来てくれると良いな」

■日本のレコード屋はどうでしたか?BASEとBOYでたまたま会いましたが(笑)。

「うん、BASEとBOY、それにNATを訪れた。お店を経営して、僕のリリースを広めるのに協力してくれている人たちと会えて嬉しかったよ。サポートをありがとう。それにDISK UNIONの何店舗かと、PUNK AND DESTROY、VORTEXにも行ったよ。45 REVOLUTIONにも行く予定だったんだけど、十分な時間がなくて行けなかったんだ。出来れば次の機会にね。
全てのレコード屋は天国であり地獄だったよ。天国っていうのは、ジンやインターネット・オークションでしか見たことのないレコードが目の前にあって、しかも買うことが出来るってことが凄かった。ずっと欲しかった古い名盤のオリジナル・プレスがあるんだぜ。地獄っていうのは、僕の財布とクレジット・カードにとって地獄だったってことさ、ハハハ。日本のレコード屋に行くってことは、自分のお金とお別れをするってことだから!そうそう、沢山レコードを買ったよ。今のチェコの人たちはインターネットでmp3をダウンロードするだけなんだけど、それは僕のやり方じゃない。ヴィニールやCDといった"リアル"なものが欲しいんだよ。
レコード屋だけじゃなく、東京では色んなところへも行ったよ。江戸東京博物館は面白かったね、刀剣博物館や古いお寺なんかも。チケットが完売していて、ジブリ美術館には行けなかったけどさ。もちろん秋葉原とまんだらけにも行ったよ。最終日には六義園にも行ったんだけど、あそこは最高だった!池を眺めながら抹茶を飲んでね。リラックス出来たし、凄く穏やかな瞬間だった。この滅茶苦茶慌ただしい世界においては、滅多に味わえない体験だったよ」

■何か驚きはありましたか?新宿の人の多さとか。

「そうだな、初めて日本に来た時はあらゆることが大きな驚きだった。もう違う惑星にやって来たのかと思ったよ、ハハハ。地図を持っていても行きたい場所を見つけるのが大変だったな。最も驚いたのはクラブの大音量だよ。うるさ過ぎる!耳がおかしくなるんじゃないかと思ったくらいさ。って冗談だよ!今回衝撃を受けたのは横須賀だね。ショーは素晴らしかったけど、あの街は好きになれないな。日本に存在する小さなアメリカみたいだった。通りを行く人らはみんな僕らがアメリカから来たと思っていたんだ。イカれているよ。
そう、東京の交通機関には混乱する。1000人くらいしか人が住んでいない小さな村に暮らしている僕にとっては複雑過ぎるんだ。新宿には凄く混乱したけど、何日かすれば僕でも理解出来るようになった。けど最も狂っているのは渋谷駅周辺だよ。レコード屋とか買い物に行きたかったんだけど、迷子になっちゃってさ。それでライヴに遅れてNK6を見逃してしまったんだ。みんなごめんよ。君らのライヴを本当にまた見たかった。
ところで、日本は変化しているように思う。"外国人に優しく"なっているように思うんだ。ヴェジタリアン/ヴェーガンの食事を見つけるのも難しくはないし、通りには英語の表記をよく見かけるようになった。それに人々は以前より英語を話すようにもなっている。けど、君の国の文化的なルーツは、世界のあらゆる所とかなり異なっている、それが素晴らしいんだ!」

■では、今後について聞かせて下さい。

「レーベルの予定はもちろん色々とあるよ。

LYCANTHROPHY/ST LP – チェコの女性ヴォーカルによるエクストリーム・ハードコア/グラインド
MOTHER LP – チェコのスロウ・スラッジ・ハードコア
EVIDENCE SMRTI – デモ2008 LP – 片面ヴィニールで、B面にはスクリーン・プリント。チェコのクラスト/メタルで、オリジナル・ヴォーカルはこのバンドでは全く違う一面を見せている

AMEBIXのメンバーと一緒に。オフィスにて。



EVIDENCE SMRTI – new LP
FESTA DESPERATO – Psi Vatikanu LP – チェコ・ロウ・クラスト
DEVIATED INSTINCT – Peel Session/Nailed LP – UKステンチ・コアの1990年未発表のPeel Sessionに、「Nailed」12"をB面に追加

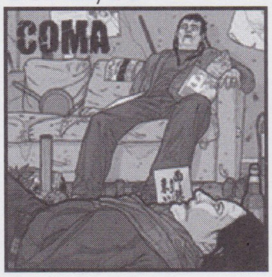
東京のハードコア/パンク・バンドを、12" LPのフォーマットで出せたらなと思っている。知っての通り僕は日本のハードコア/クラスト/パンクが沢山好きだから、もし君たちのバンドがヴィニールでのリリース先を探しているなら連絡が欲しいな」

■インタヴューに応じてくれてありがとう。日本の読者にメッセージを。

「君のジンのスペースを割いてくれて、そして興味深い質問をありがとう。僕の答えが退屈じゃなければいいな。日本で楽しませてくれた人たち、出会った人たち、みんなにハローと言いたい。Kampai!」

INSANE SOCIETY DISC REVIEW

COMA/ST



2005年のリリースで今更なんですが、スウェディッシュ・ハードコア・バンドの15曲入りアルバム。Michael Bukowskiによるジャケットに描かれたDISCHARGEとGAUZEが物語るように、とことんストレートに突っ走るファスト&スラッシュ・サウンドで完全燃焼。まだ入手可能だと思いますので、同国のSKITKIDS辺りが好きな人はゼヒ。スプリットの音源などを追加したCDも発売中です。
(IS 067)LP

RISPOSTA/Schválen Byl Nový Řád



スカンジ・スタイルのクラスト・コアですが、楽曲もよく練られていてこれは素直に格好良い!ブルノの若手ロウ・パンクスによる1stアルバム。WBTDのジャックによるマスタリングも功を奏してか、破壊力のあるダイナミック・サウンド+チェコ語のイーヴィル・ヴォーカルで聴き手を捩じ伏せる。7インチ・サイズのブックレットには歌詞の英訳にブラックなアートワークも満載でポイント・アップ。
(IS 094)LP

ARMAGEDOM/Sem Esperancas



ブラジリアン・ハードコアの代名詞、ARMAGEDOMの3rdフル・アルバム。Vol.4に掲載したインタヴューでは、「体にはSTIFF LITTLE FINGERSのロックンロールの血が流れていた」なんて発言していましたが、激速リフが牽引するこの南米クロスオーバー・スラッシュ・ハードコアからSLFの影響を感じ取るのは不可能です(笑)。衰え知らずのパワフルな仕上がり!リマスタリングはBri/DOOMが担当。
(IS 087)LP

MOTHER/ST



ex.THEMA ELEVENのメンバーによるプラハ産スラッジ・ハードコアの1st 7インチ。ブルージーな音色で底の見えない奥行きも感じさせる、陰鬱にたゆたうスロウ・ヘヴィ・チューンのA面。呪詛するかの言葉の呟きに生っぽい演奏が相まってクールです。B面は一転して温かみのあるアコースティック・ギター一本で独自のスラッジ観を体現。今度リリースされるLPに期待が高まる一枚。
(IS 096)7"

Split/LAHAR/STOLEN LIVES



PHOBIA RECORDSとの共同で発表された、LAHARとSTOLEN LIVES(どちらもチェコのバンド)によるスプリットLP。前者は激烈に刻みまくるクロスオーバー・ハードコア。後者は完全にスラッシュ・メタルですが母国語のシャウトが鮮烈で、両バンドとも仲良くINFESTのカヴァーを収録しています。ジャケはMUNICIPAL WASTE等々を手掛けているAndrei Bouzikovによるもの。
(IS 090)LP

EXCRUCIATING TERROR/Expression Of Pain

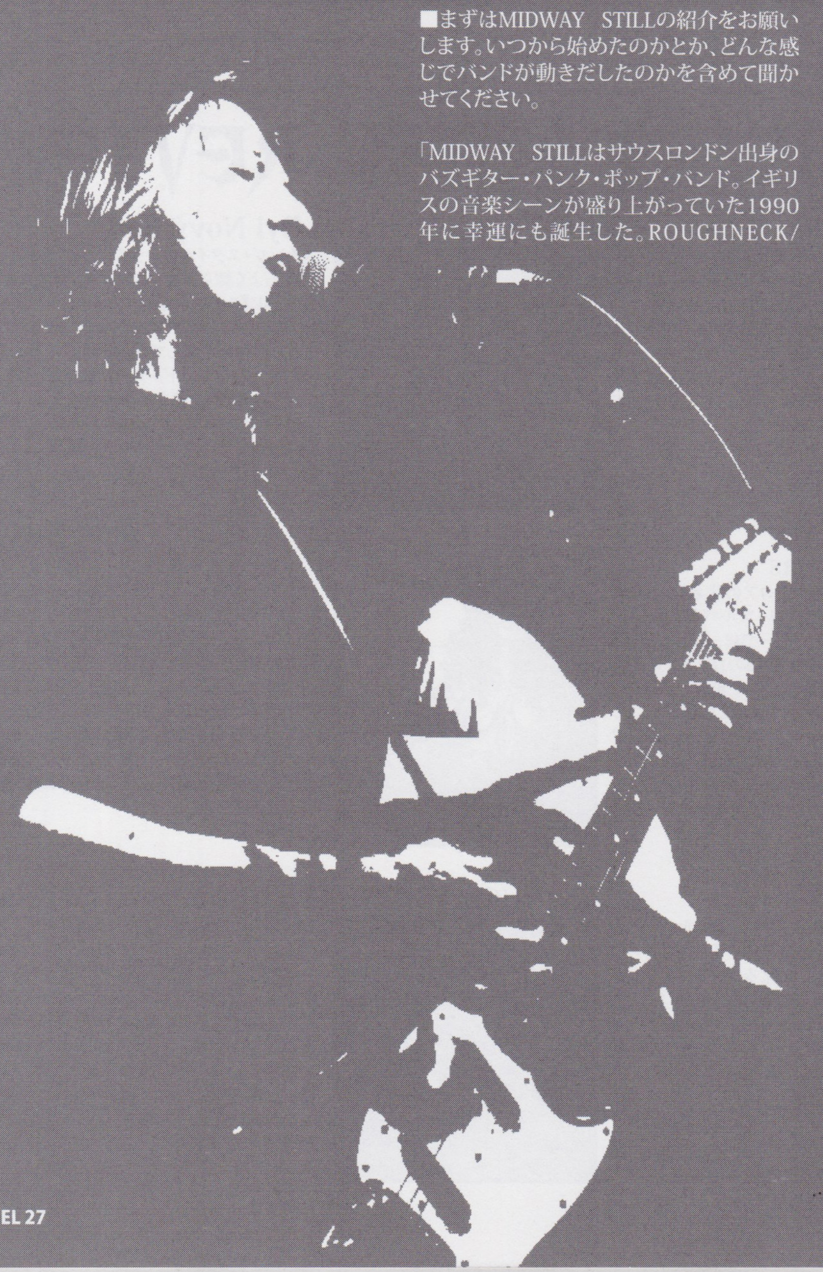


1995年頃にCDでリリースされた米国LAグラインド・クラスト・バンドの1stアルバム、そのアナログ再発盤。基本ENTの路線ですが、そこにDISCHARGEとブラック・メタルのフレーヴァーも加味して突貫。しかし下水道ゴボゴボ・ヴォイスを聴いていると全曲同じに聴こえてしまうという悲劇。メンバーは現在BLOODY PHOENIXで活動中のようです。部屋には絶対貼りたくない死体ポスター付き。
(IS 099)LP

MIDWAY STILL

1990年サウス・ロンドンにて結成され、当時はMEGA CITY FOURやSNUFF、LEATHERFACEなどとも多くのツアーを回っていたMIDWAY STILL。
「バーズmeetsメタリカ」と形容されたサウンドは、繊細なメロディーとハードなサウンドを同居させた、まさに90年代ロックンロールの姿で本国では大人気を誇っていたが、日本では雑誌のレヴュー等で地味なバンドといったイメージが先行してしまったような気がする…。そんなMIDWAY STILLだけど、今年に入り突如再結成を果たすことになる。しかも一時的なものではなく、ちゃんと継続していくバンドとして。
そしてリリースされたニュー・アルバムはこれまでで最高の音源にもなっているんだ。やりたいからやるんだという強い意志が現れている。そうしてついに、日本でツアーを行うのだ。自腹でのツアーで構わないから、協力して欲しいといわれたら断れないよ。本気で再始動を始めたMIDWAY STILL。バンドの状態も今までで一番いいと言い切れる万全の状況。ぜひライヴ会場に足を運んでいただけたらと思う。ラウドなギター・サウンドが好きな人であれば、絶対に気にいっていただけるサウンドだと思う。ギター・ヴォーカルのポールが答えてくれました!

INTERVIEWED:WSオニギリ



■まずはMIDWAY STILLの紹介をお願いします。いつから始めたのかとか、どんな感じでバンドが動きだしたのかを含めて聞かせてください。

「MIDWAY STILLはサウスロンドン出身のバズギター・パンク・ポップ・バンド。イギリスの音楽シーンが盛り上がっていた1990年に幸運にも誕生した。ROUGHNECK/FIREから「DIAL SQUARE」、「LIFE'S TOO LONG」という2枚のアルバムをリリースしてイギリスの主要な音楽誌からも運良く注目を集めることが出来たんだ。MEGA CITY FOUR、SNUFF、LEATHERFACE、SENSELESS THINGS、JACOBS MOUSEといったバンド達と可能な限りツアーをしまくっていたよ。メンバーの出会いは俺が音楽誌に「バート・バカラック・ミーツ・モーターヘッド」の様なサウンドをやりたいみたいな感じでメンバー募集ページに応募して、それで連絡があって他の2人に出会ったんだ。デックとジャン(オリジナル・ベーシスト)はすでに他のバンドを一緒にやっていた知り合いで2人が連絡をくれた。最初の練習が終わった時点ですでに5曲も完成していたんだ。あっさりとね」

■バンドを結成した当時はどんなバンドに影響を受けていたのですか?目標にしていたバンドとかはどんなバンドでしたか?

「俺達が好きだったバンドは殆ど共通していた。DINOSOUR JR.が一番の影響を与えてくれていたかな。他にはLEMONHEADS、BUFFALO TOM、SNUFF、SQUIRREL BAIT、HUSKER DU、FUGAZI、THE DAMNED、SEX PISTOLS、BURT BACHARACH、FEEDTIME、VENOM、METALLICA、THE BEATLES、THE BYRDS、THE KINKS、AC/DC、THE CRAMPS、きりがないな(笑)。デックは素晴らしいレコード・コレクションを持っているよ。ジャンは…KATE BUSHだな」

■MIDWAY STILLは、あの当時のイギリス・シーンでもかなり知られていた存在だったのでは。しかもROUGHNECKという、当時すでにインディー・レーベルとしてかなり大きな存在だったレーベルと、1st 7"シングルのリリース時点から契約していたっていうのは、かなりすごいことだったと思います。どういった経緯でリリースが決まったのですか?

「ロンドンでは数回ライヴをやったばかりで、トータルでも10回にも満たない感じだったんだ。信じられないけれどメロディーメーカーやNMEといった音楽誌が俺達のことを絶賛してくれたんだ。この音楽誌は今では考えられないくらい音楽シーン全体に絶大な影響力を持っていた。それで掲載された直後から数多くのレーベルが名乗りをあげてくれた。メジャーもだよ。だけど、ROUGHNECKのローレンスに会った時に彼の情熱と人柄を知って彼のレーベルを選んだんだ。彼は10分間の打合せの時にギネスビールをかかさず俺達におごってくれたんだ。そんなやつに誘われたら断れないじゃない?(笑)けれども、そんな彼が現在のイギリスの音楽シーンに最も影響を与える男になっているなんて信じられないよ。だけど現実なんだな」

■ツアーをかなりやっていましたが何か印象に残っていることってありますか?

「ROUGHNECKからもらったお金で青色のバンを手に入れたんだ。ボロボロだったけど、後部シートにマットレスとクッション、巨大なスピーカーを詰め込んで家のように仕上げたんだ。深夜移動中に頭がおかしくなるくらいの爆音で音楽を聴いていたのが懐かしいな。今じゃ絶対やりたくないけどね(笑)。後になってテレビ付きのバンに買い替えられたんだけど、思い出は最初のボロバンでのことばかりだよ。エンジンを冷ます為にラディエーターにしょんべん入れて家まで無事辿り着いたこととかさ。もっと他にも面白いことはあったんだけど、個人的なことになるから黙っていた方がいいな(笑)」

■1stアルバムの「DIAL SQUARE」は日本では未だに90年代のUKメロディック・パンクを語る上で登場する作品です。自分たちの作品が未だに評価されていることについてどう思いますか?

「うーん、自分自身じゃ「DIAL SQUARE」は聴くに堪えない作品なんだよね。いくつか好きな曲もあるけど、上手く俺達のサウンドを表現できていないと思っている。レコーディングもかなり急いでやったし。大きなスタジオなんて初めてで戸惑ってどうしたらいいのかよくわからなかったってのもあるし。最近、何曲か再録音しようかって話しもしたんだけど、やっぱりやらないことにしたよ。もしも、数人の人があのアルバムを未だに好きでいてくれるならそれは驚くべきことだよ!俺達は間違っていなかったのかもしれないね。話しはアルバムのことから逸れるけど、HUSKER DUの「ZEN ARCADE」って音質は悪いけど、俺の一番好きなアルバムだな」

■NIRVANAの初のUKツアーをサポートしましたよね。あれはどんな経緯だったんですか?元々知り合いだったんですか?

「家でぼーっとしていたら当時のNIRVANAのツアー・マネージャーから突然電話がかかってきて、NIRVANAのツアー・バンが次の会場に向かう途中ブリストルで故障しちゃっているから、到着するまで代わりに演奏をしてくれないかって、いきなり言われたんだ。NIRVANAは絶対ブレイクするバンドだと思っていたし、デックと俺は「BLEACH」の頃から彼等が好きだったからすごく興奮したのを覚えている。電話がかかってきたのが2時頃で、8時までに彼等のステージに立たなきゃいけなかったけどなんとか辿り着いて演奏した。それがNIRVANAの"NEVERMIND"ツアーのイギリス初日だったんだ。会場にいた観客の空気はNIRVANAへの期待で凄まじかった。忘れられない夜になったね。結局その夜は彼らに会うことはできなかったけど、数週間後にロンドンでライヴの後にデイヴ・グロールがやってきてくれて、こう言ってくれたんだ。「サポートしてくれたバンドだよね。すごい良かったよ」って。マジで失神しそうになったよ」

■あの頃はバンドだけで生活していたんですか?

「当時はメンバーの誰も働いていなかったよ。メインの理由は怠け者だったから。新しく仕事を始める人には国からの補助金制度があるんだ、そしてそれはバンドも含まれているんだ。だから、それでしばらくの間は乗り切れた。けれど、毎日ベッドでダラダラしているような長髪の奴らに支給していたことに、政府が気付くまでの間だったけどね(笑)」

■デックが脱退し、新しいドラマーが加入しました。それからあまり長い期間たたずに解散してしまいましたよね。日本でMID WAY STILLを見たいと思っていたので解散は残念だったです。解散の理由を聞かせてください。

「1993年、デックに息子が産まれて彼は良い父親になることを選んだ。祝福すべきことだけど当時のバンドの状況を考えるとショックだったね(笑)。でも、バンドは続けようと決めた。2日間で20人くらいのドラマーと試したんだけど思ったようにいかなかった。そこにブラッドっていう、見た目は変だったけどドラムはメチャクチャ上手いやつがようやく現れた。だから何も考えずに彼を迎え入れた。ブラッドは加入してからすぐに8分間のハードコア/ジャズに夢中になり始め、3分間のポップ・パンクを変な拍子で叩くようになり始めたんだ。俺達が全く求めていなかった方向へ導こうとしていたんだよ。それに彼は俺達の昔の曲をやりたがらなかったから、バンドとして全く機能しなくなっていった。そんな状況に加えてOASISのようなバンドが注目される時代に変わっていってシーンも変わってしまった。デックは良い時期で脱退したんじゃないかなって





今は思うよ。アルバム2枚とも日本盤がリリースされているのに日本に行けなかったのは残念だったよ。でも気にするな!ついに行けるんだから。17年も経ったけどね」

■MIDWAY STILL解散後は何をしていたんですか?

「俺は曲を書き続けていたよ。SENSELESS THINGSのマークとバンドを結成したっていう変な噂が流れたこともあったけど、それは嘘。家で一人でレコーディングして違う名前でデモを送ったりしていた。反応なんてないと思っていたんだけど、すぐに連絡をくれたやつがいて新しいバンドにも興味を持ってくれた。それでそこと契約してGROUCHというバンドを始めたんだ。GROUCHはMIDWAY STILLを少しロック寄りにしてシンセを入れた感じだったよ。ミニ・アルバムと数枚のシングルをリリースしたけど全く受け入れられずに解散。その後、俺はSNUFFに加入したり色々なバンドに加入したりしていたんだけどバンドはもういいかなと思い始めていたんだ。でもそれは間違いだった。デックはみんな知っていると思うけどSOUTHPORTでもドラムを叩いている」

■で、結局はMIDWAY STILLに君は戻りましたね。再結成にはどんな経緯があったのですか?そこのところを教えてください。

「97年から2005年までの間はたまに友達に頼まれたりしてMIDWAY STILLはロンドンでライヴをやっていたんだ。その時はラッセルがベースでね。彼は新しく加入したメンバーだけどもう11年になるんだ。最近自宅に小さいスタジオを作ったからタダでレコーディング出来るようになった。俺達はずっと仲がいいし、頻繁に会っているから曲もあったしレコーディングをしてみようってことになって完成したのが17年ぶりのニュー・アルバム「NOTE TO SELF」なんだよ。だから再結成の理由は、まだ俺達はやれるし、やりたいからだ。テクノロジーが今のようじゃなくて、バンドがレコーディングの為にスタジオを借りなければいけなかったら録音はしていなかったかもしれないな。だって、誰もアルバム制作のために援助をしてくれたとは思えないし。幸いにタダでレコーディング出来る環境があって、幾人かの前で演奏出来て、俺達はまだOKなバンドだろって見せられるんだから。BOSS TUNEAGEがこの作品をリリースしてくれてホントに感謝しているよ」

■ニュー・アルバム、メチャクチャいいです。個人的にはベスト音源です。自分たちではどう思ってますか?収録曲は再結成を決めてから作ったんじゃないんですよね?

「「NOTE TO SELF」はこれまでのどの作品よりもいいアルバムだと思っている。その時その時にアルバムごとに思い入れはあるけどね。まず、音質がいい。次に、俺たち全員演奏が上手くなっている。最後に曲がメチャクチャいい!この3つが揃っていればいいアルバムだよ。過去の作品は演奏が良く

イギリスの音楽シーンで注目されるのは年齢と見た目だからね 残念ながら俺達は年齢を足したら 117歳になっちゃう(笑)



なかったり、音質が悪いか、曲が弱かったりしていた気がする。ニュー・アルバムの曲は結構昔に作った曲から去年作った曲まであるよ。一番古い曲は12年前の曲だしね。俺たち全員新しいアルバムには喜んでいるよ。俺達のメロウな感じの曲が好きな人に向けて、日本ツアー用の音源を6曲入りで予定している。「LIFE'S TOO LONG」の頃のような感じになるんじゃないかな」

■ニュー・アルバムはBOSS TUNEAGEからのリリースですけど、DOMINOのローレンスにコンタクトは取ったんですか?

「始めはローレンスに出来上がった音源を送ろうかと思ったけれども、結局はやめたんだ。デックはメールしたかもしれないけど返信はなかったらしい。でもDOMINOは最上級の若いバンドのレーベルだし、全く進歩のない年老いたバンドになんか興味を持つわけがないと思うしね。誰もがわかってることだけどイギリスの音楽シーンで注目されるのは年齢と見た目だからね。他の国では気にしないのかもしれないけど、この国では25歳以上の奴らは終わったと思われるんだよね。だって残念ながら俺達は年齢を足したら117歳になっちゃう(笑)。BOSS TUNEAGEは俺達にとっても最適なレーベルだと思う。ASTONのことは知らなかったとしてもリリースしているバンドや、リリースし続けている作品を見てもね。もちろん彼のことは知っていて、デックがSOUTHPORTを通して良く知っていたからさ。ASTONがアルバムを気に入ってくれてリリースしてくれて良かったな」

■会えるのが待ち遠しいです。日本に来るなんて信じられないです。今回どうしてDIYツアーでも日本でツアーをやりたいと思ったのですか?

「メンバー全員別のバンドでは日本に行ったことがあるんだ。俺はSNUFFで、デックはSOUTHPORT、ラッセルはMINUTEMANでね。素晴らしい場所だったってのがみんなの共通意識でさ。それに実は1992年に日本でのツアーの話があったんだけど、実現しなかったんだ。それに日本でまだ俺達の音楽に興味を持っていてくれる人がいることも知った。だから日本に行くことを決めたんだ。カズが5本のライヴを頑張って決めてくれたんだから、今回のツアーで俺達は大赤字でも、行けることを純粋に喜んでいるんだ。本当に待ち遠しいんだよ。俺達を覚えてくれていた人たちのおかげで京都や名古屋でもライヴが出来るんだから。正直にいうと君たちはラッキーだよ。俺達はバンドとして当時よりもいいバンドになっているからね!」

■日本に来る直前の今の心境は?楽しみにしていることって何ですか?

「全てだよ!変わっているけど素晴らしい食べ物!日本で出会った人達はみんないい人達だったし!Saki-Bomb(注:ビールの日本酒割りのことの様だ)!ギター・ショップも楽しみだし、何でも売ってる自動販売機も、夜の街のネオンも!街灯の下で演奏している光景も!初めて日本に行ったときに大好きになってしまったんだ。メンバー全員興奮しているよ」

■多くの人が楽しみにしていると思います。最後に日本のみんなへのメッセージを。

「日本のみんなの前でライヴが出来ることを楽しみにしているよ。ライヴに来て声をかけてね。それだけで、年老いた3人は幸せだよ。Saki-Bombをおごって。バンザイ!」

ツアー詳細

11月19日(金)高田馬場音楽館スタジオ
Open 19:00
w/AGAINST THE GRAIN, FILTHY HATE, EXISTENCE WITHOUT CAUSE

11月20日(土)京都Nano Open 未定
w/THE LIONS, MIDDLE, BEER WULF, AIWANA, KIRIE

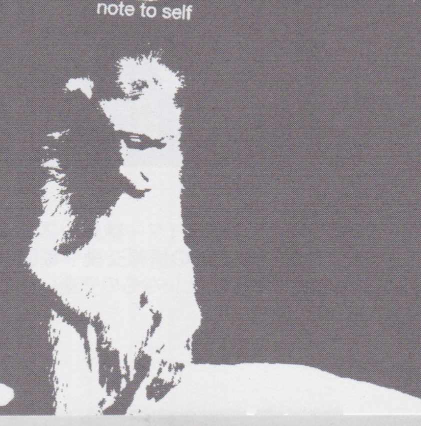
11月21日(日)名古屋平針Memory Pops
Open18:00
w/Navel, THE LIONS, and more

11月22日(月)西荻窪Flat Open 18:30
w/ZERO FAST, the urchin, SHIPYARDS

11月23日(火)新宿Nine Spice Open 18:00
w/COME BACK MY DAUGHTERS, male goat

Total Info:
info@watersliderecords.com





MIDWAY STILL

note to self

MOBSPROOF

PUNK MAGAZINE FOR DESTRUCTION モブスプルーフ

非・密着24時!!

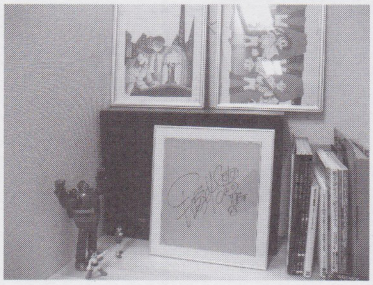
皆さんご存知!フルカラー・パンク・マガジンMOBSPROOF!!最新号/VOL.6のファンジン特集にてEL ZINEも登場させて頂いたのですが、その編集・発行人である松原さんの一日とは一体どんなものなのか?!ご本人にレポートをお願いしてみました!PRINT PUNK MEDIA IS NOT DEAD!!



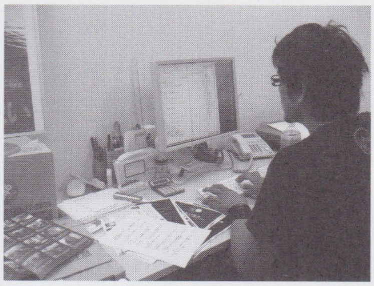
9:20
駅前にある実物大鉄人28号を横目に出社。編集部は下町情緒溢れる町の某所にある集合オフィスの1部屋(約4畳半!)にあります。



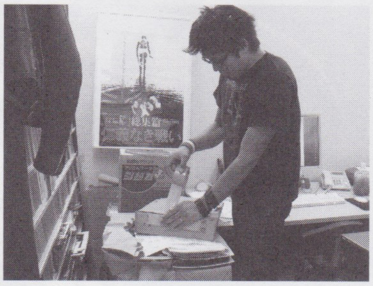
9:30
全くパンクには似つかわしくない場所。実は神戸市の施設に嘘八百で潜り込んでいるのです。リアル・ロックンロール・スウィンドル!



9:40
手塚治虫原理主義者にとっての神棚(?)、中学生の頃にお会いして書いて頂いた手塚治虫先生のサイン&複製原画に一礼。毎朝の儀式です。



9:50
パソコンを立ち上げ、読者のみなさんからの投稿への返事や仕事のアイデアや資料などをチェックします。毎日だいたい1時間半ぐらいで切り上げます。



11:30
追加注文のあったMOBSPROOFの梱包作業。事務所が狭いのと在庫の山が凄いので結構大変です(泣)。



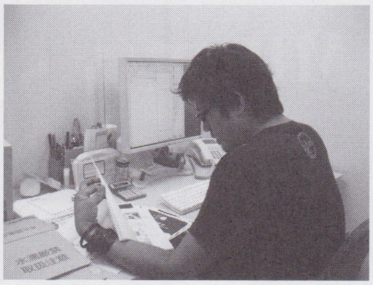
12:00
お昼休憩。長田は安くて美味しい店が多いので助かります。今日は週3ぐらいで通っている明日香。味、量共に文句なしなのです!!



13:00
親友の探偵事務所へ。尾行などで使う最新の秘密道具がズラリと並んでいました。他にも面白い道具があったのですが企業秘密で撮影不可!



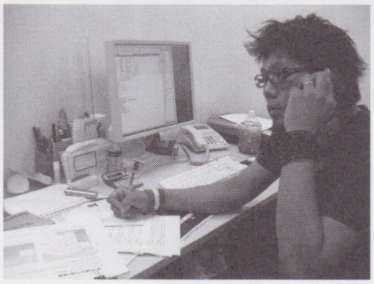
14:30
色々と面白い話を聞いたり情報交換をしたりして時間もあっという間に過ぎて行きます。仕事柄、友人の顔と見ている資料はモザイク処理をしています。



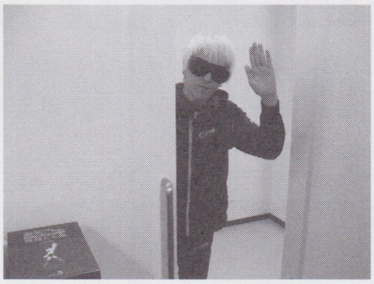
14:40
本業の1つであるライター稼業のネタ出し。さっきの友達との情報交換や毎日のネタ探しも趣味みたいなもので楽しみながらやっています。



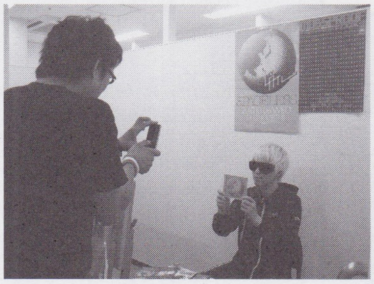
15:10
残念ながら集合オフィスのため音楽はヘッドフォン。パンク、ハードコア・パンク、アイドル、特撮ソングなどランダムに楽しんでいます。



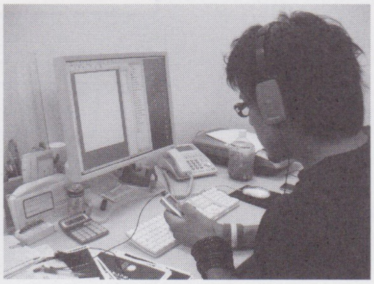
15:15
タワーレコードのクニヒロックとコラボ・ムックの打合せ。パンクス視点で日本のロックの過去と未来を繋ぐレヴュー本になる予定。



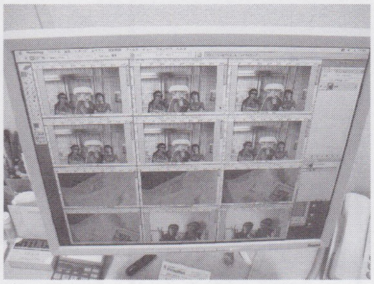
16:00
偶然、同じフロアにある会社でバイトをしているルーシー(LUCY & THE LIPSTIX)が(宇宙から?)遊びに来ました。



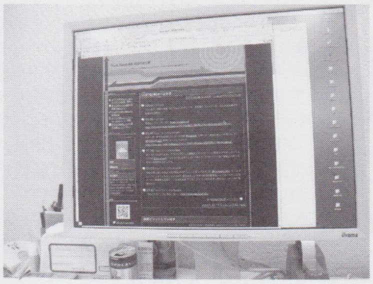
16:05
新しく開始する『MOBSPROOF ON JET USTREAM』のテスト放送用の撮影。この本が出る頃には本格的にUSTREAMで放送を開始している予定です。



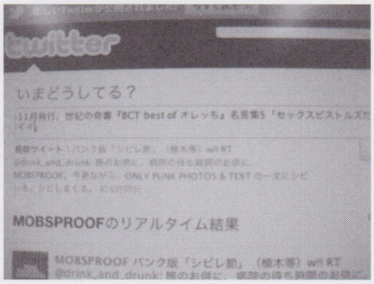
16:30
現在制作中の『BCT best of オレッち』の作業開始。先日収録したインタヴューのテープ起こし。実はこの作業が一番大変なのです。



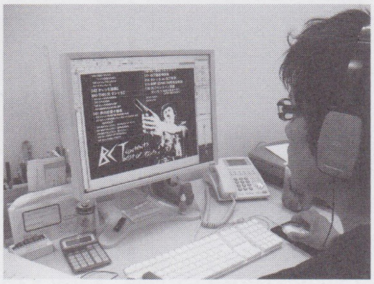
17:30
気分転換にインタヴュー時に撮影した写真のセレクト作業。ピンがどこにきているのか、表情はどうかなどを注意深く選んでいきます。



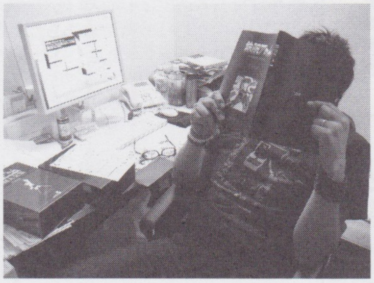
18:30
ブログの更新。その他、ツイッターへの書き込みやメールの返信などまとめて行います。脳で考えた事がそのまま画面に出れば楽なのに…。



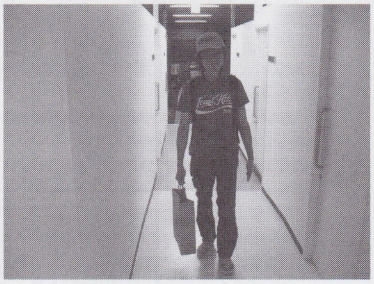
18:50
『BCT best of オレッち』リリースを盛り上げるため「オレッち語録」を毎日1作、ツイッターにアップ中!名言ばっかりなのでサクサク更新出来ます。



19:00
インタヴューのテープ起こしの続きはまた明日。デザイン作業に移ります。『BCT best of オレッち』はモノクロなので逆に悩みます。



20:25
打合せ用の資料をプリントアウト。その間は好きな本を読んで暇つぶしです。『鉄腕アトム復刻大全集』は良い仕事してますね〜。



21:35
打合せのため、オレッち来訪。仕事場が終わってからの連日執筆作業で、かなりお疲れモード。ご苦労様で〜す!

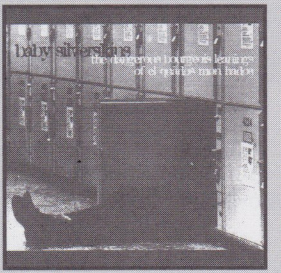


22:30
打合せ終了。戸締まり、消灯など各チェックをして帰路につきます。読者の皆様、編集部の1日にお付き合い頂きありがとうございます!

WORLD MELODIC POP PUNK TRAVELLING Vol.10 unknown UK

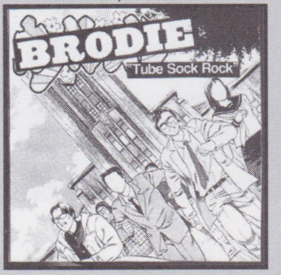
TEXT:
Yuki SP(Y)/WSオニギリ(O)

BABY SILVER SKINS/Split With. BIG PILE



SNUFFY SMILEからのVA"THE BEST PUNK ROCK IN ENGLAND, MAN"に収録され、一際異臭を解き放っていたBSSの唯一の音源。ブリンブリンに掻き鳴らされるベースにやたら速いドラム。そして漆黒の闇の中でネバネバ動く得体の知れない何かに出会うくらいの怪しげな雰囲気が終始漂うメロディー。USのDRIVER ELEVENのような異端児ッぷりをこれでもかと発揮してくれております。pre.DOGPISSらしいですが、特にコメントはありません(笑)。(Y)
(REFUSNIK/FUSE003)7"EP 1994年

BRODIE/TUBE SOCK ROCK



今じゃ珍しくなくなったけどリリース当時のイギリスでは珍しかった3コード・ラモーン・ポップ・パンク・バンド。それまではUKメロディックを中心としてたからこのバンドをリリースしたMOTHER STOATに驚いた。しかもジャケが懐かしい。QUEERS直系のシンプルなポップ・パンクでかっこいいけどオリジナリティーは皆無。でもここまで完全USバンドと変わらない音をやっていたということで評価したい。タイトルは当時の日本の女子高生が愛用していたルーズソックスのこと。(O)
(MOTHER STOAT/STOAT028)7" 2000年

CLINGFILM/Split With. SCUTTLE



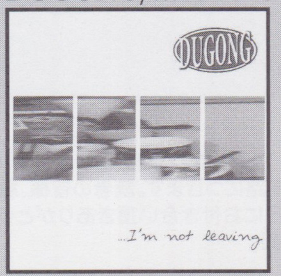
手に入れてからずっと聴いていなくて聴いてみたら驚いた一枚。CLINGFILMオンリーで満足。ほぼ合唱系。そして泣きメロで、WALKERやDIG DUGを感じさせてくれる疾走感溢れるミッドテンポな曲。単弦弾きと高音コードなギターがさらに哀愁と青さを煽ってくれてます。そんで2曲目はFAST+SHORTな曲。でもサビは合唱、そして完璧な弱虫メロ！もーうたまりませーん。持ってたのに今までノーマークだった。スコスコな感じもいいじゃないか。おかわりくださーい。(O)
(NEVEREADY/NVR0105)7" リリース年不明

DONFISHER/SETTING NEW STANDARDS IN APATHY



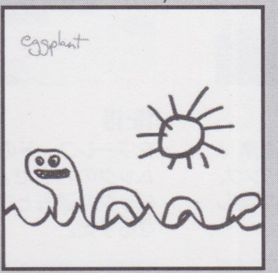
GANのANDYとDAVE、CHOPPERのCHRISにより結成された、まさにUKメロディック・オールスターズの唯一の音源。そのメンバーでフランキー・スタブス・プロデュースときたもんです。間違いありません。元気な時に聴いてもうなだれてしまいそうな底無しに物悲しい哀愁メロディー。UKメロディック界きってのギター職人ANDYの掻き鳴らすギターが涙腺刺激作用を3倍増しにしてくれます。まさにこれぞ歴史的大名盤。(Y)
(CRACKLE!/CAT012)7"EP 1996年

DUGONG/...I'M NOT LEAVING



リリース当時「CHOPPERの再来だ！」と話題になったDUGONGのデビュー作。流れるような疾走感、お父さんの背中のようなものではなく、若さゆえの甘酸っぱく切ない哀愁。こういうサウンドにほんとに弱いです。泣いてもいいんだよ…と肩をポンと叩かれたら今すぐ泣ける自信あり。これ以降のリリースもパワーダウン感は否めませんが、なかなか良いです。(Y)
(BOMBED OUT/BOMB002)7"EP 1999年

EGGPLANT/HUDS 'N' KISSES



WAT TYLERでの名曲と言えばこのバンドのヴォーカルJULIEが歌ってる曲なんだけど、彼女をメインにしたWAT TYLERの変名バンド。完全にギター・ポップ・ファンが当時注目していただけなんだけど、ポップ・パンク・ファンも必死に集めてもいいバンドだと思う。どの作品も大好きだけど今の気分でこれを選んだだけ。女の子ヴォーカルの強みを最大限に活かしたメルティー・ポップ・チューンに腰砕けです。音楽バカSEAN TYLERの女子サウンド大好きを一番如実に表していると思う。(O)
(CANDY FLOSS/CF-016)7" 1997年

ELMERHASSEL/BILLYOUS...



SPACE MAGGOTSのメンバーであったミスター地味UKメロディッ子CLIVEがヴォーカルを務めるUKメロディック史上ベスト地味バンドの1stアルバム。ボーナスで1993年にリリースされていた「ALMOST AT ONE」EP(名盤)の2曲と、1994年にVINYL JAPANからリリースされた6曲入りミニ・アルバム「HONOUR YOUR PARTNERS」LP(名盤)を収録した全20曲入り。一度でも引き込まれるともう戻れなくなってしまう中毒性の高い地味具合はまさに天然記念物。地味だからこそ、根底にある熱い(サッカーへの)思いが伝わってきます。(Y)
(DIRTER PROMOTIONS/DPROMCD18)CD 1994年

LOVEJUNK/TRIBULATIONS



ex.PERFECT DAZE、SPACE MAGGOTSのメンバーによる世界でも例を見ないマイペース・バンドの1stアルバム。これ以降にアルバムもリリースされましたが、それでもこのアルバムが未だに目下最新録音作という摩訶不思議。窓全開どころかドア全開で高速道路を走っているような疾走感と悩ましげなイケメン・ヴォーカルの相性はお見事。早く新作をリリースして欲しいものですが、期待するだけ無駄だと思いますので、のんびり待ちましょう。(Y)
(CRACKLE!/CRACKLE012)CD 2001年

MEGA CITY FOUR/MILES APART



気持ちいいほどの自己主張の強いジャケット、全てはここから始まった。MEGASの名作デビュー・シングル。3rdプレスまであって、オリジナルはPRIMITIVE盤、2ndプレスはジャケット裏面のPRIMITIVEの名前があったところにDECOYのシールを貼り付けたもの、3rdプレスはちゃんとDECOYのプリントがなされたものです。要するに、このシングルを見つけたらまずは裏面を見ましょう、ということです。(Y)
(PRIMITIVE/PRIME 009)7"EP 1988年

PINTO/Split With. GAMEFACE



当時飛ぶ鳥を落とす勢いだったGAMEFACEのUKツアーをサポートしたものの知名度は上がらずあっさり解散してしまったPINTOに憤慨したのは自分だけじゃないはず。だって当時世界中エモ・バンドばかりになっていた状況の中でこのバンドに期待していた人多かったんじゃないかな。曲の構成はSAMIAMなんだけどやっぱりUKメロディックと納得のメロディー。この時期のイギリス病はみんなすぐに解散しちゃうことだった。エモの伸び率ホント凄かったからな。(O)
(SPEEDOWAX/ATOM008)7" 1998年

前号で宣言した通り今回はいつもよりもさらに自分勝手にセレクションした完全に世間から無視されまくっているイギリスのバンド達を特集しました。そして、いつもよりも若干探すのが大変な作品が多いです。が、レア盤というより無名すぎる為にリリース当時日本に輸入されていなかったりするためです。いくつかの音源は簡単に中古で入手出来ると思いますし、マジかよと思うほどの安値だったりしますので気になった方は探してみてください。しかしこのコーナーを担当させてもらってすでに10回目になるけど、読んでいますと言われたことないです。山路さん大丈夫ですか？？？(笑)

PSEUDO HIPPIES/SELF TITLED



後にWACTと変名することになるバンドなんだけど、この頃の彼等のサウンドはWACTで聴かせてくれる泣き虫ポップ・パンクではなくて元気一杯のアホなポップ・パンク。IDENTITY、SKIMMER、初期HARD-ONS、イタリアのGASが好きな人だったらマジ発狂の弾けるティーンエイジ鼻くそポップ・パンク。リリースは本作とスプリット1枚のみ。しかもドイツのレーベルから。全曲大好き。でもラストの曲の終わりに喘ぎ声が入ってるんで家で聴く時には周りに配慮を(笑)。神盤。(O)
(NASTY VINYL)7" 1992年

SPACE MAGGOTS/LEAVE IT!



pre.LOVEJUNK、ELMERHASSEL！…といって興奮するのは極々一部の人。Ipswichの5人組の唯一のリリース6曲入りMLP。うおおおっ！と拳を突き上げる盛り上がりもなく、部屋の片隅で体育座りをしたくなるような哀愁もなく、ただただのんびりと爽やかに演奏をする彼らのアティテュード。回りくどい言い方をしましたが、一言で言うと地味です。無人島に持っていく5枚のレコードには確実に入らないけど、無人島に流れ着いたゴミの中に埋もれていてゲット、みたいな1枚。大好き！(Y)
(VINYL SOLUTION/SOL6)12"LP 1987年

REVERSE/STEM THE SLIDE



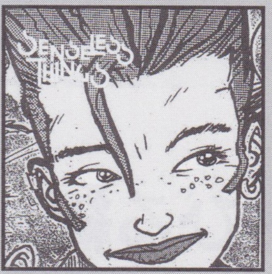
SNUFF、EXIT CONDITIONの良いとこどりをした第一次UKメロディック創世記の最後の名バンドのデビュー・シングル。この7"を初めて聴いた時にDAMAGED GOODSのカタログ番号DAMGOODがホントにDAMGOOD(最高にいい)ってわかったよ。恐らくじいさんになっても聴き続けるだろうとその時に思った。今でもいつ聴いても最高だと思えるメロディック・バンド。全曲収録した音源が出ているので聴いてもらいたい。俺はこのバンドの音源を聴く時は正座。そして泣く。全ての楽曲が腹が立つほど名曲。(O)
(DAMAGED GOOD/DAMGOOD76)7" 1995年

STRAIN/CARRIED



ジャケ見たら絶対買わないでしょ？うん買わない。って感じのだっさいジャケなんだけど、針を落とすとあら不思議、バーストするギターに涙ちょちょぎれる哀愁のメロディーでこれぞUKメロディックって感じなんだから、手に入れた自分を褒めてあげたくなります。 初期CHINA DRUMと同列のかっこよさ。BILLY IDOLのコスプレのやつに比べて純朴そうなおでぶちゃんに、思いっきり普通の兄ちゃん。このメンバー3人がどんな会話してたのか恐ろしく気になる。(O)
(SPRINGBOARD/STR7001)7" リリース年不明

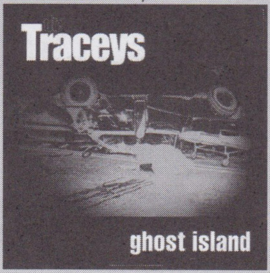
SENSELESS THINGS/TOO MUCH KISSING



MEGA CITY FOURと並ぶUKメロディック界の巨星。彼らの初期音源は全て必聴ですが、その中でもやっぱりこれ。TRAVIS CUTがカヴァーしたことで知られるタイトル曲はしっとり心に染みる名曲。イカ天に出演した時もこの曲だったそうです。後にメジャーのEPICから再発されましたが、オリジナルはWAY COOL盤。ジャケットもグッド。(Y)

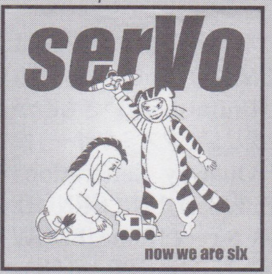
(WAY COOL/WC003)7"EP 1989年

TRACEYS/GHOST ISLAND



MOD、POWER POPのキラキラした部分を詰め込んだにもかかわらず未だに評価されていない愛すべき奴ら。MEGA CITY FOUR好きな人にも気に入られそうなサウンドなのに全く世の中に愛されなかったバンド。だから中古で見つけるたびに救ってあげたい衝動にかられ現在所持数は4枚。まあ、でも恐らく本人たちはパンクってスタンスじゃなくてメジャーに行きたかったような感じが多いに感じられる。でも行けなかったから許す(笑)。今じゃバンドやってないだろう。(O)
(INTEGRITY/INT001)7" 1996年

SERVO/NOW WE ARE SIX



2001年の来日ツアーではヴォーカルのキャロラインちゃんの美貌とプロポーションのことしか記憶に無い方も多いのでは。一般的にはアルバムが名作とされていますが、その後にリリースされたこの2ndシングルも素晴らしいです。ex.GANのギター職人ANDYの素晴らしいギターに哀愁を積載量ギリギリまで詰め込み、キャロラインちゃんのワザとらしさのないキュートでどこか物悲しいヴォーカルがさらに哀愁を引き立てます。日々に疲れたOL(オフィスレディー)の方々にぜひ聴いて欲しい1枚(EL ZINE購読者の7割がOLさんだと認識しております)。(Y)
(CRACKLE!/VYM029)7"EP 2000年

TRAVIS CUT/SEVENTH INNING STRETCH



SKIMMERと共に来日したツアーも素晴らしかった3人組の名作2nd。CHRISのハイトーン・ヴォーカルとDAVEの重みのあるヴォーカル。疾走感とキャッチーなメロディー。やってることは単純なのにセンスがあればそれだけでこのレベルまで持っていけるんですね。全13曲、疑うことなき大名曲。CD盤はジャケ違いでKARMAから出ています。(Y)

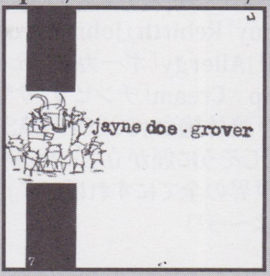
(SUSPECT DVICE/SDR008)12"LP 1998年

SHUTDOWN/SELF TITLED

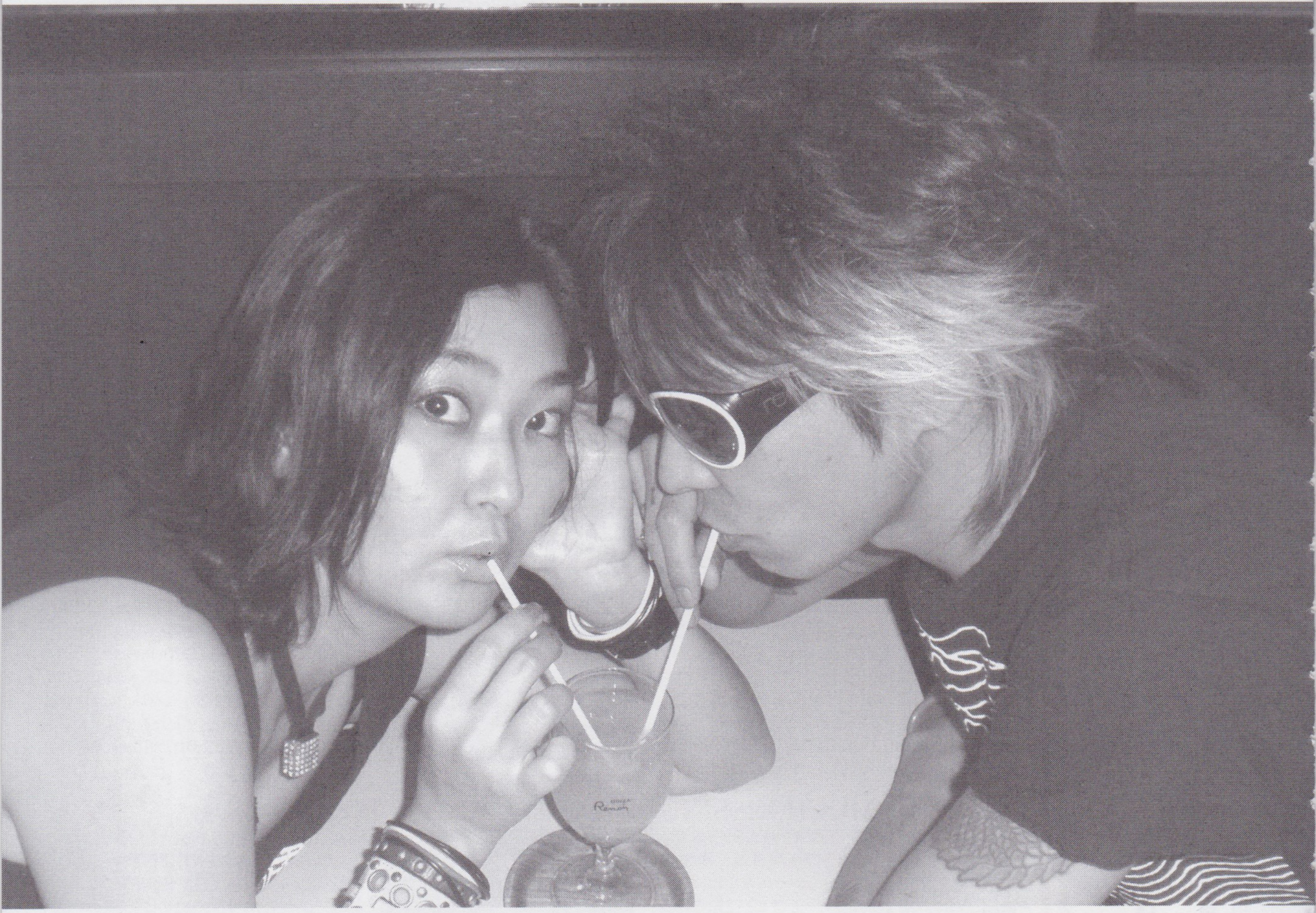


元々はハードコア・バンドとしてスタートした彼等だけどエモーショナルなメロディック・サウンドにチェンジをしてからが半端なくかっこいいバンド。とにかく出だしからゾクッとするくらいの緊張感がある。そしておしっこ漏らしそうなくらいの感じの哀愁の歌唱法が絶妙なんだ。このサッドっぷりはUSのBUFORDに匹敵すると思う。95年にリリースされたSMOG UKとのスプリットも最高だ。ってかエモよりもエモい。EXIT CONDITION好きな人は好きでしょう。(O)
(POTENTIAL ASHTRAY)7" 1993年

Split/JAYNE DOE/GROVER



歌詞を見ながらじゃないとどっちのバンドかということがわからないスプリット音源。ニューキャッスルのJ.D.はUSのローカル・バンドを思わせる若さ溢れる衝動が詰まったメロディック・パンクですさまじくかっこいい。後に日本ツアーも行うLEIF ERICSSONのメンバーが在籍。一方のマンチェスターのGROVERはストリート・パンク・ファンにも受け入れられるだろう合唱系にオーオー・コーラスのポップ・パンクで素晴らしくかっこいい。頑張って探して欲しい名盤。(O)
(HERMIT/HRT-001)7" リリース年不明



サカタルイードの 『とびっきり対談・馬鹿は勝手に滅びる編』

ヘイ!全国の健康優良不良少年っ(AKIRA)!おゲンコツ?あと少しの辛抱だぜ。もうすぐ冬だぜ〜ィ!コートの襟を立て両手はポケットの中、くわえタバコに肩をすぼめりゃ、それが『ROCK』だ間違いないっ!ダウンジャケットの内ポケにホッカイロ忍ばせてんじゃないよ(笑)!

今回の対談には山路さんも同行する模様…あえて何も考えない方向で行くぜ(?)中野駅北口を目指すボクのiPodはシャッフルにてこんなカンジ…BARBEE - BOYS「女ぎつねONTHERUN」GASTUNK「GERONIMO」Jiaen「YA - OOUTO「Risky Risky」Perfume「23：30」安室奈美恵「FAST - CAR」Video - Stalin「Korea」X「Unfinished」いきものがかり「プラネタリウム」木村カエラ「Humpty Dumpty」SOFTBALLET「ESCAPE」Samurai「インテリジェンスミキサー」松田聖子「わがままな片思い」Pink Floyd「Eclipse」mihimaru GT「恋する気持ち」本田美奈子「Oneway Generation」LUNA - SEA「MOON」RED - WARRIORS「Wine＆Rose」Steady＆Co.「Hip Drop」Dildos「P. T. S. D」UNICORN「HELLO」午前四時「ト・ビ・ラ」Avril - Lavigne「Freak Out」Bandit「Insidal Fight」小泉今日子「My Sweet Home」BOOWY「FUNNY - BOY」徳永英明「シルエット・ロマンス」Dragon - Ash「El Alma」Joy「瞬間は寸前」Nukey - Pikes「(K)」コブクロ「Million Films」マキシマムザホルモン「ルイジアナ・ボブ」BUCK - TICK「MOTEL 13」Britney - Spears「Stronger」うただひかる「SAKURAドロップス」スチャダラパー「DISCOSYSTEM」東方神起「Purple Line」Bastard「Truth」大塚愛「恋愛写真」Public - Enemy「Rebirth」John - Frusciante「Omission」中島美嘉「雪の華」Blankey Jet City「SWEET - DAYS」INU「ダムダム弾」Allergy「ポーカーフェイスシティ」cracks「Sodom」GAUZE「みっともない」HALUCALI「ギリギリ・サーフライダー」Lip Cream「チンピラ」サザンオールスターズ「ミス・ブランニュー・ディ」スガシカオ「19才」倖田來未「TABOO」東京事変「絶体絶命」COLOR「CASTLE」hide「DICE」Madonna「Papa Dont Preach」綾香「三日月」…まるで小林幸子でも登場しそうに煙が立ちこめる喫煙所には髪をブリーチした編集長が(笑)。「ひとつ残らずキミを悲しませないものを、キミの世界の全てにすればイイ」(大沢誉志幸)
それでは行って…いや、イッてみよ〜っ!!

SR「オレら田舎だから、イライザに関してはそれこそ『DOLL』くらいしか情報無くて、CD持ってるヒト以外はね。だから今日これといって『質問』みたいの考えてなくて(笑)。ただ『イライザのコト教えて』って」

E「『アイドル・インタヴュー』?アハハ(笑)。アタシってヒトから、何か『オラオラ』の?『イケイケ姉ちゃん』だと思われがちなんだけど…」

SR「思ってます(笑)」

E「普段は腰低いですよ。なんだろうな〜、ケンカとかしませんよ」

SR「オレとしては、何だあの『企画者にカチ込み入れたハナシ』(笑)!」

E「(笑)!アレはもぅ、絶対に『折れちゃいけないトコ』じゃないですか?!パンクとかハードコアの世界ってそういう『駄目なヒト』ってよく居るじゃないですか。ワタシ自分が関わったコト投げられんのとかホントに許せないんですよ。で、周りの連中、企画に呼ばれてるバンドとかが『あ〜、あのヒトは精神的に不安定だから…』とかぁ?『精神的に不安定』なんてみんなそうじゃないですか?『甘えんな!』とか思ってね〜」

SR「ま、その『カチ込んだ』ってのも『オレら的』なスタイルなんだけども、オレはその後の『対バンするヒトは自分と同じテンションじゃなきゃイヤなの』って部分にグッときて」

E「そ〜なんですよ〜」

SR「で、仲間に…ヒデノリ(PUNK AND DISORDERLY)なんかに『感動したぜ!イライザのメアド調べろっ!』なんつってさ(笑)」

E「なるほど(笑)。ハードコアのお兄さん方って、例えば若い子に『タバコ買って来い』って頼んで、自分が吸ってる銘柄と違うの買ってこられただけで殴ったりするヒトとか、そういうノリってあるじゃないですか?それとは違うんですよ。ワタシ…それを伝えたい、『優しいんですよ』って(笑)」

SR「(笑)。あのね…今回『対談相手』て、別にイライザじゃなくてもイイわけじゃん?ん〜、…周りくどくなるけど例えば『E. T』とか流行ったトキに観ない子供で、オレ。『流行ってるから良い』って感じちゃうのがイヤで」

E「あぁ、今なら『アバター』観ないヒトだ?分かる分かる(笑)」

SR「ブームがとりあえず収まって、他の映画と同じ『１本』って感じられるようになったらチャレンジするんだ。冷静に判断したい、っていうか」

E「うんうん」

SR「でね、最近『飯島愛』の『プラトニックセックス』を読んだの。そしたら…何か親とかとも上手くいってなくて、十代の頃から家出して、Ｔバック穿いてTVに出てるのを家族が見つけて連絡してきて。んで実家にカオ出して少しわかり合えて、昔はキライだった親父に冗談言いながらビールを注いであげる、トコロで終わりなの」

E「へ〜、読みたいなぁ」

SR「レッチリのアンソニーの自伝なんかもそうだけど『自伝を書く』ってコトは精神的に今『フラット』か、それ以上に『前向き』じゃないと出来ないじゃん?」

E「うん、そだね」

SR「だけどオレは、その何年後かに飯島愛が『孤独な死』を迎える現実を通過した上で『読んでる』から…パタッと本を閉じて、寝て、朝がきたら『音楽の神様』みたいなのがさ、『次(対談)はイライザとやりなさい』って言うもんだから(笑)。お互い同じ時代を生きてるんだからやっとくべきだな、と思って…今に至ります」

E「うんうん、なるほど〜。『飯島愛』個人はワタシ、全然好きとかキライとか何もナイんですけど、あのヒトのやったコトは確かに『スゴい』じゃないですか?AVあがりで出てきて、例えば『及川奈央ちゃん』とか『みひろちゃん』とか?普通のメディアに出てる娘もいるけど、あそこまでのレベルの『メディア露出』って無いじゃないですか。それを切り開いたのはスゴい」

SR「世の中いろんな人間が居てさ、プロデュース向きのタイプだったり、お笑い芸人やってるけどホントは漫画家が合ってそうなヒトだったり(笑)。でも多分オレとイライザは、ある程度『自分を売り物にしている』という点で共通していると思うんだ。だから『興味』があった。興味が無いヒトとは『対談』なんて出来ないし…」

E「ワタシも〜」

SR「でしょ?シラッとしちゃう」

E「『お仕事』とかになって『インタヴュアー』になったとしてもワタシ出来ないから、結局『お仕事が出来ない人間』なの(笑)。ウレシイな〜呼んでいただいて。何かねぇ、いままで過去のモノとか読まさせていただくと、やっぱり『EL ZINE』自体が『オトコの子っぽい雑誌』じゃないですか。『ジャパコア』と『アンダーグラウンドなハードコア』とかで、やっぱり１個のコトを掘り下げてハードコアなのは、ホント商業誌に対する『アンチ』みたいな作りがスゴい好きなのね。なんだけど、でも『シーン全体』で見たトキに女は少ないし、女が居ても結局は、同性のコト悪く言いたく無いけど『腰掛け』が多いじゃないですか。ワタシから見たら、恋人や結婚相手を『探しに』ライヴハウスに来てる娘たち。それがね〜ワタシ『キライ』だと言うか」

SR「うん、オレこないだ冗談めいたメールで『口先だけのポリティカル』なんて送ったでしょ?オレあの歌(エコダムド『気をつけろ』)が気に入ってて(笑)。なんかさ〜思ってるコトも、みんな『思ってる』んだけどそれをカタチに出来なくて、それに対する言葉がまだ生まれてなかったり。『蛭子能収』の漫画でね、ギター担いで町を歩いてるバンドマンを周りの人間が『あっ、一発屋だ〜っ』なんてバカにするんだけど、その時そのバンドマンが言うの、『何言ってんですか?一発も当てられないヒト達が』って(笑)。それを読んだトキくらいスッキリしたんだ」

E「ハイハイハイ(笑)!ワタシの言いたい『フェミニズム』みたいなモノって…『オンナもしっかりしろ!』と言いたいんですよ。男性を批判する前に、オンナはもっと『自分の考え』で動けて生きていたら、絶対にイイ感じになるはずなんですよ」

SR「あんまり『カッコいいヒト』って…少ないかもね?ってコトはそういうコトなんだよね。オレはわりと『差別主義』っていうか、『オンナは黙ってろ』ってヒトだから…」

E「『家庭に入って』みたいな?」

SR「ん、ていうかバンドだなんだ言う前に『オンナに飛行機のハイジャック出来ないだろ?』みたいな。結局オトコが作ってる、って思ってる。…分だけオンナの子がカッコいいバンドやってると『メッタ打ち』にされちゃうんだけど、そういう感覚を求めて色んな『オンナの子バンド』観てるけど、あんまり居ないね〜、 多いのは『ただオンナの子がやってるだけのバンド』」

E「あ〜『腰掛け』ね〜(笑)。解るもん!見ててわかる。例え『パンク』だ『ハードコア』だ言っても、地に足ついて無いのは。だからむしろ逆に『腰掛け』じゃない『本物』もちゃんと分かるけどね」

SR「そっか(笑)」

E「ワタシ、昔っからこうだったワケじゃなく(笑)。十代の頃だったら『オシャレな彼』が居て、彼はランブレッタに乗ってて、その後ろに乗ってる…何だろう、ホント『お人形』みたいなモンだったんですよ。16〜7歳でライヴハウス行けば、ただ『若い』ってだけでチヤホヤされて、そんな『空っぽ』なままだとどうしようも無いですよ、ヒトは。結局『パンクだパンクだ』って自分を『確立』していくワケで…だからオンナが『お人形さん』のまんまじゃダメなんですよ。…まとまって無いですね(笑)」

SR「いやいやいや(笑)。イライザって『Ａ型』?」

E「ううん『Ｏ型』です。サカタさんは?」

SR「『Ｂ』だよ」

E「『女王』の世界ってＢ型が多いんですよ」

SR「そうなの?」

E「前に働いてたお店で、従業員８割りくらいＢ型ってトコロがあって」

SR「へ〜っ!…ちょっと前にオレ、病院通ってて。やたら『待ち時間』が長いトコロだったからさ、あの〜アレあったでしょ?『Ａ型の説明書』みたいな本(笑)」

E「あったあった」

SR「アレを『全血液型読んでやろう!』って思って。ベクターのメンバーのも調べがてら(笑)。そしたらＡ型のヒトって『上下関係』がず〜っと変わらないんだって。だからさ、イライザは『女王様』って仕事をやってるから、オレは詳しく分かんないけど、その…『奴隷』?のヒトに情が湧いちゃったりして途中で『関係性』が崩れちゃったら成り立たないじゃん?だからイライザを『変わらないＡ型』かな?って思ったの」

E「はぁ〜(笑)。『Ｏ型』なんですヨ。Ｏ型故の『ユルさ』ってのはありますよ。Ｏ型ばっかりだとユルくてスゴく楽しいんですよ、だけど誰も『仕切らない』の(笑)。Ｂ型『仕切る』でしょ?」

SR「うん、『仕切る』ね(笑)。でもさ、じゃあＯ型のヒトからしてみればＢ型がひとり居た方がイイ?」

E「どうだろうな、やっぱり『ヒトによる』。それこそさっき話した『ランブレッタの彼』はＢ型だったけど、仕切りたがるからワタシの格好、アタマからつま先まで全て『指示する』くらいで…だから自分の『アクセサリー』みたいな。そ〜いうのはもう、ありえないわ。他人にコントロールされる事は皆無になったわ、今は」

SR「あ〜。例えばインドは日本のＡ型くらい



にBが多いから、あ～いう『国』に成ってる、ってハナシを聞いたコトがあるよ。逆に日本は元々Aが多いから『こんなカンジ』にまとまってる、って」
E「あぁ、血液型ってやっぱり何かあるのかもね～」
SR「ちなみにドコ出身ですか?」
E「ワタシね、実家は『葛飾』なんですよ」
SR「おぉ!『東京っ子』?」
E「でもホント『きたねえ街』ってカンジで、東京の中でも『土地ごと』に色々あるよね、例えば『世田谷の娘はキレイ』とか。ウチの方は『ゲットー』でパチンコ屋とソープしか無いような街」
SR「へ～」
E「だからこんなんなっちゃうのよ(笑)!やさぐれちゃうのよ」
SR「(笑)!確か…何かで読んだけど『CRASS』好きなんだっけ?」
E「そ～なんですよ。ワタシ『CRASS始まり』で～、でもCRASSスゴく好きでいっぱい影響受けたけど、もっと『ナチュラル』でありたいんですよ。結局あの『スタイル』だと『行き詰まる』しか無くなっちゃうんですよ。突き詰めて行くと…うん、ワタシ何年か前に『肉食べない』とかってやってて、肉食べないでいるけれど『あ、このエンジニアブーツは革で出来てる』とか思うと『自分て何て半端なんだろう』ってどんどんどんどんバカみたいになっていっちゃって。やっぱり『楽しく』ありたいから」
SR「『ジレンマ』?悩むコトはあるよね」
E「『悩む』って時点で『無理』してるじゃないですか?CRASSみたいな姿勢でやっていくとそんなコトだらけだと思うんですよ。そうでなくて『自分目線』の考え、を世に伝えられたらイイな、と。ワタシね『レズビアン』でも『見た目』が大事なんですよ、キレイな娘しか愛せない。ゲイにしろバイにしろレズビアンにしろ、それらは『軽蔑』をされたり責められたりするような『世の中』ではダメ、というかみんなが『フラット』に生きられる世の中にすべきで、マイノリティ達も隠すんじゃなくて言っていったらイイんですよ。『開き直ったモノ』に糾弾するコトってしにくい様で、ワタシなんて誰にもとがめられたコト無いんですよ。だから意外と開き直っちゃえばラクなんですよ『世』に出ちゃえば」
SR「そっか～。音楽で『こうしたい』とか、ある?」
E「あっ、ワタシね『変わった』んですよ。今年入って入院して死にかけたりしたらね、前までは日本語で歌を歌ったのって『エコダムド』が初めてだったのね。だけど退院してきて『さぁ音楽をやるぞ!』となったトキに生まれて初めて『日本語で歌モノ』を更にきちんと『歌詞』を『意味』を自分の考えを『伝えられるモノ』をやりたいって思って。ここまで辿り着くのにバンド始めて10何年かかりましたよ(笑)」
SR「だけどあの、『れいぷフィーリング(VACUUM)』?は名曲だよね。聴いていくと『れいぷフィーリング』何回入ってんだ?ってなるけど(笑)」
E「アレはホント『企画モノ』だったんですよ～」
SR「『作品』を作るのは好きなの?」
E「好きですね。ワタシね、こないだデッカイ手術だったから『死ぬかも』しれないじゃないですか?ウチの親と彼氏に『遺書』書いたんですよ。その時思ったのがワタシからしたら『余命なんたらの花嫁』とか?死ぬのが分かってるのに結婚したりとか『自分の痕跡』を残したく無いんですよ。そんなモノにすがって何も出来なくなるくらいなら『ワタシが死んだらアンタはアンタで勝手に自分の人生を生きればイイ』みたいなコト書いたんですよ。そう、あるべきなんですよ、『残された人間』は自分の人生を全うするべきなんですよ。故人をダラダラと想い続けるような考え方は『違う』!とか思って。…熱いでしょ(笑)?」
SR「いや、うわ～っ!すんげぇオレと考え方『似てる』～っ(笑)!」
E「とか言って何にもしてないんですよ(笑)」
SR「『何にもしてない』コトは無いよ(笑)」
E「誰かを育てたりもしてないワケだし…」
SR「でも(シーンで)誰かに育てられた覚えも無いでしょ?」
E「無～い。勝手に『育っちゃった』(笑)。ワタシ、『PLASMATICS』とか好きなバンド沢山あるんだけど、みんなそれぞれ『他人』じゃないですか?だから誰かを『目指す』とかしたコトは無いのね。自分がやらなきゃ『自分』を」
SR「うんうん」
E「結局、CRASSにはスゴい影響受けたけど、ワタシはああいう『コミューン』?コミューンでポリティカルなコトをやってみたりとか、あんな『生活』、ワタシ自身置き換えて考えてみると『大っ嫌い』なんですよ。基本そういうのって『生活』じゃないですか?ワタシ、きちんと三食たべてお布団で寝たいっ(笑)!やれるヒトは『どうぞ』ってカンジだけどワタシにはムリだなぁ」
SR「『否定はしないけど』ってコトね?」
E「お風呂も入りたいっ(笑)!」
SR「オレもね、毎日シャワー浴びたいからロング・ツアー行かないの(笑)」
E「分かるぅ。ワタシ『チョ～赤字』になっても新幹線や飛行機でツアー先に行って『ホテル』泊まっちゃうもん(笑)」
SR「あ、コレって…載せてイイものかな(笑)?」
E「イイの、載せて～っ!ワタシは『作ったスタイル』のアピールよりも自然に。ど～せ自分でカネ払うんだからさ、ふかふかのベッドで寝たいのよ(笑)!」
SR「アハハハ(笑)!」
E「それはワタシの『自由』だから、それに対する『反論』も出来るし。要は自分の『発言』全てケツ持ってんですよ」

SR「うんうん」
E「自分の好きな『パンク』、自分がパンクだと思うコトをやればイイし、もう『イメージそのまま』を演じる必要なんて無いんですよ。ワタシ、刺青とかも入って無いしボディピアスも手術のトキ全部外して…髪もフツーに『OLさん』みたいじゃないですか(笑)?でも自分のコト『パンク』だと思いますよ」
SR「そうだね」
E「イイんですよ、自分が思ってたら(笑)」
SR「いや…イライザはパンクでしょ(笑)」
E「こんなんでホント大丈夫ですか(笑)?」
SR「全然っ！余裕でしょ！ね？山路さん…」
Y「…はい」
SR「ギャ〜っ！それだけっ(笑)?」
E「(笑)」

『馬鹿は勝手に滅びる』なんてタイトルを打ってはみたが文中にその『馬鹿』は登場しない。実際数人の名前も挙がったけど全てCUTしました。理由は何故か？本気で取り組んでいるオレ達アーティストが誌面で何を言おうがそのメッセージにすら『気付かない』から『馬鹿』なのであって解りやすく言えばそれらは放っておけば『勝手に滅びる』からです。しかしPAINTBOXムネに関してはそうで無いと願いたい。故チェルシー、HG佐藤クン、スグルや協力してくれる仲間達、関係者のコトをひとつずつアタマに浮かべてゆっくりと考えるべき時間を与えられたのです。『自分にとって何が必要か』を。オサム君、スギちゃん、大坂、イズミ、澤さん、タケヒサ、コバちゃん、ゴマ、函館のみんな、彼が帰還してきたらみんなでうんと優しく接してあげて下さい。アイツがもう一度、ヴォーカルなりベースなり、たとえそれが『コラム』でもイイや、自分のチカラで始めた時にボクがコテンパンにしますから(笑)。コレを読んで、もし鼻で笑ってるヒトが居るならオレなりの言葉で言わせてもらうと『ところでキミはムネの様に歌えるのかい？』だよ。どんなカタチだろうと失うのはもううんざりなんだ。分かるだろう？信用して無いけど期待はしてます。────最後に恒例の(?)浜松暴露コーナー。『ゴリラみたいなジェームスディーン』ことG - SIDEの刺青男ホンガシ(BEYOND HATE)はボクの後輩であり、リトルミラーズのギターであり、親友かつライバルでもあり、地元でも指折りの大バカである(ちなみに嫁さんは浜松No.1の美女だ)。こないだ呑み会で「最近なんかあった？」「特に…変わったコトは無いですけど……まあボクの『恋バナ』ってのが軽くあるんですけどネ」「はぁ?!何それ」「昔付き合ってたオンナにTELしたんすよ、それも変な下心とかじゃ無くて。その頃のボクってホントに自分勝手な付き合い方してたな〜、って思って…謝ったんですよ『あの時、ゴメンな』って」「あ、そう。とか言って上手いコト言いつつ誘い出して…って計算でしょ？」「それは無いです！今回はホントに『キレイな心』なんですよ」「解った。ホントに『キレイ』なら今度ライヴんトキ、一応オマエの嫁さんに話しとくわ」「いやいやいやいや！『反省したよ』っていうのを伝えたかっただけです」「んじゃよ〜、オマエが手の甲にタバコの火ぃ押し付けて消えてった後輩全員にTELしろよ！」「そ、それは…反省…して無いんですよね〜…へへへ」「それからその元カノど〜なったよ？」「３日後にTELがきて『別に…用事は無いんだけど』って言うんですよ〜フフフ。でもホント何も無いですからっ！」「んじゃ、どうしてハナシのタイトルが『恋バナ』なんだ！あ？」「あっ…(汗)！」────ホンガシはボクの後輩であり、リトルミラーズのギターであり、親友かつライバルでもあり、地元でも指折りの……ボクのポテトはチンチンチン。次回もお楽しみに(笑)。

「It Looks Forward to a Life 2010」
12月4日(土)　アメリカ村KINGCOBRA
・RYDEEN(横浜)
・KRIEGSHOG(東京)
・VIVISICK(東京)
・TANTRUM(東京)
・VEKTOR(東京)
・REALITY CRISIS(名古屋)
・ACROSTIX(四日市)
・THEクルマ
・ORGANISM
・WARHEAD
・TECHNOCRACY
・BAD DAIRTY HATE
・MASTERPEACE
・HATSURI
GUEST :
SCUMPUTER(bristol/UK)
DJ'S on terrace!!
・SO(hardcore survives)
・SHIGA
・MINAMI(反権力ZINE)
・FFF(ASM)
・TOGETHER(Times together)
・SHINSUKE+MA-NII(tsuyama)
・MIKE FOSTER



左から→DILDOSケータ(ペチャパイイケメン)、KATUGLYケースケ(ロベたイケメン)、DILDOSシンゴッド牧師(ボッキ中)、902オゼキ大統領(テロ警戒中)、KATUGLYズッキー二永田(KY爆弾)、902ナオマサ(カニ食べ放題)。彼らあっての ハママツです。

ギタリスト解剖

metal punkやろうぜ!

vol.5 gori

初めて出会ったのは何時だったであろうか??はるか昔のような気がする。確か、私が以前参加していたバンドLIFEのヴォーカリストの後輩ってことで紹介されたのが初めてだったか…。当然のごとく、彼は自然にギターを持って歌ってDISCHARGEしているヤツになっていて、最早、若くない若手の代表格!(笑)三重第二(三?!)ウェーヴを支える、日本を代表するD-BEATバンドCONTRAST ATTITUDEの優しいGORI君登場!!

INTERVIEWED:二ツ木正康



■あなたのお名前、バンド名は?

「CONTRAST ATTITUDE/Gu.VoのGORIです」

■ギター歴は何年?

「一時期弾いて無かった時期もあるけど初めてギターを手に入れて弾きだしてから16年くらいです」

■現在の使用ギター、AMP、エフェクターを教えてください。

「使用しているギターはEDWARDSのマイケル・シェンカー・モデル。Neckは太めで最初は慣れなかったけど今となっては弾きやすい。rear PUにもともと付いてたduncanのPUを外してパワーと伸びを求めてDimalzioのX2Nに変更した」

Color:Black/White
BODY:Mohogany
Neck:Mohogany/
指板 Rosewood/22Frets
PU:front→seymour duncan SH-1n
rear→Dimalzio X2N
Bridge:Tune-matic/stop tailpeice
AMPヘッドはMarshall JCM2000とMarshall JCM 2555 slash signatureの2台。キャビは1960Aキャビ2台と1960Bキャビ1台。エフェクターはBOSS TU-3 Chromatic tuner、DOD FX59 THRASH MASTER、SOBBAT FUZZ Breaker 4、DOD FX40B GRAPHIC EQUALIZER、BOSS XT2 Xtortion、MORLEY George Lynch TRIPLER、BOSS FV300L Volume pedal、Guyatone AC-106 Power supply



意外にシンプル!

■自身のギターのチューニングと使用弦メーカー/ゲージ、ピックの種類と固さ。

「チューニングはレギュラー・チューニング。弦はERNIE BALLのPOWER SLINKY(48〜11)で1、2弦のチョーキングをしやすい様に1弦を9、2弦を11に変えています。ピックはFERNANDESの滑り止め付おにぎり型のHをいつもだいたい使っています。結構コード弾く時もソロの時にしてもジャカジャカ全体を掻き鳴らすように弾いているから弦に負けないよう硬く幅があるピックを使ってます」

■マイケル・シェンカーとDISCHARGEの融合は僕の専売特許なんだけどな(笑)。GORI君もマイケル・シェンカーが好きなの?それと使用機材にアーティスト・モデルが多く含まれているけど、その辺はあのアーティストが使っているなら間違いない!みたいな事なのかな?出してる音、即ち使い方が全然違うと思うけど(笑)。

「マイケル・シェンカーのギターは見た目が

ディスチャージnotマーシャル　1



かっこよかったので選んだだけで、マイケル・シェンカー自体は知りませんでした(笑)。今も聴き込んではいません。アーティスト・モデルがあるのはたまたまで、あのアーティストが使っているから間違いないとかではありません。MORLEY TRIPLERなんかは何台か同時に出したいなら音質の劣化も防げて良いよと楽器屋の勧めで買ったもので、これは良い!とおもったらたまたまジョージ・リンチ・モデル!だったみたいな感じです(笑)。音や使い方は確かに全然違いますが…」

■セッティングを教えてください。自分の音の拘り、特徴もお願いします。

「MORLEY TRIPLERで3台のアンプを同時に出す事が出来るのでそこから2Ch使って2台同時に出してます。1Chからまず太い音を作りにDOD THRASH MASTERからVOLUME PEDALを経由してMARSHALL JCM2000へ。クリーン・チャンネルのクランチで軽く歪ませて直で太めに音を作っておいて弦鳴りが聞こえない程度にDOD THRASH MASTERで太めに歪ませてる。それと2ChからNOISEを作りにSOBBAT FUZZ BREAKER4→DODグライコ→BOSS XTORTIONでVOLUME PEDAL経由でMARSHALL JCM2555へ。ファズ、イコライザーだけだと2台同時に出して刻む時にあまりはっきり音が出てこなかったのでXTORTIONをかましてザクザク感をカヴァーしている。自分のBANDにギターが一人増えた分、高音NOISEの部分はある程度もう一人に任せて自分の音は過去の音作りよりNOISEの部分を少し減らして重めの音作りになってるかも。リフが分かる程度で悪い音を意識して作ってます。音の切り替えは特にしていませんが疾走感を出すのに音をいっぺんに切ることがよくあるので2Ch共VOLUME PEDALを経由してます」

■C.Aはツイン・ギターだけど、二人で一体何台のAMPを使ってるの?それと、GORI君は欲しい音を求めて機材を模索するより、どちらかというと今あるものを使って、それで何とか理想に近づけて行くというタイプなのかな?!

「自分がヘッド2台キャビ3台でもう一人が1台ずつです。欲しい音はある程度今ある機材で模索していってそれでもダメなら探し求めますね。エフェクターはいままでいろいろ模索して変えてきましたから大量にあります…」

■ノイジーでありながらもヴォリュームに頼らない音抜けを重視しているようなセッティングに思われますが、ベースとギターとの絡みで気をつけている点はありますか?

「ヴォリュームにも頼りますが自分の音でリードしていくという所もあるのでその辺で抜けは大事にしたい所です。絡みで気をつけている所はギターの裏でベースの動いている部分、うねっている部分をギターの音にまみれている中でうまい事だすという所とかですかね」

■最初に買った、手に入れたギター、それは何故そのギター??

「最初に手に入れたギターは中2の時に上の人から5000円くらいで売ってもらったcharvelのギター。現在も売っているsan dimas style1みたいなやつのクリーム色です。何年かしてから友達に譲って今は有りません」

■現在までに影響を受けたアーティスト/ギタリストをあげてください。

「とりあえず最初に自分がギターを弾きたいと思ったきっかけが『XのHIDE』ですね。とにかく見た目の激しさ、ステージの激しさと彼が持つ不思議な雰囲気にやられた。コピー等も試みたが速弾き等まったくついていけず悶々としていて、クッソー絶対うまくなってやると当時は意気込んでいた。自分はDISCHARGEよりも先に小学生の時にX(初期)を聴いて、なんて速くて攻撃的な音楽なんだと思いました。
その後に『AEROSMITH/joe perry』。ロックのギターってこういう感じなんだと思ってロックっぽいフレーズなんかを当時よく練習しました。joe perryを真似て黒のレスポールがものすごく欲しくなったが金がなく買えずじまい。
その後HARDCORE PUNKとの出会いとなって行きいろんな人に影響を受けました。

『DISCHARGE/BONES』
BONESに受けた影響は音というよりピッキングだったりソロの部分のスケールやソロをジャカジャカ弾いている感じやチョーキング具合。実際目の前で見て間違いなかった。黙々と弾いていながらも派手さがある。



ディスチャージnotマーシャル　2

『DISCLOSE/川上君』
音に対する探究心。HARDCORE PUNKに対する向き合い方。音にも人柄にも影響を受けた。直に一番音について話をしてアドバイスをしてくれた。他にもいろいろ言葉に出来ないくらいの思いもあるけど、彼がいなかったら今の自分はないと思うくらい一番影響を受けたといっても過言ではない。

『G.A.T.E.S/二ツ木君』
多くの音楽を聴いてそれがうまく消化され自分のスタイルにうまく反映している所が凄いと思う。ギターのテクニックも凄いしステージを見るたび練習しなきゃと本当に思わされる。LIFEでヘルプしたときにコピーしていてリアルにそう思わされた。

『AGE/TSUZY君』
芯のある粗いザクザクしたメタル・ギターにテクニックも兼ね備えていて左手の弦の押さえ方も参考にしたりした。AGEを家で聴きながら弾いていたらあまりにも多いミュート数に手が攣りそうになった。きっと本人も手が攣りそうになっているんじゃないかと思った。

『D-CLONE/ヒロシ』
彼も音への探求心、こだわりがもの凄くあり独自の音を試行錯誤して作り出していて新しい感覚を持っているおもしろい奴。これを試そうと思うんだけど、と言うともう試し終わっていたりする。

『JUDGEMENT、BASTARD/ZIGYAKUさん』
鋭いギターの音にキレのあるソロ。ステージでの存在感に圧倒された。自分が思うHARDCORE PUNKのギタリスト像に凄くハマって初めて見た時に衝撃を受けた。6月に見に行ったBASTARDでもそれは変わらなかった。

『KREATOR/Mille』
自分のBANDに刻みを取り入れた時KREATORの1stの刻み方も意識した。気持ち走りぎみな刻み方も好きなところ。THRASHMETALを聴き始めるようになったきっかけのBANDでもある。

『Wheel of life, ex Goat worshipper/アキヒデ君』
川上君のサポートもしていた人で音の出し方等マニアック過ぎる人。エフェクターの中に混じってゲームボーイがあったのを見た時には衝撃を受けた。えっこんな音の出し方があるの?って、いつも思わされる。自分で機材を作ったりもしていて、微妙な音の違いとかいろいろ細かい所の話もおもしろい。

『SICKNESS』
ギタリストでは無いけどHARDCOREあがりのEXTREME HARSH NOISEアーティスト。ずっと一定のNOISEを出している訳では無く、痛々しい重低音NOISEの作り方、切り裂かれそうなCHAOS NOISEが兎に角凄まじい。どんなエフェクターや機材を使っているのか凄く興味があり調べてみたい」

■その影響は今現在どのように自分のスタイルに反映されていますか?

「いろんなLIVEを見てきてやっぱいい音出してるギタリストの足元やアンプは気になる訳で、いろいろ見て聞いて話して参考にしたりした時もあったし考えや気持ちの部分で影響を受けたりしながら、自分のフィルターを通って出したい音もだんだん見えてきましたが、理想の音に近づいてきたかなと思えばその都度影響や刺激を受ける事でまた理想は離れて行く、自分に欲しい音が増えるという事を繰り返しながら今現在はLIVEを見てもらえれば分かると思いますが、今現在はあーいうスタイルとなっていると思います。自分自身からも人に影響を与えられるようなスタイルを築き上げれればなとも思います。例えば人から自分のスタイルを非難されようとも自分が今までに吸収してきた物が反映していて、自分が好きなものが自然と出ているだけだから非難されてもまったく痛くも痒くも無くこれからもやっていくだけ。だから俺はこれからもD-BEATで勝負していきます」

■この企画を始めてXのHIDE氏が及ぼした影響についてはPUNK界にあっても絶大なのだなと思ったんだけど、HIDE氏がX以前に活動させていた横須賀サーベルタイガーもフォローしましたか?JOE PERRYということはオープンチューニングのギター等にも当時は興味を持ったのですか?また、現在もハードコア・パンク以外の音楽に興味はありますか?

「サーベルタイガーについては当時はネットも普及していないし情報も少なかったので音源が無く聴くことが出来なかったので後追いでした。すでにXのHIDEっていうイメージしかなかったのでサーベルタイガーを初めて聴いたときそこまでグッとこなかった。オープンチューニングにはまだギターの知識も余りなかったので興味はなかったです。ややこしかったので試しもしませんでした(笑)。多分今後もする事はないと思います。
ハードコア・パンク以外も聴きますし興味もあります。BLACKMETAL、DOOM、AMBIENTやINDUSTRIAL、NOISEといった音響系とか、この辺はハードコア・パンクからの流れですが興味がありよく聴きます。興味があるとまではいきませんがAEROSMITHやLENNY KRAVITZとか昔聴いた洋楽とかもたまにですが聴きます」

■個人的なギター練習はしますか?

「曲を作ったりしている時にそのまま練習したりたまに一人でスタジオ入って音をいじったりしてます。その時よく聴くBANDを耳コピしたりもしてます。一ギタリストとしてアドリブだったりいろいろ弾けるとおもしろいし何しろもっとギターが楽しめるし遊べるからその辺は練習あるのみだと思ってます」

■ギターのコレクション、所有している本数とその内訳、特徴。

「ギターは今使っているのを合わせると全部で6本、ベースが2本有ります。ただ物持ちが良いだけでまったく使ってませんが…」

ギター
●Edwards flying V michael schenker model (body color) white/black
●Gibson flying V (body color) classic white
●Epiphone flying V (body color) black
●Greco respaul custom
(body color) black
●Greco respaul standard
(body color) cherry sunburst
●Fernandes devilman-zo3
(body color) devilman paint

ベース
●Epiphone Thunderbird
(body color) sunburst
●Fender copy model
(body color) sunburst

■GORI君も機材と精神的なバランスに悩むタイプでしょうか?その辺の言葉にならない葛藤がこのインタヴューを通して各ギタリストから感じ取れる時がありますが。

「そうですねー。今は余り悩まない方かもしれません。過去はそういう部分も考えて悩んだ事もありますが今はやって行きたい事ややるべき事も見えてきてるんでバランスとか考える前に機材も含め精神的な部分、表情や人柄、自分の気持ちが音の塊となり自然とステージ上でも出てくると思います。あまりちゃんとした答えにはなってませんが言葉にならない葛藤は結局シンプルなものになってくると思います」

■ありがとうございました。

今回のキーワード

言葉にならない葛藤は結局シンプルなものになってくると思う



DISシェンカー!!Batsステッカーで駄目押し!!

SATANIC OCCULT DEATH III

TEXT:二ツ木正康

VON三昧の9月。皆さまは何を一番多く聴きましたか？僕はPUNK/METALを聴く際、2010年何月を生きた証！的なレコードも毎月買い物します。9月はFINAL BOMBSの新譜も出ましたね。所で最初に言ってしまいますが、VON GOATでのレヴューの際、アーティスティックな感じが気に食わないと書きましたが、この感覚、実は初期VONの段階でも根っこに色濃くあるんですよね。皆さんはお気づきでしたか？まぁ良いんですけどね(笑)。

BURIAL INVOCATION/Rituals of the Grotesque



僕はアナログ・ヴァージョンを待っていたのですよ！トルコから登場のNEWデスメタル！正にDEATH isデスと言った音で100% PUREなDEATH METALってこういう音を言うのでは無いでしょうか？暗黒、陰鬱、スロウ、ミッド、スロウ、ミッドそして…暴走!!一言で言えばBOLT THROWERって感じですが今の本物のDETAH METALが聴きたいのならば迷わずBURIAL INVOCATIONをチョイスしてください。

(Me Saco Un Ojo/6)12" JAPANESE EDITION

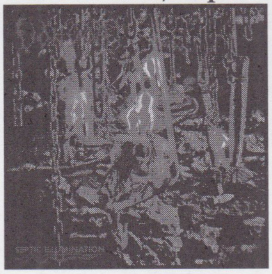
DEGIAL/Death and Darkness buries all



今現在、世界を震撼させている若い黒い音はDEATH METALであり、私が思うに80's後期UKクラストが持っていたB級、C級ながらにドス黒い感覚は彼らが今、確実に受け継いでいると言いたい。好みはあれど2010年現在、コレが現実なのだ！SWEバンドでありながら、MORBID ANGELを彷彿させる音には渋みも漂う。

(Blood Harvest/品番なし)7"

VON GOAT/Septic Illumination



VONミュージック・グループ！だったか？凄いっすよね。VONお家騒動。まぁ何となく、お互いの主張が解ります。んで今回のVONは個人的にビンビンきたSIXXやっていたVON GOATの方。確かにVON→SIXX→VON GOATの流れではあるけども、僕はこれダメだ。なんすかこのアーティスティックな感じ。

(Nuclear War Now!/ANTI GOTH157)LP

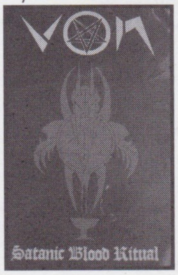
ENTRAPMENT/Infernal Blasphemies



オランダ・デスメタル1stデモ。よくよく調べてみるとよくある一人バンドでしたが、MYSPACEをみると影響を受けたバンドの三分の一が日本のハードコア・バンドで通常の疾走系のデスメタルの2倍の疾走感を感じさせるこのサウンドの根源はこの辺りからの影響かもしれません。全体の仕上がりもMORBUS CHRONと並んで聴きやすいタイプでNIHILIST〜ENTOMBEDの流れを体験したPUNKSにもすんなりイケるバンド。

(Detest/012)CASSETTE

VON/Satanic Blood Ritual



最高!!まったくもって思っていた通りのライヴ映像がお茶の間で！絶頂期、91年のサンフランシスコ等4ステージ＋フォト・ギャラリー＋未発表曲を収録。SAMHAIN全開の鍛え抜かれた肉体フロント二人に真ん中ドラマー長髪！完璧です。若き日のVONからは微動だにしないステージングとは裏腹に全く隙がありません。眼差しも真剣そのもの！ホント最高です。3ピースの理想系の一つである。

(Nuclear War Now!/ANTI GOTH161)DVD

VETERNUS/Awakening the Grave



MORBUS CHRONが現在のSWE DEATHの陽であればこちらは陰でしょうか?!解りにくいながらも本来の陰をまとったスタイルです。DEATH SSやVARATHRONが一般にも若干(笑)知られ、良くないとされて来たものにも良さを見いだせる時代、DEATH METAL大学3年の僕はギリギリこの音源の良さが解りますが、デス博士号持ちの方々には少々、侮れない存在のバンドかも知れません。

(Detest/Me Saco Un Ojo/013-09)7" JAPANESE EDITION

MORBOSIDAD/PERVERSOR/Split



現行DEATHRASH SPLIT 12"。波にノッてるって言う音って言うのはこういう感覚なのだな！と思い出させられたMORBOSIDADのトーンは3rdで提示したDEATHRASHを核としたWARBLACK。前回のリリースがあまりパッとしなかったと思ったが、今回は個人的にはREPULSIONをも彷彿させられてしまったPERVERSOR。黒い音の今を感じたいのならこのSPLITを聴いてくれ！

(Nuclear War Now!/ANTI GOTH158)LP DIE HARD VERSION

DEVOURMENT/Shallow Grave



スウェディッシュCARNAGEのVo.が在籍した幻のバンド、90年Live音源。ハードコア・パンクとデスメタルがエクストリーム・ミュージックの一つの枠として共に存在していた頃の正に古き良き時代の音。後期UK、スカンジにあった典型的な音で地味ながらにグッときます。歴史的価値もある音源だけに音源保管人を自称するコレクターにも喜ばれる代物。

(Detest/Me Saco Un Ojo/015-11)7" JAPANESE EDITION

DIE WASTED/Sleazy Nights till Armageddon



やっぱ出てくるんですねー。完全にGENOCIDEとBLUDWULFが産み落としたナスティ・クラスト・パンクスfrom U.S.A.。BLUDWULFとの違いは視点がMETALからと言うところ。ハリウットローズがもっとガレージ色を強めてUS PUNKよりになりDISCHARGEを聴いちゃったというようなサウンドはMETALPUNK音源に貪欲な方にはたまらないかも?!

(Muerte Negra Discos/MND020)CASSETTE

MORBUS CHRON/Creepy Creeping Creeps



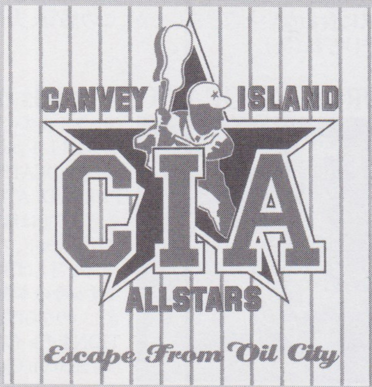
あのですね、すみません！これが一番良いです(笑)。ホントSWE DEATHのおいしいところ取りですべてがA面の一曲目で構成されているかの出来で素晴らしいです。けど素晴らしすぎてどうなのですかね？？(笑)関係無いけどエンフォーサー/NWOBHMのような関係…黒い音2010年9月を生きた証音源の一つ！素晴らしいです！黒音ファンは聴き逃すな!!

(Detest/Me Saco Un Ojo/014-10)7" JAPANESE EDITION

LASHING SPEED DEMONS VOL.11:UFO







DOLLで書いていた頃、誌面でこのバンドの名前を出すことなんて、全然考えたことがなかった。それが今、EL ZINE誌上でこのバンドの名前を口にすることになろうとは。さて今回の「LASHING SPEED DEMONS」は、"UFOとその周辺"。…実際には、UFOよりも"その周辺"の方を好き勝手に書くという企画でございます。大体UFOそのものは、今もどう考えたってEL ZINE向けのバンドだとは思わない。しかし人脈をちょっとたどってみると、あら不思議議、ってな具合で。

TEXT:大越よしはる

さて、UFOというと、あのマイケル・シェンカーをフィーチュアして70年代後半の英国ハード・ロック・シーンで一時代を築いたバンド…だが、本誌では当然、まっとうなハード・ロック・バンドとしてのUFOにスポットは当てない。UFOにもそれ以前とそれ以後、そしてその周辺があり、EL ZINE的にはそっちの方が美味しいのです。

UFO。1969年8月、ロンドンで結成。オリジナル・メンバーはフィル・モグ(ヴォーカル)、ミック・ボルトン(ギター)、ピート・ウェイ(ベース)、アンディ・パーカー(ドラム)の4人。最年長のミックが20歳、一番最後に加わった最年少のアンディが18歳、という若いバンドだった。

1970年にアルバム『UFO1』でデビュー。メンバーはフランク・ザッパに心酔していたとかいうが、当時のUFOの音楽性自体は、R&Bとサイケデリックを引きずりに引きずりまくった、ダークでヘヴィなR&Rだった。

…マイケル・シェンカー在籍時の全盛期UFOなら、本誌読者様でもけっこう聴いてる人はいるんじゃないかと思う。しかしこの時期のUFOのサウンドは、マイケル参加後とは全然違ったものだ。そうはいっても何曲か…「Timothy」「Follow You Home」といったスピーディーでコンパクトなハード・ロックは、マイケル参加後の「Lights Out」とかそういう路線に近いと言えないこともない。

しかし地味。なんというか地味。LED ZEPPELINやDEEP PURPLEがブイブイいわせていたこの時期、UFOは地元英国ではあんまり注目されなかった。ところが、シングル・カットされた「C'mon Everybody」が、何故か日本とドイツで話題となる。

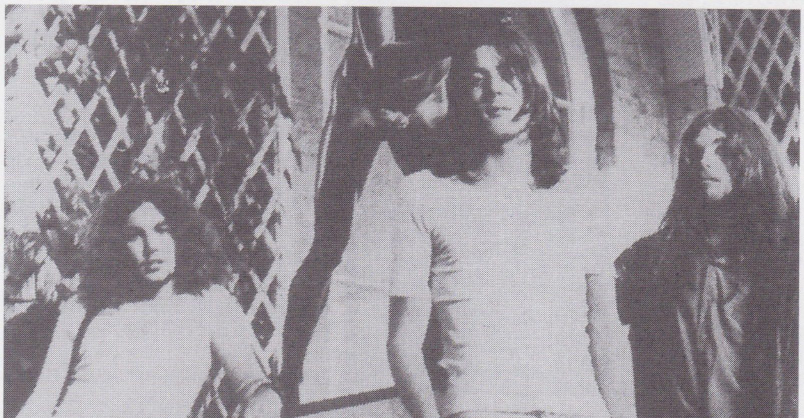
「C'mon Everybody」。言わずと知れたエディ・コクランのヒット曲のカヴァー。この点で、同じくエディの「Somethin' Else」をカヴァーしていたシド・ヴィシャスに話を持って行くのは…そりゃ幾らなんでもこじつけってもんだろう。改めて聴いてみると、この「C'mon〜」、60年代後半にこれまたエディ・コクランの「Summertime Blues」をカヴァーしていたBLUE CHEER…のセンを狙っていたんじゃないかと、俺は思っている。

ともあれドイツでウケたのをいいことに活動の拠点をドイツに移したUFOは、1971年に2ndアルバム『FLYING』をリリース。しかし当時のドイツと言えばGURU GURUだのASH RA TEMPELだのといった奇怪なバンドが跳梁跋扈していた奇形サイケ王国。その影響をモロに受けたか、『FLYING』のジャケットには"SPACE ROCK"の文字が躍り、タイトル曲は26分半。ここでも、英米でのヒットとは無縁な方向に…。

それでもまだ日本とドイツではそこそこの注目度があり、1971年9月には初来日。その時の音源が翌72年に『LIVE』として日本とドイツでリリースされるが、その頃にはミック・ボルトンが脱退してしまっていた。

そこでUFOはマイケル・シェンカーを迎えて起死回生…というのはまだ早くて、マイケルの前にバーニー・マースデン(後にWHITESNAKE)が弾いていた時期があったし、バーニーの前に在籍していたのが…なんとラリー・ウォリスだった。

ラリー・ウォリスといえば、PINK FAIRIESの3代目ギタリストにして、MOTORHEADの初代ギタリストでもあります。話はここで大



初期UFO



←PINK FAIRIES時代のLARRY WALLIS
↓EDDIE & THE HOT RODS



きく脱線する。

PINK FAIRIESの名前を初めて知った頃、どこかで"元祖ハードコア・パンク"とか書かれていて、「へー」と思ったんだが、ラリー・ウォリス参加の3rdアルバム『KINGS OF OBLIVION』(1973年)を聴いても、あんまりそんな感じはしない(しかしダイナミックでもの凄くカッコいいハードR&Rだ。初期MOTORHEADのレパートリーとなった「City Kids」も収録)。だがラリー参加以前の「Do It」「The Snake」といったハードでファストな曲を聴くと、多少納得出来る部分がある(「The Snake」はあのTANKもカヴァー、コレがまたえらくカッコいい)。

ラリー時代のPINK FAIRIESも、解散・再結成を経てスティッフ・レコーズから出したシングル「Between The Lines」(76年)なんかは初期MOTORHEADに引けを取らないスピードR&Rで、このあたりはかなりEL ZINE向けの話になってくる。実際、昔まだ西荻WATTSがあった頃、店の前でいかにもな鋲ジャン姿のパンクスが二人、「PINK FAIRIESってカッコいいよな」と話しているのを目撃したことがあるし、PINK FAIRIESはEL ZINE向け!…とここで強引に断言しておきます。

しかしUFOでのラリー・ウォリスがどうだったかといえば、1年持たずにクビ。なので音源は出ていない。だがそのラリーがPINK FAIRIESに加入した時は、"元UFOの"という肩書がプロモーションで大きく前面に出た、らしい(ラリーではなくポリドール・レコーズの仕業だったが)。ラリーによると、彼がいた頃のUFOはグラム・ロックだった、というが…そうか?

一方バーニー・マースデンを経てドイツのSCORPIONSからマイケル・シェンカーを獲得したUFOは、一気に英国ハード・ロックの最前線に躍り出る…んだけど、ここらへんの話はEL ZINEでは断じて割愛します。

ただ、マイケル・シェンカーを迎えて美麗なギターをフィーチュアした路線にシフトしたUFOではあったが、マイケル参加当初の代表曲にして、その後THE MICHAEL SCHENKER GROUPでも演奏され続ける名曲「Doctor Doctor」(1974年)が、楽曲のスタイルとしてはシンプルなハード・ブギーだったことからも明らかなとおり、いわゆる全盛期にあっても、マイケル以外のUFOメンバーの音楽性はやっぱり様式的なハード・ロックになかった、ということは言えると思う。

それでいうと、1976年頃ちょっとだけUFOに参加していたキーボーディストがダニー・ペイロネル。元HEAVY METAL KIDS。HEAVY MEATL KIDSといえば、かつてDOLLにもインタヴューが載っていたことでわかるように、バンド名に反してその音楽性はパンク的でもあった(そもそもそのバンド名はいわゆるジャンルとしての"ヘヴィ・メタル"ではなく、ウィリアム・S・バロウズの著作から取られている)。UFO、なかなか一筋縄ではいかない。

実際UFOのポジションというのはかなり独特で、メタル・バンドでもUFOのカヴァーとかは聴いた覚えがない。しかし意外と影響力はあったようで、IRON MAIDENのスティーヴ・ハリス(ベース)がストライプのパンツを好んで着用しているのは、UFOのピート・ウェイの影響が大きいらしい。

ともあれ全盛期は長く続かず、その後マイケル・シェンカー失踪〜脱退。1980年にはポール・チャップマンをギタリストに迎えて新体制となったUFOだったが、このあたりも断固として割愛。THE MICHAEL SCHENKER GROUPも。

マイケル・シェンカーを失って一気に地味な存在となったUFO、更に悪いことには1982年、オリジナル・メンバーのピート・ウェイまでもが脱退。バンドは正式な後任ベーシストを決定しないまま活動を続けたが、結局83年4月に解散となる。

ここで再び脱線すると、UFOを脱退したピート・ウェイは新バンド、FASTWAYを結成。パートナーはなんとMOTORHEADを脱退した"ファスト"エディ・クラーク(ギター)。しかもこのバンド、結成当初はドラマーにこれまたTHE CLASHを脱退したトッパー・ヒードンを予定していたというから、なんともイカレたメンツだ。結局ドラマーは元HUMBLE PIEのジェリー・シャーリー(シド・バレットのバックも務めたことがある)に決定し、一方で当のピート・ウェイが1stアルバムのリリース前に脱退、と紆余曲折を経たFASTWAYだったが、このバンドでロバート・プラントそっくりの歌を聴かせていたシンガーが、後にあのFLOGGING MOLLYを結成するデイヴィッド・キングだというんだから、このあたりの人脈は本当にわからない。

フィル・モグの方は早くも1984年12月、新たなメンバーを集めてUFOを再結成する。約1年後の85年11月にはアルバム『MISDEMEANOR』をリリースするが、この時のメンバーに名を連ねていたのが…元EDDIE & THE HOT RODS〜THE DAMNEDのポール・グレイだった。

EDDIE & THE HOT RODSにTHE DAMNED…どう考えてもUFOとは結び付かないが、ポール・グレイは一体何を考えていたのだろうか。というか、アルジー・ワード(もちろんDAMNEDのあとTANKを結成)にポール・グレイと、歴代のベーシストを続けてメタル界に送り出すことになるDAMNEDというバンドも、改めてさっぱりわかりません。MOTORHEADとも一緒に演ってるし…(MOTORHEADはいわゆるメタルとは違うけど)。

『MISDEMEANOR』リリースと同じ1985年にはEDDIE & THE HOT RODSも一瞬再結成しているが、HOT RODSよりもUFOの方が世間的にネームヴァリューはあっただろうし、ということでUFOでのポール・グレイ、雇われベーシストとしてお仕事に徹していたのかな、とも思ったが、『MISDEMEANOR』ではただベースを弾くだけでなく、作曲にコーラスにと大活躍、はっきり言って貢献度は高い(HOT RODSとTHE DAMNED両方のレパートリーとなった名曲「Hit Or Miss」を聴けばわかるとおり、そもそもポールの作曲能力は高い)。

この1985年という年はあちこちでちょっとした復活劇があった年で、所属していたブロンズ・レーベルが潰れて活動が塩漬け状態だったMOTORHEADも、結成10周年を記念して元メンバーらのゲストを大勢集めたライヴを敢行(90年には『THE BIRTHDAY PARTY』としてCD化されている)。元メンバーということで、80年代に入ってから地味な活動に甘んじていたラリー・ウォリスも参加していたりする。

話をUFOに戻すと…『MISDEMEANOR』は大して売れず、バンドは1987年、再び解散する。その後ピート・ウェイと復縁したフィル・モグは90年代に入るとまたまたUFOを復活させ、これまたマイケル・シェンカーが出たり入ったりを繰り返すことになる(懲りない人たち)。

一方ポール・グレイはといえば、THE DAMNEDでキーボードを弾いていたローマン・ジャグとCANVEY ISLAND ALLSTARSを結成(ローマンはここではギター)。1991年にアルバム『ESCAPE FROM OIL CITY』をリリースしているが、このアルバムで地元カンヴェイ・アイランドの重鎮リー・ブリロー(Dr.FEELGOOD:故人)と共にゲスト参加しているのが、なんとラリー・ウォリス!

…ここまで延々と脱線を繰り返してきた話が、ここで遂に集束するのだった。70年代UFOに在籍してその後MOTORHEAD結成に参加した男と、EDDIE & THE HOT RODSとTHE DAMNEDを経て80年代UFOに在籍していた男が、90年代に共演を果たす…という事実に、めまいがする。まあCANVEY ISLAND ALLSTARS自体は、趣味のパブ・ロック・バンド(?)みたいなもんだが。

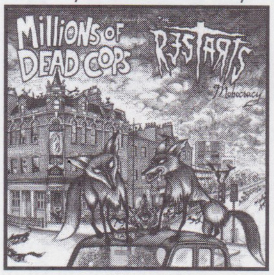
その後のポール・グレイは、90年代半ばに再々結成を果たしたEDDIE & THE HOT RODSに参加。現在も活動を続けているらしい。UFOはといえば遂にマイケル・シェンカーと縁を切り、速弾きギタリストとして有名なヴィニー・ムーアを迎えてこれまた現在も活動中(どっちもしぶとい)。さて…ラリー・ウォリスは?

KISS THE DISC

TEXT:行川和彦

リイシューものも含めて、ほぼすべてが2010年に発売された作品。本誌を売っている一部のパンク/ハードコアの専門店でしか買えないレコードも多いが、すべて国内のお店でも入手可能だからチャレンジしてみていただきたい。

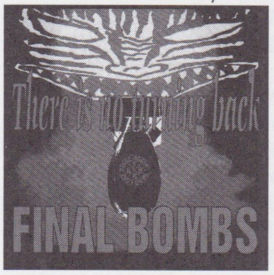
MDC/RESTARTS/Mobcracy



米英のバンドのスプリット。大ベテランのMDCはオリジナル・ドラマーのアルが復帰し、中期DEAD KENNEDYS風の変化球ナンバーも披露しつつ「Patriot Asshole」みたいな直球ソングもあり、"大統領にクサを"ってなユーモアもカマす。がんばってる。90年代半ばから活動しているRESTARTSは"UK 82スタイル"とも言えるキャッチーなハードコア・パンクで、こちらもナイス!だ。CDも発売。

(RODENT POPSICLE/CRASH ASSAILANT RPR 117)Split LP

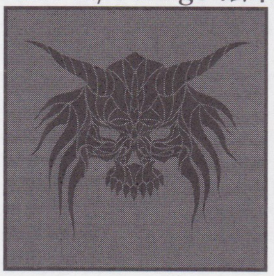
FINAL BOMBS/There Is No Turning Back



20年ぶりのセカンド・アルバム。83〜84年(と90年代初頭も少々)のDISCHARGE(「The More I See」もカヴァー)を消化して加速させたようなサウンドだが、ソリッドなギターと英語の詞を歌う味のあるヴォーカル中心に起伏のある作りだ。ベアー・ボム(vo、b)とカワカミ(DISCLOSE)のプロジェクトの曲もあり。粗削りの音で緻密に作られ、腰の据わった熱いロックとしても楽しめる約24分10曲入り。

(H.G.FACT HG-272)CD

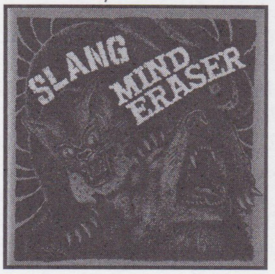
CROW/Vertigo-眩暈-



2010年のフェス"Chaos In Tejas"出演時に売った2010年3月録音。2曲とも若干SLAYERフレイヴァーが溶け込んだリフで突き進み、印象的なギター・ソロやフレーズを絡めつつ中低音集中の作りで混沌の空気感だ。A面の「眩暈」だけでなくB面の「占領下日本」も簡潔な歌詞は政治色を匂わせつつ、ヴォーカルとベーシストの別バンドである解剖室のニュアンスの隠喩が興味深い。いぶし銀ジャケ。

(PRANK 113)7"

SLANG/MIND ERASER/Split



2010年に両者が出演したフェス"Chaos In Tejas"主宰者のレーベルからの発売。札幌のSLANGは2009年11月録音の1分強の曲「Drug Society」にエナジーを集中し、英語の歌詞も功を奏したスピード感がかっこいい。かたやボストンのMIND ERASERは2010年4月録音の2曲。"CAPITALIST CASUALTIES meets MAN IS THE BASTARD"な短期決戦ファスト・スロー・ヘヴィ・チューンで寄り切る。

(540 540-15)Split EP

CULO/Military Trend E.P.



米国シカゴ周辺が拠点らしきハードコア・パンク・バンドのセカンドEP。今回も猛烈で、初期ボストン・ハードコアとBLACK FLAGの2010年ミックスみたいな熱度にこっちも燃える。影響を受けたバンドにRAMONES(「Shootin Glue」は彼らの曲と関係ありそう)とDISCHARGEを挙げるのも冗談ではない隠し味も絶妙だし、他愛もない日常話も政治も同次元で歌う詞も無理ないからヴォーカルもリアルに響く。

(DERANGED DY180)7"EP

KILL THE CLIENT/THOUSANDSWILLDIE/A Split 7 Inch On RSR Records



米国グラインド・コア・スプリット。2枚のアルバムも強力なテキサスのKILL THE CLIENTは、TERRORIZERにパワー・ヴァイオレンスが噛みついたようなメリハリの効いた3曲で、さすがの出来だ。ベースレス・トリオのTHOUSANDSWILLDIEは、"イースト・ベイ・ヘイト・グラインド"を標榜するだけにGODFLESHの如きヘヴィネスを内包し、複雑なリズム・パターンを絡めて独特なのだ。

(RSR RSR085)Split 7"EP

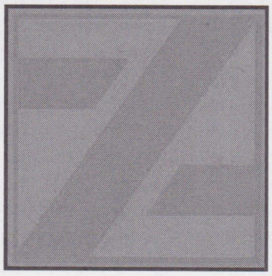
KNUSTE RUTER/gjennom veggene



ノルウェーのハードコア・パンク・バンドのファースト。本誌Vol.8掲載のDISHONORABLE DISCHARGEのメンバーがPOISON IDEA風のヴォーカルでまくし立てつつ、タメの効いたメロディック・ヨーロピアン・スタイルでぐいぐい押す。曲によってはACCUSEDも思い出すクロスオーヴァー風味と意表をつく展開で、歌詞がほぼすべて母国語なのもクセあり良。以前紹介した7"EPの6曲も追加のデジパック。

(FYSISK FORMAT FY027)CD

DOUBLE NEGATIVE/Daydreamnation



米国南部ノース・カロライナ産の強力セカンド・アルバム。120%ハードコア・パンクだが、王道を突き破る無限の情熱と超絶的なセンスに殺られた。ミディアム〜スロー・テンポを宿した曲作りとアレンジとパフォーマンスでカオスがレコードに刻まれ、ヘヴィな音の渦に飲み込まれていくのだ。命が息をするノイズの中から各パートが聞こえる音質も帯付でエンボス加工の光沢銀色パッケージも含めてグレイト!

(SORRY STATE SSR-25)LP+DLクーポン

MOBY DICKS/Ballad Of The Red Dog



MYELIN SHEATHSのメンバーも在籍するカナダ産パンク・トリオのファースト・レコードの4曲入り。サーフ/ホット・ロッド系のロックンロールがベースで70年代のRAMONESも思い出すが、"ヘタレ気分でファック・オフ"みたいなゆるさが抜群だ。HUBBLE BUBBLEの「Pogo Pogo」の替え歌と思しき曲「Ogo Pogo」も抜けていて最高。60年代のAMラジオみたいな音質も言うこと無しなのであった。

(MAMMOTH CAVE MCR-006)7"EP+DLクーポン

MICKY/Highway Bound



元FUNCTIONAL BLACKOUTS〜DAILY VOIDのマック・ブラックアウト率いる、米国シカゴの"ロックンロール/パンク・バンド"の2010年録音のセカンド・シングル。2曲しか入ってないが、まさに量より質。NEW YORK DOLLS直系のフック抜群のソングライティング、間を活かした演奏センス、ワイルド&何気にブルージーなヴォーカル、場の空気が伝わる音質、手作り印刷ジャケ、みな旨すぎる。

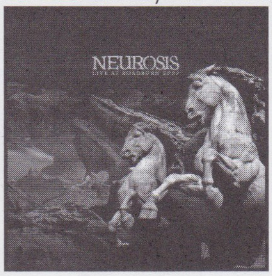
(FLORIDAS DYING FDR-32)7"

MALIGNANT TUMOUR/Earthshaker



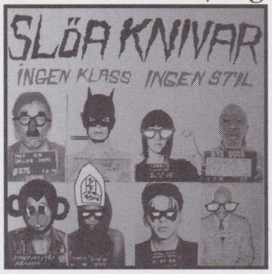
10年以上のグラインド・コア歴を経て、本作収録の「Motorcrust」というタイトルどおりにキメるチェコのバンドの4枚目のアルバム。80年代半ば以降のMOTORHEADもフォローし、邪悪と極悪を両立させた筋金入りの酒焼けドライヴィング・サウンドに痺れるしかない。歌詞(英語)もロック汁が沸騰して"Live Fast, Never Die"というフレーズにも自信が見え隠れ。特殊ジャケもポスター状のインナーも完璧だ。
(POWER-IT-UP/METAL AGE)LP

NEUROSIS/Live At Roadburn 2007



2000年代の彼らのアルバムに対してはもどかしさを感じていたぼくだが、このフェスはメタル寄りの先鋭派バンドが大半で気合が入ったのかライヴはイケると再認識した一枚。サンプラーも効果的なサイケデリックな質感をはじめとして無数のフォロワーを寄せつけない。この中で最も古い『Times Of Grace』の曲「The Doorway」をワイルドにプレイし、NEUROSIS健在!と確信した。約78分9曲入り。
(NEUROT RECORDINGS NR 073)CD

SLÖA KNIVAR/Ingen Klass Ingen Stil



はすっぱで荒れた喉の女性ヴォーカルが自国語主体で歌うスウェーデン産のファースト・アルバム。ちょいハードコアがかったハード&ヘヴィ・ロックンロール・パンクで、"PLASMATICS meets LUNACHICKS with BLACK FLAG"とも言いたくなるが、いなたい。MOTORHEADの逆の「Stay Dirty」という曲で歌われるライフ・スタイルから察するに、田舎の汚ギャルが気張っている佇まいの愛すべき一枚。
(SKRAMMEL 002)LP

TORCHE/Songs For Singles



衝撃の来日公演を経た2年ぶりの米国フロリダ産の単独作。約22分8曲入りだが中身は濃い。トリオになってより引き締まったサウンドは、ポップとドゥームが両立し得ることを示すマジカルな未来派ヘヴィ・ロックである。グラインド・コア・バンドのSHITSTORMも掛け持ちする超パワフルなドラムも叩きまくりで、キモチ良すぎる音なのだ。ジャケは封筒状でグリーティング風のインナーと筆者のライナー入り。
(デイメア・レコーディングス DYMC-129)CD

LAS RODILLERAS/Horror Pleni



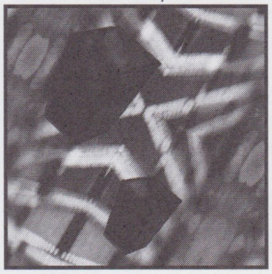
スペインのガールズ・トリオのファースト。CRAMPSの流れを感じさせる"サイコ・ロックンロール・パンク"だが、米国産とは一味違う高貴な佇まいに悩殺される。スピードもヴォリュームも上げず淡々としかし深く食い込んできて、ヌメヌメしたカミソリの舌で背筋を舐められるみたいだ。GERMSの「Forming」のカヴァーも含めて歌詞は母国語。天然エンボス加工なジャケットも素晴らしく買い!
(No Label, No Number)LP

JEX THOTH/Witness



女性ヴォーカルがリーダーの米国ナッシュヴィル産のドゥーム・サイケデリック・ロック・バンド。2008年の傑作『Jex Thoth』に続く約16分3曲入りながら濃厚。声質がパティ・スミスに少しだけ似ているが、芝居っ気は皆無で覚醒してとろけ、オルガン/シンセサイザーを含む音も彼女の声と共振してスピリチュアルである。しかも懐古ではなく現在進行形の響き。SLAP HAPPYのカヴァーも絶品だ。
(I HATE IHRCD 076)CD

BILLY BAO/Urban Disease



独立問題で揺れるスペイン/バスク地方の政治的な"ノイズ・ロック・バンド"。サード・アルバムに数えられるが、宇波拓(HOSE)のミックスの影響か"分断サウンド"に仕上がっている。ヴォーカルとドラムを含むインプロヴィゼイションも断続的な形でまとめられているが、他の作品と違う静謐な空間の中から熱気が伝わる。奇才ヘンリー・フリントのアートワークによる特殊ジャケット共々、デリケイトだ。
(PAN 11)LP

V.A./Epitaph For A Legend



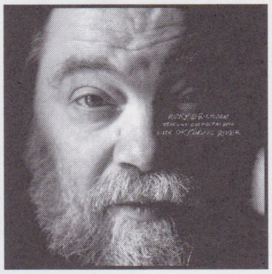
大半が(当時)未発表だった60年代後半のサイケ中心のテキサス・ロックンロール27曲入りの再発。ディスク1はRED CRAYOLA(現RED KRAYOLA)が5曲(CRAMPSとDWARVESがカヴァーした「Hurricane Fighter Plane」も収録)、ディスク2はロッキー・エリクソン関係が2/3を占め、この地独特の泥臭さが目に染みる。ハード・カヴァーの本のようなデジパックで40ページのブックレット付。
(INTERNATIONAL ARTISTS SNAX620CD)2CD

ISKRA/Bureval



カナダの"ブラック・メタル・ハードコア・パンク・バンド"のフル・アルバムとしては2作目にあたる。デス・メタル色が増して突進するとはいえDARKEST HOURのようにメロディは聞こえてこなくて、ブルータルながらもクラストのように崩れた感覚がポイントだ。ギターに終始モヤモヤしたノイズがまとわりつく音作りも特徴で、独自の政治意識が読み取れる16ページの大ブックレットも含めて力作。
(AGIPUNK AG64)LP

ROKY ERICKSON With Okkervil River/True Love Cast Out All Evil



元13th FLOOR ELEVATORSのシンガーソングライターが2010年に出した十数年ぶりのアルバム。地下フェス"Chaos In Tejas"に出演したということでもいまだパンク筋からの支持が厚いことを示す怪人が、アコースティックな楽器をふんだんに使った心あたたまる曲を披露し、浮き世の酸いも甘いも知ったディープな歌と音が傷口を癒す。味のある紙質の二つ折り紙ジャケと24ページのブックレット付。
(ANTI 87078-2)CD

＜追伸＞ ここではなるべくパンク・ロック／ハードコア・パンクのレコードやCDをレヴューしたいが、今回もその系統だけで推薦盤を20タイトル揃えられなくてスイマセン。ジャンル問わずあくまでも新しくリリースされたものをなるべく書きたいので、またしても数枚音楽的に幅を広げてやってみた。ふだんは自分のブログ(http://hardasarock.blog54.fc2.comなめブログ)で取り上げるべき、パンクやハードコアと音楽的な接点が少ない作品も入れた。とにかく貴重な紙媒体は有効に使わねば、もったいない。紹介したいバンドはたくさんいるし、常にアグレッシヴなセレクションをしたいし。むろんすべて推薦できる作品です。



SYSTEMATIC DEATH PIPECUT GIG IN NY

TEXT:Masaaki"KOBA"Sweden

まさか年内にもう一回寄稿する事に成るとは…自分でも予想外でした。
毎度!
SYSTEMATIC DEATHは"PIPECUT GIG in NY"と銘打ちまして9月の16～20日の間USAに行って参りました。

今回の渡米の経緯は今年4月の"BACK DROP EU Tour"の段取りで私がバタバタしていた頃に遡ります。
ある日の練習帰りの車内だったでしょうか?突然リーダーが「コバちゃん、EUも良いけど、やっぱ年内にNYも行こうよ!」と毎度のお馴染みの無茶振りをかましてきました。
「ちょっと待ってよ!俺はEUだけで手一杯だよ、行くんならシゲさん手配してよ、昔の国内Tourは全部1人でやってたじゃない!」「う～ん…」。その時はそれで済んだと思っていました…。
暫く時間が経ち、これ又ある日の練習時…「"DROP DEAD"のBenと連絡が取れたから日程を決めよう!」。突然のリーダーの提案に怯む他の3人。
「まだEUに行ってもいないのに…」「そんなに仕事休めないよ…」「金はどうすんのよ…」。銘々の意見はリーダーの「何とか成るって!"行けるトコまで行ってみろ!"だ!」発言に因って跳ね飛ばされてしまいました。
というより何より'08年の"BACKDROP



Benの家にて

Live@Mill Creek Tavern →
何回も通ったPizza屋@Williamsburg↓





World Tour"時に世話に成ったBenに既に話を通してしまっている以上、ひっくり返して義理を欠く訳にもいきません。メンバー各々ギリギリのスケジュール調整をして「金曜往路、土曜ライヴ、日曜復路、祝日着の単発公演なら何とか…」というで9月18日の土曜日にハコを押さえてもらう事で纏まり、更に交通費の足しにBenに7inchをリリースして貰う段取りを組みました。

「どうせなら…」って事で私がTexas(BASTARD)から帰るのを待って6月に新曲をレコーディング＆SUGIにイラスト発注しました。

プレス期間を考えると時間が無かったので、サクッとミックスを仕上げ、"WORLD BURNS TO DEATH"のJack Control(Enormous door mastering)に無理を言ってマスタリングを急いで貰い、直接Benに送ってくれる様頼みました。

「リーダーに頼んだ筈なのに、やっぱり何か忙しいな、俺…」。同時進行のジャケットやポスター作りで寝不足の私の口からそんなボヤキが出始めた頃、エアチケットを手配する係のリーダーから嫌な情報が入りました。「格安往復チケットって3泊5日からなんだって！」「ふ〜ん、それが？」「俺たちのプランは2泊4日だったんだよ…、格安が無いとすると通常料金で買うしか無い…」「あ、そう。どれ位高いの？」「倍…以上…」「え？倍以上ぅ〜？！」。直ぐに知人の勤めている旅行会社に連絡をして調べてもらったんですが、結局リーダーと私は出発日を前倒しして格安で、残り2人は探してもらった通常料金より、ほんの少しだけ安い2泊4日のチケットを手配しました。

そして予想してなかった巨大な出費にたじろぎ、リーダーが「ギャラが貰えるなら1ステージでも多くライヴを入れてくれ！」とBenに緊急連絡を入れたのは出発迄あと2ヶ月って頃でした。

「今回は観光出来るかな？」。'08年の時は自由の女神は疎か、グラウンドゼロやセントラルパーク、っていうかマンハッタンそのものも見る事も無く忙しなく後にしたNY。

結局今回は後発2人が着く金曜日に1回、土曜のメインの後にもう1本の計3本のライヴを演る事に成ったんですが、一日早く出た私達は初日には「NYを見て廻る事が出来るのでは？！」と期待していました。

13時間ほど狭い座席に閉じ込められJFK空港に着くとBenが迎えにきてくれていました。短髪になって以前より明るい印象、元気そうで何より！

現地時間は16時「Ben、今日はどこへ行くんだい？」。てっきりNYに泊まって後発部隊を待ち合流後、初公演のペンシルバニア州フィラデルフィアに向かって120kmほど南下すると思っていた一行に驚きの返答が！

「今日はウチに行こう！」「え？」。Benの家はNYから北に向かってコネチカット州を越えロードアイランド州のプロビデンスという町に有ります。

ざっと250km以上、コチラで言うと東京〜名古屋間位でしょうか？以前移動した時には5〜6時間掛かった筈です…愕然とする一行。

しかし、ポツポツと来ていた雨がゲリラ豪雨同様のバケツをひっくり返した様な雨に変わる迄そう何十分も掛かりませんでした。すっかり観光気分は冷め「後数時間後の飛行機だったら着陸出来なかったな…」などと話しながら記録的な豪雨と成った雨の中ニューヨークを出発しました。

2年ぶりのBenの家は以前より片付けられ、音源などが棚にきちんと整理され少し綺麗に成っていました。「凄い量だね！」CDやヴィニールの在庫を見ながらインチキ英語で話しかけると「This is my life」とシンプルな答えが帰ってきました。そんな中"SD"の新譜"SYSTEMA SEVEN"のジャケが届いており、その出来に満足すると共に盤がプレス屋から上がってきて無い旨を説明されました。「う〜ん…残念だけど仕方が無い…」。その日は家からほど近いBarに行って


Asbury Parkにて

泊めてくれた2人の家の前で



"DD"のドラムBrianと合流、再会を祝して乾杯!彼もまたとてつもない"ジャパニーズHCオタク"(本人の弁・笑)である事が判り、且つ私と同い歳で有る事も判明。しばし呑んでから帰宅就寝しました。

明けて翌日、早い時間から"DD"のメンバーと合流してNYに向かいました。"DROP DEAD"はベーシストが代わって若い(といっても30代)ジョージという奴に成っていました。早めにNYに着いた一行はブルックリンのウイリアムズバーグというところで飛行機の着時間迄2時間程時間をつぶす事に成りました。とはいっても右も左も判らぬ土地、幸い雨は上がっていましたが迂闊に歩き回って迷子になったら事なので"DD"連と「"TRAGEDY"のメンバーもNY公演のときはココで呑む」という安いBarに同行しました。結局それらしい観光は出来ず(笑)!

その後ラ・ガーディア空港で無事後発部隊と合流後、再び車上の人となりました。

会場の"Mill Creek Tavern"に着いた頃にはすっかり暗く成っていました。直ぐに機材の搬入を始めたんですが、そいつが済んだか済まないかの間にShowはスタート!リハは当然無しです。

会場は2階建ての建物の1階ぶち抜きで縦長な感じの作りでフロアの後方にはカウンターや椅子とかがあるんで300人も入らないかな?右手前にはやはりアメリカではお馴染みのBarが併設されているスタイル、どうやら2階は黒いパーティーピープルの溜り場の様でしたが、5月に行ったテキサスと比べこの土地では上手く共存している様でした。比較的寒くて鋲ジャン率も高め、PDX同様に若いPUNXが多い印象。200人位入ったお客さんの中には5月にテキサスで売った"BASTARD"Tシャツを着ているPUNXも散見されました。

対バンは"BLACK SLIDER"と"STOCKPILE"というバンドが地元代表で出撃してくれました。特に後者はドラムに気合いが入っていて良かった様に思いました。3番手"DROP DEAD"は可成り支持されていて、結構な盛り上がり!

我等も負けじとアンコール含め22曲ぶっ飛ばしました。

Show後、Barに行くとマスターがビールを振る舞ってくれました。そこで地元の奴と歓談してこの会場には以前に"FORWARD"や"WARHEAD"も来ていると教えてもらいました、感慨深いです。

前後してメンバー含むツアー一行が機材の搬出している時に前回同様、今回も"SD"のスタッフとして同行した増田(SHORT FUSE)が手伝いもせずにBarで呑んだくれていた事はここに特記しておきます。

今宵の宿はココからNYに戻る途中大西洋側に道を逸れてニュージャージー州の(Bスプリングスティーンの1stで有名な)アズベリーパークという所に有る"DD"の友達の家との事でした。2～3時間は走ったでしょうか?静まり帰った住宅街に到着、かわいらしい平屋の家に案内されました。挨拶もそこそこに皆就寝。しかし…増田のイビキがウルサくて私は1時間と寝れなかった事はここに特記しておきます。

私とタカシ君が早朝散歩から戻るとボチボチ皆起き始めて、泊めてくれたリッチーとリサに改めてご挨拶、一緒に飯を食いに行きました。

みんなで入ったベジ食屋で私はスムージーを飲んだんですが馬鹿に美味かったのが忘れられません。後で会場に来るという泊めてくれた2人と一旦お別れしてNYに向かう一行。途中の高速道路上で「あっ!アレそうじゃねぇ!?」「おーそうだ(笑)!」。自由の女神が遠くに見えました、そしてそれが彼女との最初で最後の出会いでした。

ブルックリンの会場に着いて、旧新潟"Woody"を彷彿とさせるキツい階段を機材を担いで往復し、皆でセッティング。今回のメイン会場"EUROPA"は「昔はキャバレーだったのかな?」と想像させる作りのクラブで、比較的Liveも頻繁に演っている模様、キャパは500人以上入れそうです。ここで本日出演の3バンド中のもう1バンド、オハイオ州の"INMATES"と合流、ドラムのWedge(ex.9 SHOCKS TERROR)とは'08年のツアー以来の再会を果たしました。

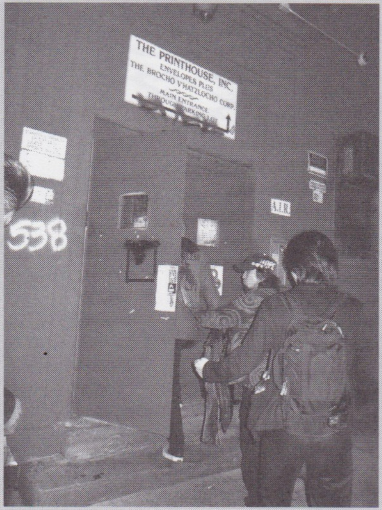
昔はVIP roomだったのであろう、だだっ広い楽屋で一休みして表に出ると入場者の列が出来ていました。絵に描いた様なマッチョな黒人が入り口に立っており、可成り厳しく入場者をチェック、IDカードを持っていなくて返されてしまうお客さんもちらほら。400人位入ったそうですが、中にはテキサ



EUROPA楽屋



Live@EUROPA



538 Jhonson入口

スから来てくれたジルやマット、日本語の上手いアレックス、日本に来た事もある"糞ガキ"キッド、等知った顔も多数。バリバリのPUNXも勿論居ましたが、意外と普通のなりをした人も多く、日本で言うと"LIQUIDROOM"の客層に近い印象、ノリもやはりやや大人しめな感じでした。しかし3バンドでこの人数が集まって来るNYの層の厚さはグレートです。感謝を込めて20曲ぶっ飛ばしました!

片付けも皆で済ませ、同じくブルックリンに有る、今夜の次の会場"538 Jhonson"に向かう前に軽く腹ごしらえ、Benとリーダーは思い返せば初日からピザばかり食ってます(笑)。

車で2、30分移動しただけなんですが、少し危険な臭いのする人気の少ない倉庫街みたいな所に到着、「え?ココ?」。なんて事は無い倉庫ぽい建物の扉を開けると中は物凄い落書きだらけ。「うわ、何か凄いな…」。2階に有る会場(部屋?)までビッシリと落書きされてます。部屋の中はテレビ局のスタジオの様な高い天井で広さは無理すれば350人位は入れそうな感じ、部屋の中に所々ワンルームのロフトみたいな高い床が有って、どうも誰かがソコで暮らしている様な感じでした。アフターパーティーと言っても普通にライヴを演るんで機材を搬入、ゴチャゴチャと機材だかガラクタだか判らない物が散らかっているステージ(といっても全く客席とフラットの江ノ島OPPA-LAスタイル)で出演する"SD"と"INMATES"は又もやセッティング。客層は先ほどの"EUROPA"とうって変わってアフロやラティーノ人種も様々、いかにも悪そうなPUNX達が集まってきました。どうやら200人位は入場料を払ったらしいんですが、どうももっと多く人がいる様です。

此処での"INMATES"のステージは凄かったです。後方の高い所から見ていたんですが、客の頭上を缶ビールが飛び交い、そこら中がビシャビシャ。更にはフロアに爆竹が投げ込まれ火薬臭と煙が立ち込める中で客が大暴れ。「う～ん、NYアンダーグラウンド恐るべし!」。そんな中えらいテンションでヴォーカルが叫んでいます、先ほどのステージより数段カッコイイ!「アフターパーティーでしょ!?」とタカを括っていた私も否応無しにテンションアップ!NY最後のステージに燃え上がりました。

最後の夜は'08年のツアー時に"TRAGEDY"の仲間として知り合ったポールの幼なじみが近所に住んでいるというので、彼のナビゲートで家の方に車で向かいました。途中Barにも寄ったんですが、ソコで"INMATES"にビールを奢ってもらいました、ありがとう!

閉店迄歓談した後、泊めてくれる家に歩いて向かったんですが、着いてビックリ。対岸のマンハッタンの摩天楼の夜景が一望出来る高級高層マンションで、リーダーは可成り興奮してサッサと一番窓側の床をキープしていました。

私も肝臓が悪いですが、Wedgeも今年に入り内臓疾患のため手術をした様です。"DROP DEAD"のヴォーカルBobも長年付合っている病気が有る様で翌日他のメンバーより一足先に地元に帰って行きました。

みんなイイ歳って事なんでしょうが、ズッと元気でやっていて欲しいものです。

若い連中にもがんばって欲しいですが、ベテランもがんばれー!



「曲順決めなきゃ!」



Brooklynにて



with INMATES

REPRINTED FROM MAXIMUM ROCKNROLL #329

INTERVIEWED : MIKE JOSEPHSON & ERIC MUELLER

COCK SPARRER

STILL RUNNIN' RIOT!!昨年の米国テキサス・パンク・フェスCHAOS IN TEJASにも登場し、幅広い層から今尚厚い支持を集めているUK Oi!パンク・バンドって…、最早この場でCOCK SPARRERの説明をする必要もないでしょう。10月上旬時点で最新号にあたるMRR誌329号を購入したところ、表紙を飾っていた彼らのインタヴューがとても興味深い内容だったので、MRRにお願いして転載させてもらいました。メンバーの人間性も伝わってくるインタヴューになっていると思います。じっくりとお楽しみ下さい!!

■会話の間中、ずっと飲んでいるね…。メンバーの中では誰が最高の酒飲み？もちろん最悪の酒飲みも聞いておかないとな。

Steve Bruce「聖書を愛読する絶対禁酒者の俺としては、誰かを中傷するなんて真似はしたくないね。ツラ汚しなメンバーの中には慢性的な酒の問題を抱えているやつもいるぞ。残念だがこれは俺が耐えていかねばならない十字架なのさ」

Colin McFaull「Mickeyは酒飲み部門の優等生だな。やつの家に行けば、種類の違うモルト・ウィスキーのボトルが1ダースも転がっているはずだ。Darylはあんまり飲まないね。Will（Murray/ロード・マネージャー）が最悪の酒飲みだ。2、3杯飲むと、どんなに自分はいいダチなのか、どんなに俺の面倒をみているのか、俺にとくとくと語り始めるんだぜ…」

Mickey Beaufoy「バンドの中で最高の酒飲みといえば俺のことだぜ。訓練を重ねてるからな。よくガキは2杯飲んだ後も15杯飲んだ後も変わりゃしないとか言うが、俺はずっと変わらないぜ。20代の初め頃、少なくみてもビールを6杯以上飲んだ後に、警察の酒気帯び検査を15回はパスしたね。だから俺はラッキーな新陳代謝の体質に違いないぞ。これで最悪の酔っ払いは危機一髪のところで逃れたな。
Willはいつやめるかわからないほどひっきりなしに飲んでいるから、最悪の酒飲みはやつに1票を入れるよ…。みんなそれぞれ、数年間のうちに何回かはやつをベッドまで運んでいるぜ…ああ、それから、スペインでこんな事件もあったよ。Willはバーの外の通りの真ん中に、パスポートやら財布やらを置いてきちまったんだ。俺はそれを見つけ出すために、朝までバーの中や外を探し回ったよ…その間、Willは気持ち良さそうに丸まってベッドで寝てたってんだからね…」

Steve Burgess「"最高の酒飲み"が何を意味するかにもよるな。みんな酒びたりさ。親友が酒好きであるのは素晴らしいことだよな。一緒にいるときはいつも飲んでるし、迷惑をかけるほど酔っ払っても全く問題ないさ。酔っ払うのが自分になれるもう一つの時間だってのも知っているしね。みんな飲むのが好きだしな。
俺はシングル・モルト・スコッチ・ウィスキーが好みだね。以前、あるツアーに出たときに、そのバーで一番高い酒をラージ・サイズのグラスでオーダーしたことがある。ちびちびやろうと楽しみにしていたんだ。俺としたことがマヌケなことに、Will Murrayに"お前も気に入るはずだぞ、この匂いは"と言って、香りをかがせようとグラスを差し出しちまったんだよ。Willは1秒もかからずに飲み干しやがった。そのときの俺の凍りついた顔は他のメンバーが覚えているよ」

Daryl Smith「公平にみても、メンバー全員とも相当飲めるぞ。経験豊かなプロ集団だ！それもトップクラス中のトップクラスだね。個人的にはジャックダニエルとブランデーがあうな。ビールにも夢中だよ。ベスト・ドリンカーをあげるなら、最後まで立っていられたやつになるね。俺も他のやつと同じように間違いなくベッドに直行組だな。2009年のベルリン、2010年のロンドンのときみたいに、一晩中飲んでいられたらハッピーだね。ベスト・ドリンカーを1人選ぶなら、もちろんWillさ！ワースト・ドリンカーの名前をここでうっかり口にしちまったら、飲んでる最中に喧嘩をふっかけられちまうよ！」

■よく飲む種類は？それと、お気に入りの食べ物は？

Daryl Smith「ダイエットペプシとカナディアン・チェダーチーズのサンドウィッチ（笑＆賞賛）」

Steve Bruce「ラガービールとカレー。最高だぜ」

Steve Burgess「トーストに豆をのせて焼いたのを食べながら、シングルモルト・スコッチ・ウィスキーをしこたま飲む。試してみてくれよ…うなるほど旨いぜ」

Colin McFaull「ジャックダニエルとコーラ、文句のつけようのないコックニー（ロンドンっ子）だろ。それからパイとマッシュ。フィッシュともしくはシーフードかな」

Mickey Beaufoy「好きじゃないものの方が思いつかないぞ。…リアル・エール（イギリスの伝統的なビール）、ワイン、スコッチ、サケ、VSOPブランデー。どれも大事な飲み物だよな。プレート料理…ステーキ、腎臓のプディングからカレーやスシまで」

■いいよ、いいよ、もうわかったよ…。これじゃ、サンデーロースト（イギリスの伝統的な料理）にまで話がとんじまう！COCK SPARRERでプレイしたショーで気に入っているものは？

Steve Bruce「次にプレイするショー。その次、その次さ」

Colin McFaull「まったく答えにくい質問だ。1992年にロンドンのアストリアでやった"再結成ショー"になるかな。10人も来てくれるのかと思っていたら、2000人以上だったかな?確かイングランドのモーカムで開催された"Holidays In The Sun"はフェスティヴァルでヘッドラインをつとめた最初だったよな?ヨーロッパ・ツアーの初日となった、1994年にドイツのメンヒェングラートバッハで行ったショーもだな。なんでドイツ人がCOCK SPARRERに興味を持ってくれるんだい?もしくはサンフランシスコやロンドンでの最近のショーになるかな?セルビア、ノルウェー、イタリア、スウェーデン、シカゴ、デンマーク、テキサス、オーストリアなどで大歓迎された近頃のショーも忘れちゃいけないな。ごめんな、でも一番のショーを選び出すなんてできない」

Mickey Beaufoy「確かに返答に困るな…たくさんありすぎるぜ。大規模な"プロフェッショナル"なショーもあれば、その反対に個人企画の熱く燃えたぎっているギグもある。決められないね。でも2010年のロンドン、2009年のサンフランシスコ、シカゴ、ベルリン、2000年のCBGBSがその中でも群を抜いているかな」

Daryl Smith「1992年のロンドンのアストリア。1994年のツアーもだし、他にもたくさんあるね」

Steve Burgess「どのショーも他より良いとは言えないよな。来てくれた全員に素晴らしい時間を与えたい。何マイルも離れた町からショーに来てくれる人もいるしな。それって素晴らしいことだろ?お気に入りがたった1つってことはないぞ」

■ではワースト・ショーは?

Steve Bruce「心に浮かんでくるのは70年代のショーのことだな。雪の中をリバプールまで車を走らせ、客5人の前でプレイし、また車で戻ってきた。受け取ったのは5ポンドだったぜ」

Colin McFaull「これもたくさんありすぎるぞ(笑)。俺たちを応援してくれるやつなんて1人もいなかった結成初期のショーになるな。この話しをしても面白いことは何もない」

Mickey Beaufoy「振り返ってみても、気に入らないショーは考えつかないんだよな。でも1994年に初めてウィーンでやったやつ





チャートのトップに入らなくても素晴らしいものを手に入れられる

がそうか。俺は40度以上の高熱が出て…ステージに立つのは辛かった…でも集まってくれた観客が俺を後押ししてくれたよ」

Daryl Smith「悪いショーは思い浮かばないな。全部を楽しんでいるぜ。ひでぇサウンドのステージはフラストレーションが溜まるが…。ミュージシャン的立場から見たら、ハードなこともあるけどな。一番重要な人間はファンだと心に留め、自分たちのフラストレーションに打ち勝たないとな。個人的な記憶にはそれぞれあるだろうし、悪夢のように感じたショーもあったかもしれないが、どのメンバーも観客に最高の時間を過ごしてもらうという一点にすぐに気持ちを切り替えているよ。客の反応以上にファンタスティックなものはないぜ。俺たちはとても幸運だし、深く感謝している…COCK SPARRERには最高の客がいてくれる」

■ロンドンで行われたショーに関してだけど、君らの"ホームタウン"で最後にプレイしてから、かなりの年月が経っていたよね?何か理由があってロンドンではギグをやらないと決めたの?それとも、ロンドンではギグをやれないようなネガティヴなヒストリーがあったのかい?

Colin McFaull「いいや、それは違うな。俺は自分たちがいつかまたロンドンでプレイすることは常にわかっていたと思うよ。ギグをオーガナイズする余裕がなかっただけだ。1年に1回か2回はギグをやるつもりだったよ。そうするのは簡単だったし、"Rebellionフェス"タイプのフェスに出るとかさ。俺たちは再結成後もギグを数多くやっていたが、ある人に"ニューヨークでプレイしているのはよく知られているけど、ロンドンではやっているの?"と聞かれ、ロンドンでギグをやらなくちゃならないってことがわかったよ」

Daryl Smith「どっちの理由も多少はあるかな。1983年にロンドンのフルハムのグレイハウンドでトラブルがあった後から、もうずいぶん長いことロンドンでギグはやってこなかった。ロンドンのアストリアでやった9年後の再結成ギグは素晴らしかったが、プレイを終えた後にまたトラブルが起きちまってな。その10年間、ロンドンの客の行動は全く変わっていなかった。自分たちでも海外でのほうが人気があると気がついたよ。レコードを買ってくれるファンがいるし、どの曲の歌詞もみんなが知っていてくれるし、バンドを見る価値もわかってくれている。
1990年代の大半はドイツを初め、ヨーロッパでプレイしていたね。イングランドで再びプレイする前には、アメリカのウエスト/イースト・コーストの両方でもやったしな。俺たちを評価してくれる人たちの前でプレイするほうを選んだんだよ。つまりトラブルを巻き起こしたい客を避けることを選んだのさ。COCK SPARRERのコンサートでは1人として怪我人が出ないのが当然なんだ。俺たちはファンに対して責任のような感覚を感じている。ありがたいことに、UKのパンクとスキンヘッズのシーンは今はとてもヘルシーだよ。俺たちはロンドンに"帰宅"してプレイするときが来たと感じたのさ」

■バンドの初期は"フーリガン"としても名を知られていたけど、積極的にフットボール・クラブをサポートしていたのかな?熱狂的なイングランドのサポーターでもあるよね?

Colin McFaull「初めてブーリン・グラウンドに足を踏み入れたのは7歳だったね。チビが試合を見るには牛乳かごを持参して、その上に立つのがいいぜ!あれ以来、ウェストハムのファンだよ。ここの出身なら、みんながそうなる。俺の子供もガキの頃からウェストハムのファンとしての試練と苦難を経験しているぜ。"ハンマー"であると、のん気にかまえることや人生の浮き沈みも学ぶね。俺とWillとBurgessはずっとウェストハムのファンだぜ。Steveはミルウォールのファン。でもそれについちゃ、Steveと話したことはないな。Mickeyは常勝軍団のアーセナルをサポートしているぜ!Darylはワトフォードをサポートしている。え?もちろんだよ!俺はイングランドもサポートしているぞ。でもウェストハムが1番で、次がイングランドだ」

Mickey Beaufoy「6歳からアーセナルをサポートしてるとは堂々とは言ってないんだけどね。アーセナルは俺が見に行った初めての

チームで、そのときチームは勝利した。俺はロンドンのイーストエンドで厳しくしつけられたが、(イーストエンドのクラブ・チームの)ウェストハムは俺の敵になったんだよな。他のメンバーや親父がウェストハムをサポートしているからね」

Daryl Smith「俺はワトフォードをサポートしているぜ。2人のジョンがこのチームを有名にしたよな…Elton Johnと伝説的なARGY BARGYのWatford Jon。COCK SPARRERがこのバンド名からタイトルをつけた「Argy Bargy」って曲を書いたのは有名だよな!でかいフットボール・クラブでもないし、確かにフーリガンのクラブでもない。家族的でフレンドリーだと評判が高いね。ワトフォードはロンドンに近いために、たいていその辺りに住んでいる人はロンドンのクラブ・チームをサポートしていて、そういうチームのフーリガンになる。そういや、こんなことがあったな。Jonと俺はある事件の後にあやうく捕まっちまうところだったが、どうにか免れたよ。警察署で俺はクラシック・ピアノを弾いていると答えてね!」

■今では時代も変化し、誰もが成長したけど…君らにとって、今のフーリガン/スキンヘッドは?

Steve Bruce「フーリガンやスキンヘッドとしての自分の役割をわからないなら、フーリガンやスキンヘッドになるべきじゃないぞ!」

Colin McFaull「消えちまうのは目にしたくない大事な文化だな。音楽やファッションからみて、消滅しちまうにはあまりにも大きな遺産だ。若いスキンズも歳のいったスキンズも現在進行形でいかないと。そういう責任があるぜ。しかし若いスキンズをギグで見かけるが、トラブルや何かが起こる心配はなさそうだ」

Mickey Beaufoy「ここ最近はそれほど多くのフーリガンは目にしないな。でもそれは俺が歳をとったからで、全盛期ではないからだろうね。シーンにいる大部分の代表的なやつらは、今じゃ常識があって、喧嘩を始めるより喧嘩を止める側に感じるよ」

Daryl Smith「フーリガンでなくてもスキンヘッドであることはできる。フーリガンは特定の社会の時代の産物だってことを思い出さないとな。今や、フーリガンであるのやそれに人生をつぎ込むのは時代遅れなんだろうよ。スキンヘッドはそれぞれにとって誇りであり、懸命な努力を重ねて自分のポジションを良いものにしたり、自分自身で何かを作り出すことだったよな。ブーツをはき、吊りズボンを身に着ける必要なんてないぜ。精神に刻み込まれているものだし、心の中にあるものだ」

■君らの曲のもとに、レイシズム/ファシズムをサポートする人間たちが結集してくるのはどう感じている?

Steve Bruce「実際の人生を生きてくれ」

Mickey Beaufoy「レイシズム/ファシズムと同じように、左翼の過激主義者も同じだと感じるよ…極端なものはまた他の極端なものと同じくらいに最悪なものさ。"憎しみに満ちた右翼、左翼よ…俺たちは戦いたくない"という、感傷的かもしれないがこのほうを俺は好むよ」

Daryl Smith「過激主義をかたちにしていくために俺たちの曲を使おうとするやつらがいるなら、右でも左でも…全く本質を理解していないってことだ」

■みんなパンク以前の音楽にも影響を受けているだろうけど、君らにとって"パンク"という言葉が意味するものは?

Steve Bruce「従うな、顔色をうかがうな、自分に誠実であれ」

Mickey Beaufoy「俺にとってパンクは反逆者を意味するよ…自分のルーツや発言に真実を留めたままでな」

Colin McFaull「パンクはしばらくの間に大改造されちまったんだ。1976年には音楽産業も音楽業界も、ある場合はインディペンデントな大企業のふりをすることで運営されていたしな。資本主義の出現以来、あらゆるものがビジネスとして運営されてきたのと同じように、パンクも損益のみに焦点があてられていた。それは今も続いている。
パンクは簡潔に言っちまえば、ルールブックを捨て、基準から漕ぎ出すことだ。いきなりバンドをやれなくなるようなことがあっても、観客のためにプレイすることだけにこだわるな。ファンジンを作ったり、ショーのレヴューを書いたりしていた者は、自分ちの居間で印刷していたんだ。インディペンデント・レコード・レーベルは地域問わずサポートしていた。それぞれ自分のやりたいように活動するやつらが続々と湧いて出てくるのを見るようになっていったよ。短い間はエキサイティングだったし新鮮だった。しかし、それがそれ自体を食い始めるようになり、内部崩壊していった。一般的なミュージック・シーンは成功するために、昔と同じ様に"安全"な決まったやり方を頼みにしていたしな。パンクも同じ落とし穴にはまったよ。
"ストリート"ではなく、"キングスロード"に重心が移っていったのさ。Oi!はCOCK SPARRERにとってはベストなものだった。俺たちはボンデッジ・パンツもはかなかったし、アートスクールにも通ってなかったぜ」

■COCK SPARRERのファンは"パンク・バンド"として君らを認識している。SMALL FACESなどのバンドとパブでやっていた頃の、初期のお気に入りの思い出を話してもらえるかな。

Colin McFaull「1972年から1976年まで、出来る限り一つでも多くのギグをやる機会を逃さないようにしたぜ。アパートメントから







何度も追い出されないように頑張ったし、少なくとも1日おきには何か食べられるようにも頑張ったよ。週末の間中、金のやりくりを考えながら、うんざりしたまま働かなければならなかったな！一緒にやったバンドは数限りないし、どうしようもないほど最悪なバンドもあったぞ。全てが勉強になったよ。素晴らしいバンドを見たり、そういうバンドの曲を聴いたり、彼らがオーディエンスとどんなふうにやり取りをしているか、全てを自分たちの中に刻みつけたぜ」

Mickey Beaufoy「ああ、たくさんのバンドと共演したな…大抵いつも機材と一緒にGPOヴァンの後ろにすし詰め状態になって、実にひどい旅をしてたよな。でもSMALL FACESのサポートをまる2週間やったときは、本当に贅沢だったぜ。パブの柱の影の隅っこに機材をセットする夜もあれば、週末に誰かのサポートでちゃんとしたステージに立ち、1000人の前でプレイすることもあった…。そういやいつも、経費と何杯かのビールは…自分たちの分は自分たちで払ってたな」

■Steve（Bruce）の新しい本『Best Seat In The House』（COCK SPARRERストーリー）を読むと、昔の新聞の切り抜きなども大量に見られてとても面白かったよ。君らがフーリガンや右翼/ナショナリストのような悪いイメージを持たれていたことに、最初から少し動揺していたということも書かれていたね。フラストレーションが溜まっていたとは思うけど、バンドなんてやってられないって気持ちにはならなかったのかな？それとも辛抱強くやり通す決心をしたのか、マスコミや世間に自分たちを証明しようとしたのか？

Steve Bruce「やめたいとは思わなかったな。でも2度ほど活動停止していた時期の状況もあったし、休止せずにはいられなかったのも実際のとこさ」

Colin McFaull「当時を振り返ると、めちゃくちゃで収拾がつかなくなったギグが何回かあった。COCK SPARRERのショーは誰もがそういうもんだと思っていたのもあったし、自分たちのせいで引き起こしちまったってこともある。ある意味、俺たちも共犯だった。大怪我をしている人がいると自覚し、ステージに対して誠実に考えるようになったよ。それでしばらくの間、ギグをやらないことも決めた。メンバーにもファンにも、死んじまう人間は出てほしくなかったから」

Mickey Beaufoy「個人的に思うんだが、マスコミの報道のせいもあって、80年代初期にはCOCK SPARRERのギグは暴力的だと受け止められていたと思うんだ。アルバム『Shock Troops』のプロモーション・ツアーに出ないと決めたのも、理由の中心はそれだよ。流れに逆らって泳ごうとしていた感じだった。あの頃、音楽で生計を立てているとは言えなかったし、人生のその2年間はもう既に音楽で食っていくのは諦めていたしな。金を稼ぐ必要があった。決まっていたギグが4つあったが、COCK SPARRERでプレイするのは一旦やめたよ」

■バンドとして決意を下してきた中で最も誇りに思えることは？逆に誇りに思えない決定は何だい？

Steve Bruce「最も誇れるのはCOCK SPARREを真剣に信じていたことかな。それから再びプレイするようになったこと…。同時に、COCK SPARRERが再始動するために、俺の最高の仲間を狂気に巻き込んじまうことによって、大事な仲間を失うかもしれない危険を冒したことかな」

Colin McFaull「特に誇りに思えるのは、俺たちが選んできた決意に妥協が一切なかったことだと思う。意識して誰かをだますこともなかった。ファンもプロモーターもだ。俺たちがバンドをやり続けていくなら、正しくやり通すと決意したよ。最悪の決意は『Shock

Troops』のスリーヴにMickeyの写真を載せ忘れたことかな。全部の曲で弾いてるっていうのにさ」

■30年以上も前に、2010年にCOCK SPARRERがまだ演奏をしているとは思っていた?

Steve Burgess「もちろんさ」

Steve Bruce「まさか。でも死ぬまでやるつもりだ」

Colin McFaull「全く考えてもなかったな。これはガキのゲームのはずだろ?」

Mickey Beaufoy「バンドで音楽をプレイしないなんて想像もできないな…沈黙していたときもな。俺は2人のSteveと(Steve Bruceが運営するミュージック・パブの)Bethnal Greenでカヴァー・バンドとして定期的にプレイしていたよ。またこうやって世界中の会場でショーをやるようになるとは予想もしていなかったぜ…信じられないくらい素晴らしいよな」

■もう2011年が近づいているけど、COCK SPARRERの40年間が世界にどう受け止められていてほしい?

Steve Burgess「Steveの本を読んでくれたら、学生時代にバンドを結成する夢を持ち、40年間も一緒にやっているということがどんなことかをわかってもらえると思うよ。例えば初めは大金持ちのポップスターになることに夢中かもしれないやつも、チャートのトップに入らなくても素晴らしいものを手に入れられるぜ」

Steve Bruce「音楽業界に痕跡を残せたのは素晴らしい。あるいは傷跡かもしれないがね。自分たちの業績を非常に誇りに思っているぜ。俺は変わらないだろうよ。俺たちはメインストリームの音楽産業の外側にいる。それが俺の好きなやり方だ」

Colin McFaull「自分たちでも仰天するほど評価された曲が1つ2つある。その2曲でもいいから人々の記憶に残り、誰かにカヴァーされ続け遺産になっていったらいいね」

■Colin、その使命は既に成し遂げているじゃないか!

Mickey Beaufoy「そうだな…バンドが支持されるようになったのは驚きだよ。俺たちのアンセム的な音楽をみんなが長いことずっと楽しんでくれることを望むぜ。俺たちの情熱を同士のようなやつらと共有するための方法を作り出す忠実な仲間の集まりとして、人々はCOCK SPARRERを認めてくれているんじゃないかね」

■君らは"音を聴いたことのないベスト・パンク・バンド"という言われ方をしてるよね。これについてはどう思っている?

Steve Bruce「言い当てていると思うよ。いいね」

Colin McFaull「俺も気に入った。ある日俺たちは空港のバーにいたんだが、何人かのやつらがバンド名を尋ねてきたんだ。伝えると、呆然と俺たちを見つめたよ。そして"聴いたことがない"と言ったね。やつらは俺たち以上に落胆していたぜ」

Steve Burgess「正直に言うと、その言葉にはちょっと腹が立つな。俺たちは世界中でプレイしているし、ギグのチケットは売り切れるよ。うまくいけば素晴らしい夜をみんなに与えられる。曲は気に入ってもらえているようだし、良いショーになるように一生懸命にプレイしているぞ。イギリスのメインストリームのメディアは俺たちを無視しがちだ。しかしブラックプール・パンク・フェスティヴァルのヘッドラインもつとめたし、素晴らしいプライベート・パーティに出演したりしているんだ。知ろうともしないんなら、クソだな」

Mickey Beaufoy「俺は変わらないぜ。もしビッグになってチャンスをつかんだとしたら、俺たちは変わるか?俺たちはずっと友達だろ?ずっと活動しているよな?今いるこの場所から自分の人生を変える気なんてないさ」

■COCK SPARRERとしてこの先、一番楽しみにしていることは?やり残していることはあるのかな?

Steve Bruce「世界に飛び出し、COCK SPARRERを求めている人たちに会うことかな。まだプレイしたことのない場所でやってみたいね。個人的にはギグをやり続けたい」

Colin McFaull「義歯とケツの交換」

Mickey Beaufoy「またすぐにロンドンを体験したいね。でも俺の好きなエリアのアメリカ合衆国やカナダなんかの西側でギグをやるのもいいよな…シアトルやバンクーバー。日本にも熱いファンがいると聞くから、日本でプレイするために円(円高なんだろ)を持っているぜ」

Daryl Smith「アルバムを作る。日本に行く。オーストラリアに行く。バンドをやるってことは本当に魅力だ。様々な世界を見なければ違ったものは得られないし、いろいろなバックグラウンドの人々とも出会えないよな。人生の仕事は音楽を通して互いに結びつくことだよ」

■「Spirit of '76」という曲について話してみてよ。

Steve Bruce「1976年にジンを飲むこと」

Colin McFaull「Burgessが答えるよ」

Mickey Beaufoy「Burgessが答えると思うぜ」

Steve Burgess「1976年のイングランドには音楽革命があり、パンク・ロックが登場したよな。アメリカ人のほとんどがイングランドでパンクが始まったのは1977年だと思っているようだがね。しかし実際には、1976年の後半にSEX PISTOLSが『Anarchy In The UK』をリリースしたんだよ。





Steve Bruceが本に書いているように、あの当時流行っていた音楽のジャンルに興味が持てない俺たちみたいなやつらがパンク・ロッカーになった。俺たちはみんなの嫌われ者だったが、まったく気にしちゃいなかったぜ。「Spirit of '76」は興奮が渦巻いているような時代のことだよ。この曲は過去の昔話を書く代わりに、俺たちが肌で感じたあの時代の切迫感を書いている。中心的なポイントになれる人物を必要としていたというもので、シーンを言い表しているものとは違うな。しかしパンク・ロックのギグを初めて見たときのあの感覚はわかるだろ。何回かその曲を聴いてくれたなら、1人の人物が現れるんじゃないかと俺は希望を持ってたぜ。これは「Where are They Now」という曲の"前編"のようにも考えられるな。幻滅が蔓延し定着する前の、あの当時の熱気を帯びていた全てを喚起するものさ。1976/1977年の後には流行のパンクに飛び乗ろうとする多くのバンドがいることを俺たちは悟ったよ。ただ注目を集めるためにパンクを使ったり、すぐに本来のカラー、精神、メインストリームのロックに戻ってしまうバンドたちをね…。80年代に入り、文字通りそういう状態になったが、俺たちは自分たちのやりたい音楽を好きなようにレコードにした。俺たちは『Shock Troops』という1977タイプのパンク・ロック・アルバムを作ったんだ」

■COCK SPARRERの歌詞はたくさんの人に愛されているけど、自分たちではどの歌詞が気に入っている？

Steve Bruce「「Because Your Young」だな。これを演奏するとき、たまに首の後ろの毛が震え立つぜ」

Colin McFaull「"Things get worse with every hour. The future fades into the past. All they want is total power, climbing on the backs of the working class"(「Watch Your Back」より)だ」

Mickey Beaufoy「「Secret Army」の"when a mother cries for the son she had, that's when the world's gone mad"のこの部分だな。俺の首の後ろ毛はここに反応するよ。あとは「Out On An Island」も完璧な歌詞だし、「Lies」はBurgessの書いた典型的な上手い歌詞だな」

■Steveの本に対するコメントは…。

Steve Bruce「天才の本だ」

Colin McFaull「嘘、偽りが満載。いいな、信じるなよ。真面目な話し、素晴らしい本だよ。うまいこと昔の記憶を一つにまとめ上げた。良い受け止め方をされて俺も嬉しいよ。Steveは毎晩ほとんど寝ずに取りかかっていたな。俺も忘れていた大量の作品や物語を思い起こさせてくれたのも良い点だね」

Daryl Smith「ファンタスティック…記憶にとどめておきたい全てをまとめるのは、コレクターやファンの夢だろうね。俺は何千回と物語については聞かされていた。だから、さしずめあの本は俺のために作られた追加みたいなものだな。オリジナルのチケットの半券やフライヤーなんかの貴重なものも見られるぜ。Steveはバンドの古いメンバーだから彼に任せたんだよ！」

Mickey Beaufoy「俺も喜んでいるよ…人々の疑問に答えているし長年に渡って徐々に集めた切り抜きや素材の詰まった宝庫だね。昔の英語教師がこれを読まないことを望むぜ。読んだらSteveの英語の試験の成績を取り消すかもしれないからな」

Steve Burgess「俺もずっと本を書きたいと思ってきたが、あいつがやってくれたよ」

■最後に人生で最も影響を受けた人物を教えて。

Steve Bruce「おふくろ」

Colin McFaull「おふくろとカミさん」

Mickey Beaufoy「ガキの頃はおじいちゃんだな。彼は自分の主義を通すことを教えてくれたよ。また自然への愛を与えてくれた」

Daryl Smith「音楽的にはMADNESSのキーボード奏者のMike Barson。歌詞はBurgess。アティテュードの面は初期のJohn Lydonかな。でもおじいちゃんは自分のために考えるように励ましてくれた人なんだよな。いつも正しいとへりくつをこねる議論好きのバカな俺を咎めてくれたよ！」

Steve Burgess「1人には絞れないぞ。間違いなく両親だな。ありふれた言葉になるのかもしれないけど、バンドのメンバーに影響を受けているよ。それからカミさんと子供たち、他のメンバーのカミさんと子供たちにもだ」

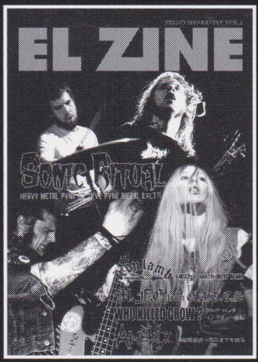




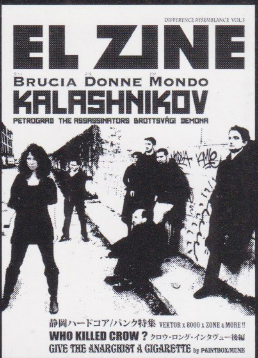
VOL.0 UTOPIA



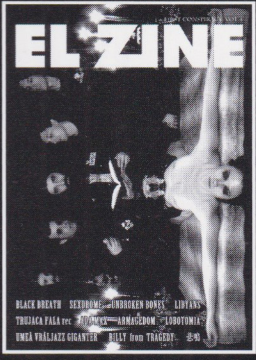
VOL.1 MOONLESS



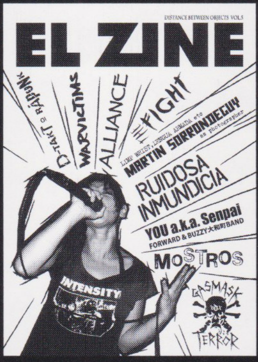
VOL.2 SONIC RITUAL



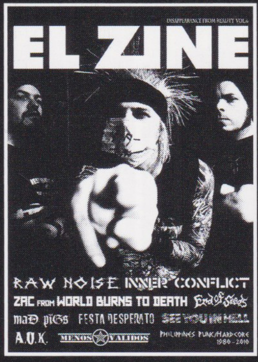
VOL.3 KALASHNIKOV



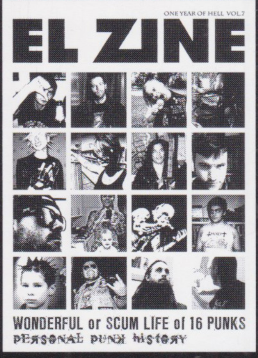
VOL.4 BLACK BREATH



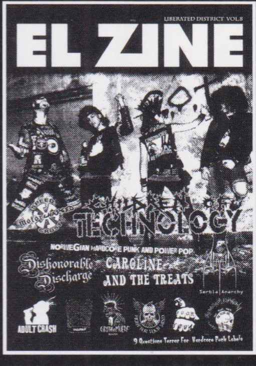
VOL.5 RUIDOSA INMUNDICIA



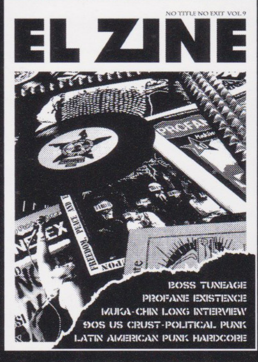
VOL.6 RAW NOISE



VOL.7 SIXTEEN PUNKS



VOL.8 CHILDREN OF TECHNOLOGY



VOL.9 PROFANE EXISTENCE

BACK ISSUES

PRICE :
ALL Five Hundreds Yen

SOLD OUT :
Vol . ZERO and Vol . ONE

always tedious editor's notes

映画「キャタピラー」を見に行きたいな～とずっと思っているのですが、時間がとれずに未見なのです。今号の入稿を終えたらすぐに行く予定なのですが、あまり乱歩原作(芋虫)というのを出していないのは何故なんでしょう。戦争に比重を置いているみたいだから(=原作とテーマが違うから)でしょうか。でも楽しみだな～、最後の井戸のシーンとかどうなっているんだろう。
…というわけで見事に全く脈略がないですが、EL ZINEもおかげさまで11冊目となりました。次号は発行まで少し時間を頂いて、通常より多少ヴォリューム・アップできたらなと考えていまっす。お楽しみに～。

発行者　山路健二

次号の発売は…クリスマス辺りに　※インタヴュアー及び執筆者名の記載のない原稿は全て山路健二が記した

EL ZINE vol.10　2010年11月1日発行　HP・BLOG・MYSPACE・MIXI・TWITTER→NO FUN　E-MAIL→unno13@gmail.com

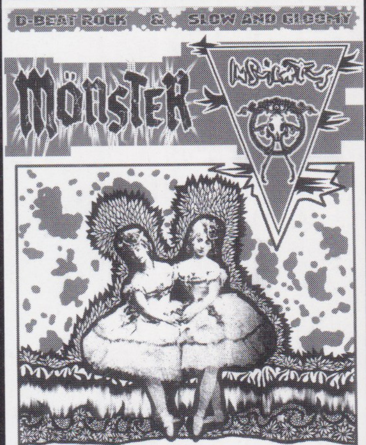
SHOP and DISTRO

直納しているレコード屋さんetc　ANSWER(名古屋)　BASE(東京・高円寺)　BOY(東京・高円寺)　DISK UNION(関東圏)
G-SIDE(浜松/ライヴハウス)　HARDCORE KITCHEN(神戸)　K-CLUB(高知)　record KNOX(水戸)　MISERY(広島)　NAT(東京・西新宿)
PUNK&DESTROY(大阪)　TIME BOMB(大阪)　WOODY(新潟/ライヴハウス)

ディストロして頂いている方々　FUJIさん(REALIZED/北海道)　SOUICHIさん(UNDER THE SURFACE/東京)　YUさん(SKIZOPHRENIA/津山)
はっちゃん(BURST HEAD/沖縄)　紺野さん(SPROUT RECORDS/仙台)　ONIGIRIさん(WATERSLIDE/東京)　YUKIさん(SP RECORDS/東京)
CR JAPAN(東京)　MCR COMPANY(京都)









EL ZINE ¥500

ARTWORKS BY KASKA-DOGSTAILART



ARTWORKS BY KASKA-DOGSTAILART

EL ZINE

DESIGN THE GRADUAL CHANGE VOL.10

EL Z



POLISH WOMAN PUNK ARTIST

KASKA-DOGSTAILART

チェコスロヴァキア・パンク・ロック/ハードコア

その知られざる歴史　1979-1989

INSANE SOCIETY

INEPSY

SYSTEMATIC DEATH

PIPECUT GIG IN NY

MIDWAY STILL

Cock Sparrer

Tokyo Leather Boys

